

地域と文化芸術をつなげるコーディネーター
インタビューによる事例調査
報告書

変化する地域と越境する文化の役割

令和4年3月

一般財団法人地域創造

ごあいさつ

一般財団法人地域創造では、文化・芸術の振興による創造性豊かな地域づくりを目的として、地方公共団体との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成、公立文化施設の活性化支援、情報提供、調査研究などの事業に取り組んでいます。

こうした事業の一環として今年度は「地域と文化芸術をつなげるコーディネーター インタビューによる事例調査」を実施しました。この報告書は、その成果をとりまとめたものです。

「地域における文化・芸術活動を担う人材の育成等に関する調査研究」（H28 年発行）から 5 年が経過し、文化芸術に関する法整備（「文化芸術基本法」「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」）やオリンピック・パラリンピックなど、前回調査から今日までの地域における文化芸術を取り巻く環境が変化し、劇場・ホール職員に求められるスキルが多様化しています。また、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からアーティストの県を跨いでの移動に制限が設けられ、各自治体での文化芸術活動が困難な状況となり、より一層地域と文化的なつながりを構築できる人材の育成が求められています。

本調査では、こうした現状と公立文化施設を取り巻く環境の変化を踏まえつつ、地域と文化・芸術のつなぎ役であるコーディネーターの活動を具体的に紹介することで、“これから”求められる人材のあり方について考察を行い、課題の整理や目指すべき将来像を検討することを目的として実施しました。とりわけ今回は、現場の状況や意向をしっかりと把握すべく、多くの方を対象に長時間にわたるインタビューを行い、またアドバイザーをはじめ関係者による座談会等を行いました。

この調査研究にあたり、多くの方々にご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

この成果が、地方公共団体や公立文化施設の職員の方々をはじめ、各地域で文化・芸術に携わる方々の参考となり、文化・芸術による創造的な地域づくりに活用されれば幸いです。

令和 4 年 3 月

一般財団法人 地域創造
理事長 山本 信一郎

目次

序 調査の実施概要	i
第1部 75の糸口―調査結果から見てきたこと	1
調査結果から見てきたこと	3
75の糸口	
骨子	10
A. 文化政策・文化行政・文化施設	12
B. 劇場・創造・文化の場づくり	15
C. アート・アーティストの役割	17
D. コーディネーターに求められる姿勢	20
E. コーディネーターの活躍に向けて	23
アドバイザーからの提案	
日常型劇場の冒険（小川智紀）	26
文化行政の「あいだ」で働くコーディネーター（野村政之）	28
専門人材然としない存在がいることの意味（若林朋子）	30
第2部 事例調査レポート	33
事例1 市民協働で公立文化施設のあり方を更新する	
長野隆人（いわき芸術文化交流館アリオス）	35
事例2 越境と更新を繰り返すアーティスト・表現としてのコーディネート	
アサダワタル（文化活動家／アーティスト、文筆家）	51
事例3 地域や政策の境界を超える NPO ならではの多様な取り組み	
小川智紀・田中真実（NPO 法人 S T スポット横浜）	62
事例4 演劇や表現から地域の生きにくさと向き合う民間劇場、市民グループ	
荒井洋文（犀の角／一般社団法人シアター&アーツうえだ）	78
事例5 支援と提案で文化政策を転換し、地域の未来へ投資する	
野村政之（長野県県民文化部文化政策課）	93
事例6 公民館を市民自治のプラットフォームとして捉え直す	
宮城潤（那覇市若狭公民館）	105

第3部 座談会記録.....	119
1. コーディネーターとしての出自と現在の仕事	121
2. 社会や地域に対する問題意識——アートを通して何と向き合うか.....	122
3. なぜアート、文化芸術なのか.....	126
4. 演劇の力、劇場の力.....	129
5. 市民のポテンシャルを引き出して、結果につなげる	130
6. 課題解決と価値創造.....	132
7. 雑談・相談から始まること	136
8. 場づくり、しかけづくり	137
9. コーディネーターが大切にしたいこと	138

序 調査の 実施概要

1. 調査の目的

「地域における文化・芸術活動を担う人材の育成等に関する調査研究」（H28年発行）から5年が経過し、文化芸術に関する法整備（「文化芸術基本法」「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」）やオリンピック・パラリンピックなど、前回調査から今日までの地域における文化芸術を取り巻く環境が変化し、劇場・ホール職員に求められるスキルが多様化している。また、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からアーティストの県を跨いでの移動に制限が設けられ、各自治体での文化芸術活動が困難な状況となり、より一層地域と文化的なつながりを構築できる人材の育成が求められている。

本調査では、こうした現状と公立文化施設を取り巻く環境の変化を踏まえつつ、地域と文化・芸術のつなぎ役であるコーディネーターの活動を具体的に紹介することで、“これから”求められる人材のあり方について考察を行い、課題の整理や目指すべき将来像を検討することを目的とする。

2. 調査の実施内容

(1) 意見交換会の実施

公立文化施設や地方公共団体の職員、人材の育成や確保のあり方に関する専門的な知識や経験、課題意識を有する次の専門家3名にアドバイザーを委嘱し、事例調査対象や実施方法、調査結果の整理・分析や報告書のとりまとめについて、専門的な見地から意見交換を行った。

[アドバイザー]

小川智紀（認定NPO 法人STスポット横浜 理事長）

野村政之（長野県文化政策課 文化振興コーディネーター）

若林朋子（プロジェクト・コーディネーター／立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科 特任教授）

[実施状況]

第1回（2021年6月9日）

- 調査研究の趣旨、内容、スケジュール等
- アドバイザーの考えるコーディネーター像
- 調査対象・調査項目について

第2回（2022年2月1日）

- 事例調査結果・座談会の報告
- 報告書のとりまとめについて

第3回（2022年3月7日）

- 「第1部 調査結果の総括的なとりまとめ」について
- 報告書の副題について

(2) 事例調査

地域と文化・芸術のつなぎ役であるコーディネーターを対象に、コーディネーターが活動拠点とする現地を訪問し、実際の活動状況や成果、課題等に関する詳細なインタビュー調査を実施し、あわせてコーディネーターの連携先、関係先（劇場・ホール、アート NPO、地域の文化団体、地方公共団体等）についても、必要に応じてグループインタビューを行った。

調査対象の事例は、既存資料やインターネット検索などを参考にピックアップした約30名のリストから、意見交換会での検討に加え、地域や活動の内容、コーディネーターの所属団体等のバランスを考慮し、次の6組・7名とした。

事例調査の結果は、本報告書「第2部 事例調査レポート」に事例ごとに詳細なレポートとして掲載した。

〔調査対象事例〕

長野隆人（いわき芸術文化交流館アリオス 支配人）

アサダワタル（文化活動家／社会福祉法人愛成会品川地域連携推進室 コミュニティアートディレクター、アーティスト、文筆家）

小川智紀（NPO 法人 ST スポット横浜 理事長）・田中真実（NPO 法人 S T スポット横浜 事務局長／横浜市芸術文化教育プラットフォーム 事務局長）

荒井洋文（一般社団法人シアター＆アーツうえだ 代表／プロデューサー）

野村政之（長野県県民文化部文化政策課 文化振興コーディネーター）

宮城潤（那覇市若狭公民館 館長／NPO 法人地域サポートわかさ 理事）

〔調査項目〕

- コーディネーターとしての活動内容
- これまでの成果
- 文化芸術を取り巻く地域の環境条件
- 問題点・課題
- 今後の方向性、将来展望 など

(3) 座談会

意見交換会のアドバイザー、事例調査対象のコーディネーター 8 名が一堂に会した座談会を行い、

地域における文化芸術の役割や可能性、コーディネーターの現状や必要性などについて意見交換を行った。座談会の結果は、本報告書「第3部 座談会記録」に掲載した。

3. 調査期間

令和3年4月1日～令和4年3月31日

4. 調査の実施体制

本調査は株式会社ニッセイ基礎研究所に委託して実施した。

吉本光宏（ニッセイ基礎研究所 研究理事・芸術文化プロジェクト室長）

森隆一郎（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室 客員研究員）

太田真奈美（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室 研究アシスタント）

第1部 75の糸口—調査結果から見えてきたこと

調査結果 から見えて きたこと

◎ コーディネーターのあり方だけでは捉えきれない調査結果

この調査研究の目的は、「地域と文化芸術のつなぎ役であるコーディネーターの活動を紹介することで、“これから”求められる人材のあり方について考察を行い、課題の整理や目指すべき将来像を検討する」ことであった。

事例として取り上げた6組・7名のコーディネーターの調査を経て見えてきたことは、コーディネーターの活動の実態や成果、今後の方向性などにとどまることなく、これからの地域における文化行政や公立文化施設のあり方を根本から問い直すような内容であった。後述するように、この報告書ではそれらを「75の糸口」として整理したが、調査結果から見えてきた論点をあえて5つに集約すると、次のように整理できよう。

- 文化行政や公立文化施設を取り巻く環境が大きく変化し、従来とは異なる考え方、取り組みが求められていること
- 地域社会における問題や課題が複雑化し、新型コロナがそのことに追い打ちをかけ、顕在化させていること
- 教育、福祉、まちづくりなど、従来の政策分野ごとの行政施策には限界やほころびが生じ、それらの分野をまたがる、あるいはその隙間からこぼれ落ちる問題や課題こそ対応が求められていること
- 文化芸術やアートには、人々に気づきを与え、一人ひとりの行動を促したり、地域に変化を生み出したりするポテンシャルがあること
- コーディネーターは文化芸術に軸足を置きつつ、多様な政策領域に越境して、地域や市民と協働しながら、今日の問題や課題と向き合っていること

◎ コーディネーター登場の背景

文化行政やアートマネジメントの分野において、コーディネーターが注目されるようになったきっかけのひとつは、1990年代後半から各地で活発になったアウトリーチ活動であろう。文化施設や芸術団体がアーティストを学校や福祉施設に派遣し、ワークショップ型の活動を行うことで、さまざまな成果が生まれ、芸術の持つ幅広い効用や可能性、社会的な役割が認識されるようになっていった。

アウトリーチが定着するにつれ、アーティストの活動する場所は、劇場や音楽堂、美術館などの文化施設から、学校や高齢者施設など教育や福祉の現場に広がり、地域のさまざまな施設や場へと拡張してきた。そうした活動を推進するために、文化施設やアーティストと学校や福祉施設との仲介役を果たしたのがコーディネーターと呼ばれる人たちだった。

地域創造の事業でも、公共ホール音楽活性化事業（おんかつ、1998年～）、公共ホール現代ダンス活性化事業（ダン活、2005年～）などにおいて、コーディネーターが重要な役割を担っている。

コーディネーターは、アウトリーチをはじめとした地域における多様な文化的実践の企画から関係

者間の調整、アーティストのサポート、現場のしつらえやマネジメントを担う人材として、その重要性が指摘されてきた。一方で、必ずしも専門的な職能として認められないばかりか、多くのケースで十分な報酬が支払われていない、というのがこれまでの実態である。

◎ 越境するコーディネーターの活動と立ち位置の変化

従来のコーディネーターは、図1のように、文化芸術と教育や福祉、まちづくりなど他の政策領域を結びつけ、多くの場合は文化芸術の側からの働きかけによって、アーティストを学校や福祉施設に派遣し、現場の取り組みを推進する役割を担っていた。そのため、コーディネーターの役割は文化芸術と市民や地域との間の「つなぎ役」、「仲介役」という言葉で表現されてきた。

しかし、今回の事例調査で取り上げたコーディネーターの仕事ぶりを俯瞰すると、図2のように、文化芸術と他の政策領域や行政課題を地続きのものとして捉え、それぞれの活動拠点を足場に地域社会や市民と向き合っていることがわかる。彼ら彼女らは、もはや文化芸術と教育や福祉、まちづくりなどの間に立って相互をつなぐという立ち位置ではなく、文化芸術を起点にさまざまな活動領域に越境し、それぞれの地域に根を下ろして多様で幅広い活動を展開している。

6組・7名のコーディネーターが、現在の仕事にたどり着く道筋はそれぞれだが、自身の仕事が、文化芸術と地域や市民を結びつけるコーディネーターである、という認識を持って行動しているわけではない。各々の立ち位置で芸術やアートの価値、可能性を信じ、アーティストの発想やアイデアを大切にしながら、自身の問題意識に基づいて目の前の地域の課題に取り組んでいるというのが実態である。

図1から図2へ移行する過程で、地域の問題や課題は複雑化し、コーディネーターの役割も拡大してきた。この報告書では、そうした変化に対応し、コーディネーターが活躍するための「75の糸口」(p.12～)を調査結果から抽出し、それらを5項目に束ねたものを「骨子」(p.10-11)とした。

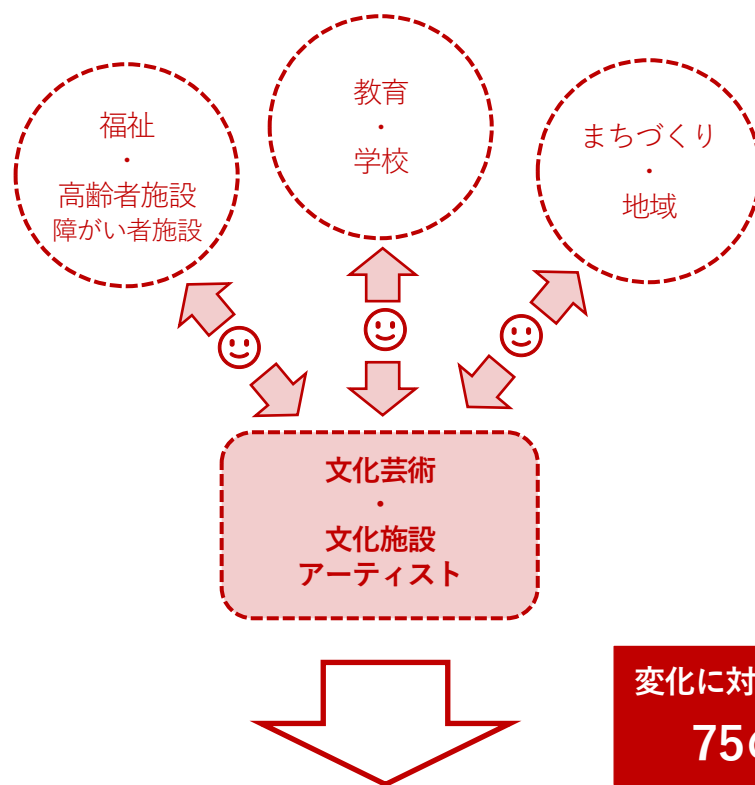
◎ 芸術を創造し、表現することから地域の課題と向き合う

事例で取り上げた6組・7名のコーディネーターの共通点をあえて挙げるとすれば、芸術を創造したり表現したりする活動や現場に何らかの形で深く関わり、そのことが現在の仕事のルーツであったり、地域や社会と向き合う考え方や姿勢に結びついているということである。

事例1の長野さんは東北地方でも最大規模の劇場やホールの複合施設「いわきアリオス」の支配人として、事例2のアサダさんは自らが音楽家、表現者として、事例3の小川さん、田中さんは現代演劇・舞踊の分野で数々の才能を生み出してきた小劇場「STスポット」で、事例4の荒井さんは学生時代からこだわり続けた演劇の現場で、事例5の野村さんは演劇制作のドラマツルクとして、そして事例6の宮城さんは今では沖縄の伝説的なアートNPOとなった「前島アートセンター」で、アーティストの表現活動や創造の現場に立ち会ってきた。

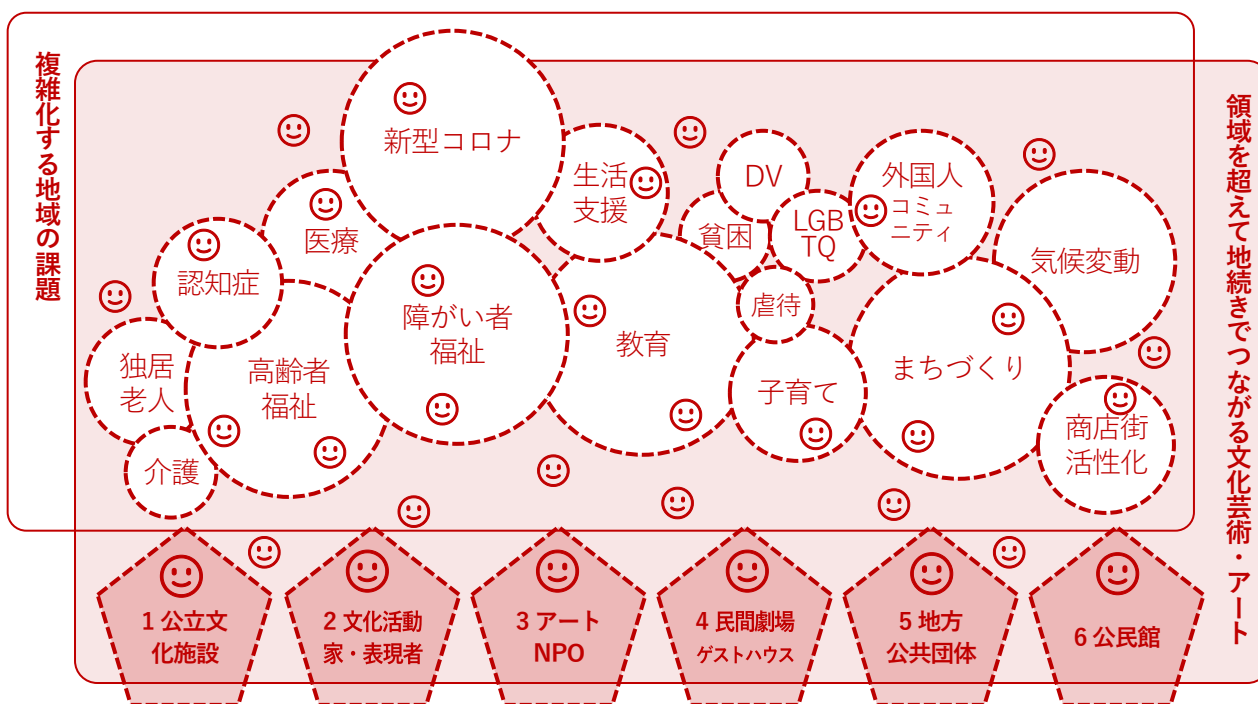
そのことを通して得られた経験や価値観が、現在のコーディネーターの仕事の根底を支えている、ということを6つの調査事例は物語っている。

図1 これまでのコーディネーター



変化に対応するための
75の糸口

図2 本調査におけるこれからのコーディネーター



😊 コーディネーター

注：図2の数字は調査事例の番号で、各コーディネーターの立ち位置

◎ インタビュー調査と座談会から導き出した 75 の糸口

事例調査では、コーディネーターの活動の実態や成果、課題や将来の方向性を把握するため、コーディネーター本人に加え、幅広い関係者にインタビュー調査を行った。その数は約 50 名、インタビュー時間は約 30 時間に及んだ。各々のコーディネーターの仕事や活動の詳細は、「第 2 部 事例調査レポート」にまとめたとおりであるが、調査結果を整理・分析した記述だけでは、微妙なニュアンスやコーディネーター自身が大切にしている考え方が伝わりにくいため、調査項目ごとに関係者を含めた生の言葉を【インタビュー調査の発言から】として整理・掲載した。

また、個々の事例の調査結果を横断し、コーディネーターに共通する考え方や理念、今後のビジョンを考察するため、意見交換会のアドバイザー、事例調査のコーディネーターを交えた 8 名の座談会で意見交換を行った。その結果は「第 3 部 座談会記録」に掲載したとおりである。

今回の調査研究の特徴は、インタビュー調査や座談会を含め、徹底的に話を聞き、意見交換を行ったということである。コーディネーターの仕事や活動にとって重要な雑談や対面での対話の時間が、新型コロナウイルスの影響で少なくなっているという意見も聞かれたが、まさしく、この調査研究がその機会になったと思われる。

事例調査ごとに重要なポイントを各事例調査レポートの冒頭に整理し、座談会についても、重要だと思われる発言に下線を施して、各ページの上部にキーワードとして掲載した。それらはコーディネーターに関することにとどまらず、これからの文化政策や文化行政、地域の文化施設の事業や運営にとって極めて重要な事項が含まれている。

前述の通り、この調査研究ではそれらを「75 の糸口」として整理することとした。

インタビュー調査での発言や座談会での意見に基づいているため、その短い文言だけでは理解しにくい内容も含まれているが、報告書の読者自身が疑問や問題意識を持ってもらえるよう、分析的な記述は控えてメッセージ性の強い表記とした。75 の糸口を読んで、疑問を持たれた方、さらに詳しく知りたいと思われた方は、ぜひ事例調査や座談会の該当ページを参照いただきたい。そのため、75 の糸口には、それらが導き出された事例調査の番号、座談会の掲載ページを記載して、本調査研究のインデックスとして機能するよう配慮した。

また、3名のアドバイザーにはそれぞれの立場からコーディネーターに関する論考や提案を執筆いただき、75の糸口と合わせこの「第1部 75の糸口ー調査結果から見えてきたこと」に掲載した。

◎ 6つの事例に登場するコーディネーターの概要

コーディネーターの仕事や活動は多岐にわたり、いずれも独自の特色を有しているため、どの事例を参考とすべきかの手がかりとなるよう、コーディネーターごとの概要を以下に整理した。

事例1 市民協働で公立文化施設のあり方を更新する

長野隆人（いわき芸術文化交流館アリオス 支配人）



- 長野さんは東北地方では最大規模の劇場・ホール施設で、広報の仕事を手がかりに、子育てやまちづくり、市民活動などと連携し、公演やアウトリーチといった従来の事業の枠組みを超えた活動を展開している。
- 現在は、館の運営や事業を統括する支配人として、市民から寄せられる声や要望に耳を傾け、館として対応しながら、時には市民に活動の担い手を託することで、市民との協働によって公立文化施設のあり方を更新しようとしている。
- 文化施設の広報は、劇場の事業や活動を市民に伝えるだけでなく、広聴の役割を担うべきだという考え方を含め、公立文化施設で仕事をする方々には、ぜひ参考にしていきたい事例である。

事例2 越境と更新を繰り返すアーティスト・表現としてのコーディネート

アサダワタル（文化活動家／社会福祉法人愛成会品川地域連携推進室 コミュニティアートディレクター、アーティスト、文筆家）



- アサダさんは音楽家としての活動と並行して、全国各地でさまざまなアートプロジェクトやワークショップを行っており、「表現による謎の世直し」をテーマにしたその活動は多岐にわたる。
- 現在は、障がい者福祉のワークショップのコーディネートを中心に、アートから他分野へ越境しながら「表現」を軸に幅広い活動を展開している。
- 現場で経験したことを執筆活動として整理して、「表現」の持つ可能性を社会と共有することもアサダさんの重要な仕事で、事例調査レポートでも紹介した彼の著作も、これからの文化行政やアートの役割について多くの示唆を与えてくれる。

事例3 地域や政策の境界を越えるアートNPOならではの多様な取り組み

小川智紀（NPO法人STスポット横浜 理事長）

田中真実（同事務局長／横浜市芸術文化教育プラットフォーム 事務局長）



- 小川さんが理事長を、田中さんが事務局長を務める「NPO 法人STスポット横浜」は、1987年に開館した小劇場「STスポット」の運営団体として設立され、2004年にNPO法人化された。
- 小川さんと田中さんは、横浜市や神奈川県とパートナーシップを組み、教育、まちづくり、福祉の3分野を横断するコーディネーター活動を展開している。アートNPOという立場から行政施策の枠組みや地域を超えた横断的、複合的な取り組みを行っているのが特徴である。
- 調査の中で横浜市の鬼木和浩さん（同市文化振興課長／主任調査員）から示された「行政は、従来のヒエラルキー型ではなくネットワーク型のガバナンスでなければ、地域の課題に対応するのは難しく、そのためにもコーディネーターは重要だ」という考え方は、文化行政に携わる方々にぜひ参考にしていただきたいポイントである。

事例4 演劇や表現活動から地域の生きにくさと向き合う民間劇場・市民グループ

荒井洋文（一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表／プロデューサー）



- 荒井さんの活動拠点、上田市の中心商店街に立地する元銀行の建物を劇場やカフェに転用した「犀の角」という民間の文化施設で、別館のゲストハウスも併設されている。「犀の角」のホームページに記された「自分の外側にあるものと出会う場所」「変な人でも住みやすい街に」というキーワードは、この施設や荒井さんの活動の狙い、市民と演劇との関係づくりや地域に対する眼差しを象徴している。
- 上田街中演劇祭などの文化事業を展開しつつ、障がい者支援や子育て、福祉の分野で活動するNPOや文化団体、市民と協働して、新型コロナで支援が必要になった人たち、生きにくさを抱えた人たちを支援する「のきした おふるまい」を実施している。
- 「『犀の角』を地域社会が支える共有地のような劇場にしていきたい」という荒井さんの展望は、まさしく「文化的コモンズ」の考え方に通じている。

事例5 支援と提案で文化政策を転換し、地域の未来へ投資する

野村政之（長野県県民文化部文化政策課 文化振興コーディネーター）



- 長野県内の文化ホールの勤務経験がある野村さんは、「公金を文化芸術の創造に上手につなげるには？」を自身の活動テーマにしてきた。演劇のドラマトゥルクとしてアーティストの創作のサポートを行うとともに、沖縄アーツカウンシルのプログラム・オフィサーとして地域の多様な文化芸術団体に支援の対象が広がったことが、コーディネートの仕事につながっている。
- 長野県の文化政策課に籍を置くコーディネーターとして、県内の市町村を回ってそれぞれの地域の文化の担い手を見だし、後押しするとともに、行政職員や県の文化事業団からの相談にも対応している。
- 県の文化政策課課長の池上安雄さんから、来年度設立予定のアーツカウンシルによる支援を起点に「農業や観光、移住、障がい者などの分野につながっていく可能性が開けている」という発言もあり、行政内部のコーディネーターは、文化に限らず行政施策全般に成果をもたらす可能性があることが注目できる。

事例6 公民館を市民自治のプラットフォームとして捉え直す

宮城潤（那覇市若狭公民館 館長／NPO 法人地域サポートわかさ 理事）



- 県の美術館構想が行き詰まったことを背景に誕生した「前島アートセンター」というアート NPO での実践や試行錯誤の経験が、宮城さんのコーディネーターとしての原点になっている。
- 現在は若狭公民館の館長として、アーティストの発想やアイデアを取り入れながら、「パーラー公民館」「アートな部活動（ユークチュー部）」といったユニークな活動をコーディネートしている。
- 公民館の究極の狙いである住民の自治能力を向上させるには、住民が行政サービスの消費者にならない力が必要だという考え方。あるいは、人によって対応が変わっていけないという行政職員のマインドが、結果的に行政の施策やサービスを低いレベルに揃えることになっており、「あの人だからできる」という属人性を受け入れるべき、という宮城さんの主張にはぜひ、耳を傾けたいところである。

75の糸口

骨子

A. 文化政策・文化行政・文化施設

- 文化政策には発想の転換が求められている
- 文化行政の先入観を更新する
- 文化施設の根本を考え直す

B. 劇場・創造・文化の場づくり

- 舞台芸術や文化拠点の持つ力、創造や表現という芸術のコアを大切にする
- 文化の「場づくり」に力を注ぐ

C. アート・アーティストの役割

- アートやアーティストは価値観を更新させ、別の思考や行動を促していく
- アートの目的や機能は課題解決ではなく、地域の基礎体温をあげることに

D. コーディネーターに求められる姿勢

- 市民や地域をその気にさせる
- 余白や「ゆるさ」、「聴く力」を大切に
- もっと雑談・相談・広聴を

E. コーディネーターの活躍に向けて

- コーディネーターの位置づけ、役割を考え直す
- コーディネーターを育成し、新たな評価の視点を持つ
- 市民活動から市民自治を展望していく

◎ 文化政策には発想の転換が求められている

A-1 地域のクオリティ・オブ・ライフ向上に寄与する文化政策への転換（事例5）

- 文化政策には、従来の経済システムとは別の角度から、地域を暮らしたくなる日常のある場所へと変えていく可能性がある。
- 結果が出やすい事業への「消費的」な予算配分から、全体を俯瞰した上で新たな文化政策への予算編成の転換が、地域の未来への投資につながる。

A-2 地域の課題を捉え直し「文化の権利」として考える（事例3）

- 社会的な課題は複雑化する中で、従来の行政の政策分野をベースに捉えるのではなく、その間からこぼれ落ちるものや、課題同士の関係性や背景も含め、総合的に把握する必要がある。
- その際、文化芸術の立場からは「文化の権利」として捉え直すことが、コーディネーター業務にとって有効な手がかりとなる。

A-3 幸福追求権としてのアートと生存権のためのアート（座談会 p.135）

- 今の文化の主流は文科省、文化庁から育ってきた「幸福追求権」としてのアート。
- アートがないと死んでしまう人がいる。「生存権」を確保するためにアートをやっているという人たちに確実に出会っている。
- （いわきアリオス）の震災復興の時には幸福追求権と生存権の境目がぐちゃぐちゃになっている状態で、その両輪がフルセットで揃っている。

A-4 ネットワーク化する行政のガバナンスとコーディネーター（事例3）

- 行政は、従来のヒエラルキー型ではなくネットワーク型のガバナンスでなければ、地域の課題に対応するのは難しい状況で、そのためにもコーディネーターの役割は重要性を増している。
- 横浜市では、区民文化センターの指定管理者の業務にコーディネーターの役割が明記されている。

A-5 人口減少社会へのまなざしを持ち、小さな文化的コモンズが多数できることを意図する（事例5）

- 人口減少社会において、コミュニティーの協働は欠かせない。その際、人のやる気をどのように喚起していくかがカギとなる。文化政策はその協働を試みるシミュレーションの場である。
- 市民に寄り添い、つくり手と市民が交流し、共に成長するような支援のあり方を考えるべき。その際、地域に小さな単位で文化的コモンズが形成されていくことをイメージすることが肝要である。

◎ 文化行政の先入観を更新する

A-6 属人的な成果ややり方を許容する（座談会 p.139）

- 公共機関や、公共施設は、人によらず、同じようにできることを基準に考えていたと思うが、そう

すると、低いところに合わせなければならない。

- 凸凹がある前提でどのような仕組みを作れるかを考える。
- 人によって異なることを前提とした仕組みづくりをみんなで考えていく。

A-7 「あの人だからできる」属人性を受け入れる（事例6）

- コーディネーターに求められる職能は人に蓄積する。コーディネーションを進める際には、画一的な対応を前提としたこれまでの役所的な仕組みではなく、「あの人だからできる」という属人的な能力を活かしていくべきである。
- そのためには、個人の能力と努力を尊重し、力を発揮しやすい環境づくりと人材育成が肝要である。

A-8 行政の下請けではなく政策のパートナーとしての制度設計が必要（事例6）

- コーディネーターに限らず、現場を担う人材は下請けではなく政策のパートナーであり、行政側は職能や効果を十分に理解した上で、専門性に見合う条件でコーディネーターを配置する必要がある。
- 行政側にコーディネーター人材を置くことで、現場に即した制度設計を行うことも視野に入れたい。

A-9 行政の先入観を更新する飛距離のある説明（座談会 p.131）

- 役所の担当職員が納得して、自分の言葉で「こうだ」と押していける考え方を提供する。
- どこまで飛距離のあるフレーズを自分が生み出せるか。
- 支援の主体である行政自体が納得できるには、アートが持たれている先入観を更新しなければならない。

A-10 指定管理者制度とコンプライアンス（座談会 p.137-138）

- 公共ホールや行政ではコンプライアンスが目的化されている。その結果、お金を出している側の意見が強くなりすぎていて、（行政側の）聞く姿勢がすごく弱くなっている。
- 市民に助けてもらえる可能性があるのに、指定管理者は全部役所との間で解決しようとするクセがある。
- 公共ホールは、課題だらけの部分进行何かの方法で市民に知ってもらって、自分たちの施設だ、ということでもって市民に協力してもらおうという振る舞い方をすべき。
- 人口減、税収減に文化政策・行政全体がどう対峙するか、思想が必要だ。

◎ 文化施設の根本を考え直す

A-11 文化権を守る先頭に立つのは公立文化施設だ（座談会 p.123）

- 教育の現場でも、障がい福祉の現場でも、公立文化施設の想定受益層から漏れている人たちがいっぱいいる。

- 行政と同じ縦割りにならないやり方でやっていく必要がある。

A-12 地域文化拠点に求められる新たなベクトルと評価軸（事例1）

- 90年代以降各地に「創造型劇場」が誕生し、2012年に劇場法が施行されて、公立劇場・ホールのあるべき姿が示されてきた。今後は、それとは異なるベクトルから、その先の射程を見据え、地域の文化的なつながりを総合的にコーディネートするような文化施設が求められている。
- そうした地域文化拠点には、これまでとは異なる新たな評価軸が求められる。

A-13 文化施設の可動域を広げる（座談会 p.130）

- 世の中の9割以上的人是は、劇場は有名なアーティストやタレントを観に行く場所だと思っている。
- こういうこともできる、こういうことも可能だという選択肢をどれだけ見せられるかが重要。それが施設の可動域を広げる。
- アウトリーチなど施設側からの取り組みを続けるのもいいが、地域からの提案に、「はい、分かりました。それをやりましょう」と応えることが、結局は地域にとって一番いい。

A-14 「そもそも」を問い直す必要性（事例6）

- 公立文化施設にはハードと有給のスタッフがいて社会的信用があるというそもそもの利点を地域や住民のために活かしているかと問い直す必要がある。
- これまでの事業を漫然と行うのではなく、既存のやり方に一度疑問符を投げかけてみることで、市民の声を聴き、必要とされることを見極めることが求められている。

A-15 事業の付属的な広報から、広聴的な役割をもった館全体の司令塔へ（事例1）

- 広報は、館や事業の広報的な役割にとどまることなく、市民や地域の窓口となる広聴的な機能を担い、館全体の運営方針をリードするポジションでありたい。
- いわきアリオスのように、広報紙に市民編集委員を加え、市民企画で子育てや演劇などへと姉妹媒体を派生させ、その編集・発行を通じて、情報収集と新たな活動につなげるのもひとつの方法。

A-16 文化施設の業務にコーディネーター的な仕事を位置づける（事例2）

- コーディネーターを持続的な役割として組織の中に位置づけるための制度化が必要であり、福祉分野の相談支援専門員が長期間に渡って生活レベルの並走を続ける仕組みや、地域ケア会議での異分野の連携するプラットフォームづくり等が参考になる。

◎ 舞台芸術や文化拠点の持つ力、創造や表現という芸術のコアを大切にする

B-1 劇場という創造の場、空間が持つ力を活かす（事例4）

- 劇場という創造の場や空間が持つ力は、地域の課題と向き合う市民グループ「のきした」の活動を生み出す大きな要因となっている。
- 地域をよりよくしたいという想いを支え、フットワーク軽く活動を立ち上げ、実行に移せるのは、民間の劇場という場の持つ力。

B-2 地域社会が支える共有地としての民間劇場（事例4）

- 民間の劇場は公立の文化施設にない自由度やポテンシャルを有している。
- それを従来の経済システムの中で運営していくのではなく、神社や寺社仏閣のように地域社会の共有地として皆で守り、維持していくことはできないか。
- 公的な補助金や助成金の矛盾（国や地方公共団体の基準や評価が優先され、本来の目的や狙いからずれてしまう恐れがあること）に自覚的でありたい。

B-3 「つくる」という芸術のコアを大事にした市民とつくり手の双方へ寄り添う支援（事例5）

- 芸術やクリエーションという中核を大事にしたうえで、中をつなぎ外に発信する。創作活動と支援活動の両方の現場に携わり、バランスを取りながら全体を進める。
- 芸術そのものの力を養う場がなければ、横につなぐ力を発揮することはできない。まず、芸術自体への支援、投資を整えることがコーディネーター活動を推進する前提となる。

B-4 演劇や表現活動をとおして生きにくさと向き合う（事例4）

- 演劇をとおして未知のものと出会うこと、自ら表現活動に取り組むことが、生きづらさからの救いや生きる力につながる。
- 地域に演劇を持ち込むことが、異なる価値観の共存する街をつくり、誰をも受け入れる地域へとつながっていく。

B-5 演劇をとおして自分の外側にあるものと出会う（座談会 p.124-125）

- どうすれば劇場の外側にいる人とコミュニケーションを取れるか。
- 劇場を運営するために苦心していることと、生活に困った人、行き場所をなくしている人たちが抱えている問題はすごく似ている。
- 劇場として始めたことが劇場以外の何かになっていて、それをある種の共有地と呼ぶならば、もともとそういったところにアートが生まれてきた。

B-6 劇場の活動と地域の活動が往還する（座談会 p.129）

- アートは何か課題を解決するための手段ではない。

- 福祉的なサービスと、劇場で行われている表現活動を一緒の場所でやることで勝手に反応が始まる。
- 劇場で活動するアーティストと地域の現場での活動が少しずつ往還できているのが面白い。
- 劇場だからできることがあるし、外に出て、いろいろな人との関係の中でできることもある。

◎ 文化の「場づくり」に力を注ぐ

B-7 別の力が蓄電される場（座談会 p.134）

- 余白が生まれるところ、生まれやすいところが、「犀の角」や「若狭公民館」だと思う。
- 「緩さ」とか、ルーズであって、余白があって、名付けようがないような場、アートのものを軸にした拠点はそういう力を内包している。

B-8 場づくりをアートと捉えて、場づくりの初期設定に力を注ぐ（座談会 p.137）

- 場づくり自体をアートと捉えて、場づくりに焦点を当て、初期設定に力を注ぐ。
- 場とは何かという時に、一方的ではない関係で、受け入れもするし、出ていきもするという双方向的なもの。
- 同じ場所にいろいろな機能があることで、同時にいろいろな人がその場にいる。

B-9 居場所のない人の居場所（座談会 p.137）

- 前島アートセンターは地域の中に居場所がなさそうな人たちの居場所になっていた。
- 公共施設にはそういった人たちをあまり見ない。時間も経済的にもゆとりのある人が、趣味の活動をするために出入りしている。
- いろいろな人が入りやすい仕掛け、しつらえをするように努めている。

B-10 無目的で居られる場（座談会 p.134）

- 公民館は目的を持った人が集まる場になっていて、実はそこを無目的でいられる場に変えたいと思っている。
- たまたま出会った人や出来事から、何かしたいという気持ちが生まれて初めてことが起こる。あることを目的に行くと、それ以上のことが生まれにくい。
- 市民をサービスの消費者にさせない公民館にしたい。

B-11 人と人の中にある場（座談会 p.133-134）

- 今ここで話している場、人と人の中にある場が何かになっていく。
- 溢れてくるものをどう受け止めて、どうつなげて、それを同じお皿に入れたり、合わせたりすることをやっている。
- 場を持つ人がそういうあり方をするすることで、提案する側は投げやすくなる。

◎ アートやアーティストは価値観を更新させ、別の思考や行動を促していく

C-1 福祉とアートをコーディネートできれば溶けていく（座談会 p.124）

- 福祉とアートは親和性がすごく高い。障がい者と向き合うとき、正解がないこと、相手との向き合い方が個別であることは、アートの性質そのもの。
- 人としてお互いを尊重しながら、支援する側とされる側が関わっていくことが、現場では重要。
- アートをやってきた人間は、立ち居振る舞いや佇まいが、福祉に向いている人は一定数いる。

C-2 社会教育とアートは親和性が高い（座談会 p.126）

- お互いを認め合ったり、許容して受け入れて、クリエイティビティを持ってつくり上げていく。
- 何かを仕掛けるというよりも、まず気付くかどうかの問題。違和を感じる力、人それぞれの状況を気に掛ける力を持つ必要がある。
- アーティストやアート系の人たちはそういうものに敏感だ。敏感だから生きづらさを感じている人も多いし、生きづらさ、生きにくさを抱えている人に寄り添う力も強い。

C-3 アーティストのクリエイティビティに刺激された人たちが、「私たちはこういうことがしたい」言い始める（座談会 p.127）

- アーティストは、アートワークとして共有空間や対話を生み出す仕掛けをつくっている。
- アーティストは状況を面白く転換する発想力がある。具現化する力も強い。そういう現場に立ち会っていると、それぞれが自分でいろいろなことができるという気持ちになってくる。
- 行政系の文化機関が自分たちのイメージでストーリーをつくって、それを実践する技術者としてアーティストにお願いすると、アーティストは持っている力を十分に発揮しきれていない。
- こういう課題があって、この状況をどうにかしたいというところから話し合っていく。

C-4 生涯学習は自分の価値観を更新して、新しい自分と出会う作業（座談会 p.128）

- 自分自身の価値観が揺さぶられて更新されていくことは、アートと触れ合うことによって生まれる。
- 一人ひとりが更新されていくことで課題に気付けるようになって、自主的に取り組みを始め、その結果として課題にアプローチすることはあり得る。

C-5 別の思考方法の提示（座談会 p.131）

- アートは別の思考方法を提示したり、価値観を言葉や形にして見せることが上手。
- 結局、人と向き合って、その人がこうしたい、こうだったらいいと望むところへ向かう作業をサポートしている。

C-6 生活の実践として、どうやってアートをやっていくか（座談会 p.123）

- アートは支援の一つとして誰かをいたずらに評価せず、いろいろな個性を尊重できる。
- なぜわざわざアートでやっているのかという、その根っこの部分の理由、体感などが重要。本質に触れるからこそアートが導入されるべき。

C-7 アートこそ目の前にある日常の生活の体験の仕方から変えられる（座談会 p.127-128）

- アートを体験すると、自分も何かアクションを起こそうという気持ちにつながる。

C-8 アートやアートプロジェクトという言葉をあえて使わない（座談会 p.128）

- 自分の中ではアートだ、表現だという感覚はあるが、それを言うと、結果的にいろいろな人たちを遠ざけてしまう。
- アートだからこそできることを感じながら、あえてそのことを表面的には語らずに、今までにないような新しいコミュニケーションプラットフォームをつくっていく。

◎ アートの目的や機能は課題解決ではなく、地域の基礎体温をあげること

C-9 地域の基礎体温が上がる（座談会 p.130）

- 今までと違う付加価値を少しでも付けることで、触媒効果がもたらされる。
- （市民に）「もっと主体的に関わってみませんか」と能動的な関わり方を設計するのがコーディネーターとしての役割。
- 継続していくことによって確実に地域の基礎体温が上がる。

C-10 非営利のアートで「地域の体質改善」を（事例 3）

- 文化芸術が教育や福祉、まちづくりなど、様々な分野において幅広い効果を有することは、広く認識されるようになってきた。しかし、アートによって具体的な問題が解決すると短絡的に受け止められている側面も否めない。
- 劇場や美術館で鑑賞し、楽しむ文化芸術だけではなく、社会的な価値を幅広くとらえる非営利のアートによって、人々に気づきを与え、考え方の変容を促すことで、「地域の体質改善」につなげていくことが、文化芸術と市民や地域をつなぐコーディネーターの役割である。

C-11 アートも福祉も地域活動も地続き（座談会 p.131）

- コーディネーターも、アート自体も、全て地続きのところにいる。今日は福祉、今日は公演、今日は地域と分かれているのではなく、地続きの中にいて動いている。
- 外から見ると、別の領域へ出掛けていって結び付いて、何か課題を解決しているように見えるかもしれないが、実際は地続きの活動。
- 福祉や防災など、親和性のある領域を否定しないで、そこに価値を見つける。
- アートに身を置くコーディネーターは価値を見つけるのが上手。

C-12 課題を探して何でも解決しようと考えてしまうのは「課題解決の呪縛」 (座談会 p.126-127)

- 課題を解決するのではなく、こうだったらいいなを考えて創っていく。
- 世の中は何かと社会課題解決型思考だが、そうでないほうにも向き合いたい。そういう思考を育ててくれたのがアート。

C-13 アートは課題解決の前の部分の話をしている (座談会 p.131-132)

- 世の中では課題解決が根っこの部分に既にインプットされていて、物事を考える上でそのことに無意識に引っ張られてしまう。
- アートは課題解決の前の話をしているので、課題解決に違うやり方があるということを示すのではなく、位相が1つ違う段階のこと。
- 課題を設定することで、新しい自分に出会ってもらおうとか、価値設定を変えて、自分が見ている景色の中で、できることを積み上げていってもらおう。そうでなければ継続しない。

C-14 課題解決と価値創造は裏表 (座談会 p.132-133)

- 課題解決型でも何らか新たな価値を生み出している。
- 課題解決と価値創造の両方から説明すれば、アートの特徴や価値がぐっと広がって見える。
- 欲しいのは、その人が取り組んだ先に、ある種、現在とは違う何かが実現された絵だ。

C-15 地域資源をインカムに (座談会 p.133)

- インプットがあって、アウトプットがあり、その先にアウトカムがある。そのロジックモデルには含まれていないが、一番大事なものはインカム。
- 活動にいろいろ広がりが出てきたとき、その中から次のインカムをつくる可能性に目を向けている。
- 「あの人をアーティストに仕立ててプロジェクトを回したら、絶対に面白くなる」という、その初期設定の部分に注力を入れている。
- 地域の中にこんな人がいて、あんな人がいて、あんな怪しい場所もあるということだと思う。コーディネーションで何をやっているかのキーワードは「編集」。新しい価値を創るために価値を編み直していくと考えたとき、インカムという見方で地域資源を見るとするのはしっくりくる。
- アウトカム、インカム部分の循環をつなぐのがコーディネーター。

D. コーディネーターに 求められる姿勢

◎ 市民や地域をその気にさせる

D-1 悩みを共有し、次のアクションをイメージしてつなげていく（事例4）

- 支援する側と支援される側を分けることなく、悩みを共有しながら、皆で考え、お互いができないところを支え合うことで、社会は生きやすくなる。
- 課題と向き合い、こうなってほしい、こうなったらいいというイメージを持って、人や活動をつないでいくことで、具体的なアクションが生まれる。

D-2 支援から提案につなげる立ち位置とコミュニケーションの促進（事例5）

- 周りの人たちを支援するだけでなく、将来の姿を思い描き提案する。そのために、協働・連携のきっかけとなるコミュニケーションができる立ち位置を見つけ、そこに自分を置く。
- 芸術活動などを支援する際の課題は、アーティスト側にも行政側にもある。コーディネーターはそこに気づき、互いの言語に翻訳して間を取り持っていく。

D-3 市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していく姿勢（事例6）

- 地域や市民と文化芸術をつなぐために、コーディネーターが市民に提案していくのではなく、市民の聞き役を務めながら、市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していくのが、コーディネーターの基本的な姿勢である。
- そのためには、文化施設を事業やイベント中心の運営とせず、平時の情報提供や相談業務などへとゆるやかに広げ、そこにコーディネーターを配置することが肝要である。

D-4 市民の創造性を起点に市民協働をコーディネートする（事例1）

- 公立劇場・ホールの既存事業の枠外で、モヤモヤしている市民との接点を探る話し合いや交流から多様な市民活動が生まれていく。
- 市民協働や地域活性化に向けて、地域の文化施設は人材やノウハウ、ネットワークなど施設の持つリソースを総動員するという姿勢が求められる。

D-5 市民の創意工夫に寄り添い、市民に委ね、任せていく（事例1）

- 市民の人を思いやる心、創意工夫する心に寄り添う存在として、地域の文化施設が果たせることを意識して事業を推進していく。
- 市民自身がコーディネーターとなり、地域全体でパフォーマンスをあげていくために、市民の発想や意欲に委ね、任せていくことが、地域の文化拠点の広がりを生む。

D-6 日常に寄り添い、プロセスを重視し、時間をかける（事例2）

- 単発のイベントとしてインパクトを出すよりも、プロセスを重視することで、地域の生活に寄り添うことができる。
- トークや熟議の時間をたっぷり取ることで、他者の思想や経験、立場等の差異をこえて共に在るこ

とができる豊かなパブリックの場が立ち上がり、「文化的コモンズ」の形成につながる。

- コロナ禍による議論の場のオンライン化で、無駄話や熟議の機会が減少している。今後は、あえて無駄話をする機会をつくることもアートコーディネーターに求められるのではないかな。

D-7 地域の課題は、その地域の何とかしたいと思っている人が対処すること（座談会 p.125）

- コーディネーターは、結果的に、相手が思い付かなかったことを気付かせる役割を担っている。

D-8 芸術、アートが引き出す力（座談会 p.131）

- これをやろう、あれをやろうというものを少しずつ引き出せるものとして、芸術、アートの営みを持っていく。
- 人が持っているポテンシャルを引き出し、結果につなげる。
- 自分が何かをするのではなく、相手が何をするか、相手が続けていける、相手が納得できる、そういう選択肢を提案できるかどうか。

D-9 市民との持ちつ持たれつの関係性（座談会 p.135）

- 市民の人たちが「ここは私が手を貸そう」「それはあなたの考え過ぎだ」と助力してくる動きが出ている。
- 施設や運営に課題があることによって、市民の皆さんが手を差し伸べてくれたり、一緒にやっ行ってこうと言ってくれる。互いの弱みを共有しつつ、持ちつ持たれつの関係性を大事にできるといい。

◎ 余白や「ゆるさ」、「聴く力」を大切に

D-10 余白や隙間、決まり事がないところから生まれるもの（事例 4）

- 余白や隙間、決まり事がないところから生まれることを大切にしたい。

D-11 「ゆるい」マネジメントが、さまざまな「かかわりしろ」を生む（事例 6）

- まず市民の声に耳を傾けることで、話を聞いてもらえる相手として認識されることが重要である。
- そのためには、コーディネーター側にも「ゆるさ」が必要で、地域と共に悩み、足りない部分は助け合うという姿勢で臨むことが、地域や住民の「かかわりしろ」を生み、文化芸術とのつながりに結びついていく。

D-12 来るものは拒まず受け入れてみる、連携先を絞らない（事例 1）

- 館に寄せられる様々な相談事に、イエス、ノーで接するのではなく、来るものは拒まずという姿勢で受け入れてみる、お手伝いできそうなところから関わってみる、という姿勢が次に結びつく。
- 連携先は文化関係にとどまらない。子育て団体や学校、商工会議所、地域のサッカーチームまで、様々な形で関係性を紡いでいくことが、文化を媒介にした新たな活動の種を生み出していく。

D-13 生活と地続きの施設として、地域の話聞くために、相談を事業化する（事例 2）

- 市民の聞き手となり、熟議につなげる受け皿として、相談事業の展開が効果的なのではないかな。

- 文化の相談と言っても、人によっては人生相談につながることもあり、それほどライトではない。
- 福祉におけるコーディネーターは相談支援専門員として活動しているが、文化部門の相談を設計するときにも福祉の事例は大いに参考になる。

◎ もっと雑談・相談・広聴を

D-14 雑談が支えるコミュニティの日常（座談会 p.136）

- 雑談がコミュニティの日常を複層的に支え合っていた。
- あちらでもしゃべって、こちらでもしゃべって、気が付けば誰かがトイレに行っている。そういうことが場を動かしていくエンジンにもなるし、実は支援にもつながっている。

D-15 相談してもいいという旗をあげる（座談会 p.136-137）

- 「相談してもいいよ」と旗を揚げるようなことは大事。
- そうすると、いろいろな人が情報や、やりたいことを持ってくる。相談に来てもらわないと雑談はできない。相談というかまず来てもらう。あるいは出掛けて行って話を聞くのも大事。
- 来てもらうために、入りやすく、抜けやすくすることを意識している。相談や雑談から何かが生まれるためには、そういう環境をつくることが重要。
- お互い突き詰めずに「ほどほどに」「中途半端」にしておけば、話が始まる。

D-16 雑談、広聴、コミュニケーション（座談会 p.138）

- 課題解決がすべてになると、雑談もできない。
- 雑談なり広聴という観点からすれば、何にしても深く聞くこと。行政が共創するつもりはあるのかどうかという問題だ。
- コミュニケーションを構築する場に、芸術文化、アートがなり得る。

◎ コーディネーターの位置づけ、役割を考え直す

E-1 事業単位のコーディネーターから政策レベルでの価値の明確化を（事例3）

- 文化芸術のコーディネーターの業務は、多くの場合、個別の事業として実施されているが、今後は政策レベルでコーディネーターの必要性や文化政策における価値を明確にしていく必要がある。

E-2 コーディネーターが大事だという共通認識を持って考え方のシフトチェンジを（座談会 p.139）

- コーディネーターはそれぞれでいいが、共通してほしいのは、コーディネーターという存在は結構大事なのだという共通認識が生まれること。
- 一定の期間は腰を据えてコーディネーターとして活躍できるような体制をつくり、公立文化施設業界で考え方のシフトチェンジが起きる場を。

E-3 NPO 法人ならではの機動力、柔軟性と分野を超えた展開（事例3）

- ST スポット横浜は、教育、地域、障がい者福祉の3分野でコーディネート業務を展開しているが、アート NPO ならではの機動力と柔軟性に基づき、3分野を融合、発展させて活動をヨコに展開することで多様な成果を生み出している。
- 最近では、団体の原点である小劇場「ST スポット」における事業にもつながり、創造空間を有する NPO 独自の広がりが生まれている。

E-4 コーディネーターには、分野横断できる「通訳者」としての役割が求められる（事例2）

- 行政と現場のより良い関係、あるいは他の領域との連携を進めるときの媒介にもコーディネーターの位置づけが重要だろう。その時に、コーディネーターには双方の考えを「通訳」できることが求められる。
- コーディネーターが「通訳者」として他分野の専門家と協働することで、地域における文化拠点の存在意義を広げていくことにつながる。

E-5 多領域のコーディネーターをさらにコーディネートする（事例6）

- 文化芸術の持つ力を、教育や福祉、まちづくりなど多様な領域につないでいくためには、一人のコーディネーターの取り組みだけでは限界がある。
- 他分野のコーディネーターともつながり、そのネットワークを介して多様な地域課題に向き合うことで地域におけるコーディネーターの役割や成果はより広がりを持ったものになっていく。

E-6 活動の中の価値を見いだして活動につなげる（座談会 p.128-129）

- 地域創造の提唱する「文化的コモンズ」は「文化的営み」と書かれているが、その「文化的営み」がここだと指し示して価値を見つける係がコーディネーター。
- 活動の中に価値を見つけ出し、それを活動にいかすのがコーディネーターのひとつの形。
- やりっぱなしで終わらずに発展させる回路が続くと、時間が経つにつれて文化になる。

*1：アーツカウンシルは 1945 年に英国で設立された芸術活動への助成を行う公的機関。国や行政組織とは一定の距離を保つ独立性の高い専門機関で、資金的な支援（助成）を中心としつつ、アートをとおして様々な社会的課題と向き合うことも推進している。

日本では、1990 年に芸術文化振興基金が設立された際、日本芸術文化振興会（Japan Arts Council）が設立され、2011 年 2 月に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第 3 次方針）」で機能強化が盛り込まれた。以降、地方公共団体でもアーツカウンシルを設立する動きが活発化している。

E-7 自然で必然に思える水路付け（座談会 p.136）

- 優れたコーディネーターはみんなメディア（媒介者、触媒）に見える。
- 相談のふりをして雑談しながら、いろいろたまっているものをどうにか順番に流していく。それが、周りから見て自然で、必然に思える水路付けが必要。

◎ コーディネーターを育成し、新たな評価の視点を持つ

E-8 コーディネーターの専門性と理想像に関する共通認識を（事例 3）

- 文化芸術と地域や市民をつなぐコーディネーターの重要性については、かねてから指摘されてきたが、コーディネーターとは何か、専門性を含めて必ずしも明確になっていない。
- コーディネーターは、経験に裏打ちされた知識やノウハウ、柔軟な発想や機動力、現場対応の迅速性、適格性が求められるなど、アートマネジメント分野において極めて高度かつ専門性の高い業務であり、その専門性や必要性に関して、共通認識を形成し、普及させていくことが必要である。

E-9 コーディネーターの立ち位置の確保、職能の一般化と人材育成、働き方は今後の課題（事例 5）

- コーディネーターには、むしろ組織と離れた立ち位置も確保することで、多様な主体に働きかけていくという機能が求められる。
- そのためには、アーツカウンシル(*1)など所属する組織の外での活動が担保できるような自由度のある雇用形態を考えておくことも必要。

E-10 地域を担う次世代育成という視点を持つ（事例 1）

- 次世代育成を念頭に、若い世代の社会参画の場として、劇場やアート周りの仕事、芸術家の生き方などを中高生に知ってもらうことを意識する。
- 例えばいわきアリオスでは、公演時の影アナウンスを市内高校生の放送部員が担うほか、新聞部や写真部などで活動する学生達が、プロの現場を体験できる機会を提供している。

E-11 労働環境の改善と活動の継続性（事例 3）

- 地域や市民と文化芸術をつなぐコーディネーターを推進するうえで、問題点や課題としてあげられたのは、①分野や立場を超えた集まりや話し合いの場が少なくなっていること、②労働環境が脆弱で将来に不安があること、③活動の継続性が見通せないこと、であった。

E-12 プロセスを重視した取り組みをいかに評価していくかは課題（事例 2）

- 文化施設においては、集客数などのアウトプットで事業を評価することが多いが、社会共生などを意図したプログラムを実施する際、事業のプロセスにおいてどのようなやりとりや交流があったかを俯瞰した上で、相応しい評価ポイントを見極める指標が求められる。
- 社会的な要請もあって行う社会共生や社会包摂事業に対する評価軸は、芸術のアウトプットで規定されているものに限らないところまで掘り下げてつくる必要がある。

◎ 市民活動から市民自治を展望していく

E-13 コーディネーターの活動は官の領域とは違う部分、広い意味での市民活動（座談会 p.122）

- サービスの出し手と受け手という関係ではなく、何か一緒にできることがある。
- ある課題に対して意識がある人たちとアートで何か一緒にやっていく方法はないだろうか。

E-14 自治能力とは、住民が消費者にならない力（座談会 p.126）

- サービスを提供する・受けるという関係ではなく、自分たちが主体となって地域をつくっていく。
- 社会教育とは、特定の専門性を発揮するというよりも、もっと根底にある基盤をつくっていくこと。

E-15 クレーマー化する市民と市民自治（座談会 p.129-130）

- 市民が行政に依ってクレーマー化するのは、行政サービスを消費者目線で捉えているから。
- 消費者目線の市民に対し、自分の地域がどうやったら面白くなるかという、自治を涵養する態度で臨む。
- 市民の自治に根差したコーディネーションをしていて、行政の担当者にも分かりやすい言葉で翻訳していく。
- 行政の人にも自治の意識を持ってほしい。

E-16 芸術文化の人を促す強み（座談会 p.134）

- 文化芸術には、本人がそうすると決めて、自分の力で成し遂げることを促す強みがある。
- 「個人の自治」まで考えて文化をやっていくということ。

E-17 プロセスを共有できるアーティストと協働することで市民自治力を向上させる（事例 6）

- 文化芸術が地域や市民にもたらす力を理解した上で、アーティストには芸術的な成果を求めるのではなく、市民協働のプロセスに関与してもらうことが重要である。
- そのことで、コーディネーターの可能性が広がり、市民自身が自ら地域の課題と向き合う市民自治の力が地域にもたらされる。

日常型劇場の冒険

劇場といえば、日々の暮らしではお目にかかれな
い、技巧的で卓越した、一般人の手の届かない作品
を取り扱うイメージがある。芸術文化関係者も、自
身の心を揺さぶった過去の芸術作品の記憶をもとに
仕事にいそしんでいるだろう。これらを前提としな
がらも、敢えて本稿では「日常型劇場」を提起し、
劇場が日常に向き合う意味を考えたい。

1. 日常型劇場とコーディネーター

日常型劇場は、人びとがふだん使いするもので、
文化的側面から暮らしの中にある楽しさ、面白さ、
興味深さを発見したり深めたりする活動を展開して
いく、劇場の類型である。これまで社会教育が目指
してきた「学び」に近いが、制度としての社会教育
施設よりも、そこで行われる活動に焦点をあて、活
動目的の曖昧な「遊び」や「居場所」も含むものと
捉える。

日常型劇場の活動場所は文化施設に限らない。狭
いながらも気の置けない人が集まるたまり場や、居
心地の良いコミュニティ・カフェである。あるいは
学校や福祉施設など、日常的に文化以外の目的で使
われる場所である。これら文化施設外にある場の文
化的要素に着目することで、地域全体に広がる可能
性を持つ。従来アウトリーチと呼ばれてきた活動も
含まれるが、文化施設還元主義的な、施設を主語と
した成果の強調にはなじまない。むしろ活動の下支
えが重要となる。

こういった日常型劇場の活動に不可欠なのは、地
域資源や文化的資源をつなげるコーディネーターの
存在だ。私的な欲求から始まる人々のつどい、雑多
なコモンズの中から、文化をキーにしてコモンズを
見つめ直し、個人相互間の課題を公共的課題へと昇
華させていく役割を持つのがコーディネーターであ
る。具体的にいえば、ここでは「見る／見られる」
関係の専門家である芸術家の関与も重要だ。彼らは

自身の技術を、自身の創作活動に収斂させるのでは
なく、人びとがそれぞれの思いを伝えるために専門
性を用いる。従来のアーティストによるアートワー
クとは異なる。

2. 創造型劇場との対置

劇場法をめぐる議論を経て現在も生き残った劇場
類型の一つに、芸術作品のプロデュースを積極的
に行うことを目指す「創造型劇場」(*1)がある。これ
を日常型劇場と対置させて違いを考えよう。

創造型劇場が扱うのは「アート」「芸術」であり、
非日常である。あるいは前景化した非日常を通して
日常を問う。一方で、日常型劇場では「文化」「表現」
と呼ぶことで、日常へのダイレクトな接近を試みる。
作り手であるアーティストと、受け手である匿名の
観客という二分化された関係が創造型劇場にあると
したら、日常型劇場では、それぞれ固有名を持つ参
加者間の対等な関係の構築を目指す。

専門性に関する意味合いは二つの類型で大きく異
なる。創造型劇場が持つ芸術的専門性を疑うものは
いないだろうが、日常型劇場に専門性はあるのか。
科学者の村上陽一郎は、科学技術分野においてコロ
ナ禍の社会を前提に

研究活動のフロントで起こっていることに、十分な
知識を持ち、関心を払いながらも、一般社会と研究
成果との接点に生まれてくる様々な問題を考慮でき
る『専門家』、つまり専門家と非専門家との橋渡し
のできる専門家

(村上陽一郎「科学／技術の専門家と政治・社会——
コロナウイルス禍のなかで」『文化としての科学／技
術』所収、岩波現代文庫、2021、p.188)

が必要だという。特定領域に明るいという専門家像
自体に疑義が投げかけられているのが興味深い。

芸術文化の隣接領域である、教育・福祉・まちづくり・市民活動の分野でもコーディネーターの必要性が指摘されて久しい。取りこぼす人が出ないよう社会の管理化・制度化が進んでいく中で、皮肉なことに制度からこぼれる人は増える。7÷3は2あまり1で、どこまでも割り切れない。この剰余は制度を緻密にしたところで救えない。人が受け止め、考えるしかない。コーディネーターというソリューション（解決法）は必然なのだ。

もう一度文化の言葉でいい直せば、創造型劇場の場合は芸術性に責任を持つ芸術監督やプロデューサーがキーパーソンとなる。日常型劇場では、文化に基盤を持ちながら、他領域とつながるコーディネーターが重要な役割となるだろう。

3. 日常と非日常

平時、アートでは非日常を感じることができる。非常時でのアートは、日常を取り戻すことができる。——東日本大震災の際、芸術文化関係者が活動の方向性を模索する中、被災地から離れた関西の関係者から聞いた言葉だ(*2)。劇場の日常性に関する問いを突き付けられた春、非日常をこしらえていた芸術関係者は、こぞって被災地にある現前の日常に向かっていった。

そこでは、芸術文化分野における確固としたコーディネーター専任者の有無よりも、各個人の柔軟さや寛容さが大事だった。当たり前だが、照明や音響、舞台機構、制作の担当者も、芸術家による表現を届けるためのコーディネーターなのであった。喜怒哀楽という言葉ではとても割り切れないものを扱ってきたのだ。7枚のビスケットを3人に分配する避難所のコーディネーターと変わらない。非日常が日常に変わっても、本質的には同じはずだ。

ここまで、非日常と日常を切り分けて考えてきた。しかし実際は、相互に嵌入している。津波で被害を受けた地域の一角に災害を免れた家がある。緊迫し

たコロナ禍において無性にラーメンが食べたくなる。気持ちよく目覚めた朝、最初のニュースはどこかの国の開戦の報せだ。世界サイズでも個人レベルでも、非日常と日常は並立している。そんな社会を日常の側から追っていく冒険が、日常型劇場のコーディネーターに求められている。

*1:「芸能文化の振興に関する研究：芸能による豊かな社会づくりのために一提言と具体化への道筋—PartI」(公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、2004)では、劇場を「創造型劇場」「提供型劇場」「コミュニティ・アーツ・センター」「集会施設」の類型に整理した。本稿は「コミュニティ・アーツ・センター」の議論を継ぐものだと考える。

*2: NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークの佐東範一氏が、應典院住職の秋田光彦氏の言葉として私に伝えてくれた。秋田氏によると、もとは大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所特任研究員の弘本由香里氏の言葉だという。弘本氏のコラム「かけがえのない日常の意味を問うアート」(下記 URL 参照)は、東日本大震災のおよそ1か月後に発表された。

https://www.og-cel.jp/column/1192918_15959.html

文化行政の「あいだ」で働くコーディネーター

私は2018年10月に、長野県県民文化部文化政策課文化振興コーディネーターに着任した。

「文化のことはわかりませんが」と職員の皆さんは口を揃えて言う。文化行政は、自分自身の言葉で語ることが難しい分野と考えられているのだ。そのため、県庁内の調整で一步踏み込んだ説明が必要になるときに、「専門スタッフ」である私の「生の声」が求められた。

その前に担当職員の方が施策の概要を組み立て、説明資料を作成する。私は必要に応じて、県内外の事例などを参考に、例えば長野県ならどのような考え方をとれるのかを情報提供したり資料として出す。このために日頃、関わりそうな県内外の活動を見て回り、一緒に取り組めるように地域のプレイヤーと関係づくりをしている。私が作った資料から言葉遣いや概念が援用されて施策になっていくこともあるが、あくまでも職員の方たちの判断である。そして施策が実施される中では、職員の皆さんの打合せに立会い見解を述べ現場に関わることもある。

庁内での私のサポートの対象は、基本は文化政策課の皆さんだが、他の部署に越境することもある。障がい者アートに関しては健康福祉部、学校での演劇による学びでは教育委員会、文化観光に関する事業では観光部、産業振興にアートを活用となれば産業部門との打合せにも参加した。文化と他分野の「あいだ」に立って、それなりに文化からの独自性のある意見を述べることにしてきた。

また、県主催事業の関係者に連絡したり、補助事業の支援先とやりとりするときに、担当職員と事業者の「あいだ」に入ることも多くあった。行政の意思表示は小さなことでも間違えや変更がないようにしなければならない、という意識の引き締めは、行政内部にも、外部からもある。その結果、試行錯誤や軌道修正ができないことが、プロセスの変化に富んだ文化芸術分野と行政の相性がうまくない一因と

もなっていると感じる。双方にとって、「100%ではない、県の中の人」としてコーディネーターが使えるのは便利だったと思う。私はひとまず前向きに受け止め、事業者に必要なことは県に確認し、現場の優先順位や考え方を職員の方には伝える。

このように、コーディネーターとしての私は、基本的には職員の方たちのペースで進む場面場面で、その任にある方をサポートする、という関係をとってきた。頼まれたこと、聞かれたことに応える。概ね「リアクション」である。前もって考えを伝えることもあるが、私の役目は「ディレクション」ではない。だから根本的に言えば、職員の方々に学んでいただく必要がある。文化政策・文化行政はどのように振る舞うべきか。行政や職員の人たちがもっている力や資源をどう使うのがいいか。

ところで、インタビュー調査でも回答しており(事例5)、私のキャリアとしては今の仕事は「ドラマトゥルク」…「演出家・劇作家の共同創作者」として、演劇創作のサポートをしていたことからの派生である。アーティストから地域の実践者にサポートの対象が変わったという感覚だ。

「あいだ」はドラマトゥルクの活動領域を端的に示している。あいだは、彼らの活動と同様、明白なものではないが、演劇制作の過程でいつでも生じる必然の要素である。それらをここに列挙してみよう。戯曲と演出家、演出家と舞台美術家、俳優と演出家、俳優と俳優、理論と実践、戯曲と演出、コンセプトとその実現可能性、テキストと身体、身体と空間、公演(劇場)と観客、劇場と社会、虚構と現実、異なる演劇文化や言語どうし……。これらのあいだは、そのすべてが演劇創造にとって重要である。あいだには多くの可能性が秘められており、そのつなぎ方次第で創造の質やあり方が大きく変わるからである。ドラマトゥルクは、これらを芸術的かつ知的

に「ネットワーク化」する。

(平田栄一郎『ドラマトゥルク 舞台芸術を進化／深化させる者』三元社刊、2010、p.19-20)

「演劇制作／創造」を「文化行政／地域振興」、「戯曲」を「事業計画」、「俳優」を「参加者」…等々に置き換えて、要素の「あいだ」を考えると、ここに書かれたことはコーディネーターのあり方そのものに見えてくる。私が行政の中にコーディネーターが必要だと思うのは、「あいだ」をつなぎ直し、地域のプレイヤーが秘めている可能性を活かす必要があると考えるからだ。

公立の文化施設を管理する目的などで、自治体の外郭に文化財団が設置されている。但し、行政改革と人口減を見越した緊縮の中で、文化財団への出費がギリギリまで抑えられている地域も少なくないだろう。文化財団のほうからみると、公立文化施設として行政から課された役割を全うするには供給される予算が足りなすぎると、長年不満を申し立て続けている…この構図が固まってしまった例も多いと推察する。(私はこれを冗談めかして「家庭内 DV 構造」と呼んでいる)

行政も文化財団も公共の福祉のために仕事をしている。地域住民にとっては、行政や文化財団しかリソースが無いわけではない。むしろ民間のプレイヤーが地域の文化芸術を担い、支え続けてきて、今この困難多き時代に機敏に反応して、地域の中で新たな課題にチャレンジしようとしている。昔は文化協会などが行政のもとでまとめられたが、今は地域で意欲ある人ほど、起業したり、非営利団体を設立したりして独立的に活動している。

文化行政の「あいだ」で働くコーディネーターは、互いに内向きに睨み合っている行政と文化財団の体の向きを変え、地域の多様なプレイヤーとの関係を結びなおす。これを起点として、行政と地域の「あいだ」をつなぎ直し、文化的コモンズを結ぶ中間支

援組織として、文化財団を改めて定義することが必要になってきているのではないかと、私は思う。行政も文化財団も、地域の「共同創作者」として文化芸術環境／文化的コモンズを持続可能に運営していくという自覚をもたなければならないのである。

専門人材然としない存在がいること の意味

今回の調査研究の意義は、大きく2つある。1つは、実像がわかりにくい「コーディネーター」という専門人材然としない存在の働きを、豊富な事例とともに具体的に明らかにしたこと。もう1つは、コーディネーターを通して生まれてくる多様な相互作用を浮き彫りにしたことである。

ところで、なぜ今コーディネーター研究なのか。本研究に先立つ平成26・27年度の「地域における文化・芸術活動を担う人材の育成等に関する調査研究」（地域創造）(*3)が前提にあるのだろう。同研究では、地域の活力の創出に重要な役割を果たす「文化的モモンズ」(地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地的な文化的営み)の形成には、コーディネーターの育成・確保が必要だと結論づけた。そのコーディネーター人材像を探究したのが本研究である。そう理解した上で、研究会や座談会に参加して考えたことを、以下に整理する。

1. 「互いに整え合っている」という相互作用感覚

コーディネート (coordinate) は、もともと「co:ともに、ordi:整える (ラテン語 ordo[秩序]から)、ate:する」という語義の要素からなる言葉である。整えることで秩序が生まれ、調整するという意味になる。注目したいのは「co:ともに」の部分である。「ともに整える、お互いを整え合う」こと。つまり、どちらかが一方的に影響を与えるのではなく、相互に作用しあう状況を創り出し、関係性を更新していくことがコーディネートである。これは、今回の事例に共通する特徴だった。

文化・芸術分野では、他の社会領域との横断的取り組みが推進されて久しいが、たいていの場合「文化・芸術の力を他分野に波及する」とか「アートによる他領域への影響」など、「文化・芸術が他者に何かを与える」という文脈で語られる。影響力を持つのは、常に文化・芸術の側であるかのように。しか

し、実際に現場で起きていることは一方向の作用などはまったくなく、互いに何らかの影響しあっている。文化・芸術側も、他領域から多くを受け取っているのである。教え／教えられ、助け／助けられ、与え／与えられるという、立場の流動性をともなう相互作用を認識しない限り、文化・芸術と他分野の融合的な取り組みや越境連携はうまくいかない。このことを肌感覚で理解して動いているのが、間に立つコーディネーターなのだと、今回の事例調査に登場したコーディネーターの実践からも実感した。越境して相手の土俵でも相撲をとっているし、線引きせず土俵自体を広げているように感じられた。

再びコーディネートの語義に戻れば、「ともに整え秩序を生み出すこと」の「秩序」とは、本研究の座談会でも話題となった「自治」のことなのだろう。

「私」が主語のディレクターやプロデューサーとは違い、「私たち」で語ることになるコーディネーターが、関係する人々との相互作用で生み出しているものは、自分たちで考え、決定し、整える、自治の意識。越境して各所をつなぐコーディネーターの周辺には、小さくとも多様な領域の特性や機能を自発的に備えた「小規模多機能自治」的な思考が生まれているのかもしれない。

2. 見えにくい仕事を可視化するために

コーディネーターが整えるものは、形が見えやすいプロジェクトや場（拠点）であることもあれば、外からは形も成果も見えにくいものもある。今回の調査研究結果で私が注目したのは後者だった。コーディネーターの仕事が一言で表現しにくい要因でもあるからだ。形ないものとは、例えば、関係性や意識、情報、環境、仕組み、モチベーション、相談の回路などである。こうしたものは、いったい何をコーディネートしているのかわかりにくいため、仕事として理解されにくい。しかし、そうした「わかり

にくさ」を引き受けているのがコーディネーターであり、コーディネートという行為の特徴でもあることが、今回の研究でも実によくみえてきた。コーディネーターの仕事は、具体的に掘り下げれば掘り下げるほど多岐に渡っていて、単純には類型化できず、一言で形容しがたいのである。

調査結果をすっきりまとめるのが難しそうだが、だからこそ本調査研究は意味がある。今までは、わかりにくいために、あたかも存在していないかのようにになっていた仕事は、コーディネートなのだと、光を当てたのである。間に立って、わかりにくい調整事を引き受けている人に、「コーディネーター」というタイトルを提示したのではないだろうか。

あらゆる職場や現場には（文化・芸術に限らず）、可視化されにくい無形の調整事は存在して、その仕事を引き受けている人がいる。さらにいえば、すべての人が日々何らか可視化しにくい調整事を行っているともいえる。つまり、あらゆる人はコーディネーターを行っており、誰もがコーディネーターと言ってもよいだろう。この視点を積極的に文化・芸術の現場に生かしていくとすれば、ただでさえわかりにくいと言われる芸術・文化の仕事を世の中に可視化していくために、今後は「コーディネーター」というタイトルをもっと活用していくとよいのではないだろうか。部長、課長、係長という肩書がなくとも日々調整事に尽力している若き自治体の文化担当職員や、館長や芸術監督、ディレクター、プロデューサー、キュレーターではないけれども、間に立って調整に奔走する文化施設の職員に、コーディネーターのタイトルを。タイトル自体が重要なのではない。専門人材然としていない芸術・文化の担い手の見えにくい仕事を可視化し、その価値を認めること。そのためにコーディネーターという名称を上手にかかしていくことが大事なのである。

最後に、私が使用している「プロジェクト・コーディネーター」とは何かを端的に表現してくれたデ

ザイナーさんの言葉を共有したい。こうありたいと思いつながら、日々仕事に向き合っている。

コンセプトは「架け橋」。

存在するモノとまだ存在しないモノをつなぐ

人と人、人とモノ、人とコト・・・モノとコトをつなぐ

そんな役割がプロジェクト・コーディネーター。

（NDCグラフィックス デザイナー 中山典科）

*3 : <https://www.jafra.or.jp/library/report/26-27/index.html>

第 2 部 事例調査レポート

事例 1

市民協働で 公立文化施設のあり方を更新する

調査対象

【コーディネーター】

長野隆人（いわき芸術文化交流館アリオス 支配人）

【関係者】

阿部峻久（特定非営利活動法人Wunderground／いわき潮目文化共創都市づくり推進実行委員会 実行委員長／はまから 代表）、稲田雅子（いわき市立鹿島公民館 館長／アリオスコミュニティ 事務局長）、小野寺孝晃（TATAKIAGE Japan 代表）、亀岡点（いわき市立平第三中学校 教諭）、木村剛（いわき商工会議所中小企業相談所企画グループ 主任主査）、小林尚稔（いわき市農林水産部農政流通課 農産物流通係、元・文化振興課）、下山田誠（いわき市田人支所 支所長／いわき芸術文化交流館アリオス 前・副館長）、杉浦友治（いわき市立美術館 館長）、鈴木修典（「まちポレいわき」「ポレポレシネマズいわき小名浜」株式会社名画座 代表取締役／元・平商店会連合会 会長／元・いわき市PTA連絡協議会 会長／平まちづくり協議会 会長）、前澤由美（特定非営利活動法人いわき緊急サポートセンター 理事長／こども♡あいネット 副代表）

事例調査から見てきたポイント

◎ 市民の創造性を起点に市民協働をコーディネートする

- 公立劇場・ホールの既存事業の枠外で、モヤモヤしている市民との接点を探る話し合いや交流から多様な市民活動が生まれていく。
- 市民協働や地域活性化に向けて、地域の文化施設は人材やノウハウ、ネットワークなど施設の持てるリソースを総動員するという姿勢が求められる。

◎ 事業の付属的な広報から、広聴的な役割をもった館全体の司令塔へ

- 広報は、館や事業の広報的な役割にとどまることなく、市民や地域の窓口となる広聴的な機能を担い、館全体の運営方針をリードするポジションでありたい。
- いわきアリオスのように、広報紙に市民編集委員を加え、市民企画で子育てや演劇などへと姉妹媒体を派生させ、その編集・発行を通じて、情報収集と新たな活動につなげるのもひとつの方法。

◎ 来るものは拒まず受け入れてみる、連携先を絞らない

- 館に寄せられるさまざまな相談事に、イエス、ノーで接するのではなく、来るものは拒まずという姿勢で受け入れてみる、お手伝いできそうなところから関わってみる、という姿勢が次に結びつく。
- 連携先は文化関係にとどまらない。子育て団体や学校、商工会議所、地域のプロサッカーチームまで、さまざまな形で関係性を紡いでいくことが、文化を媒介にした新たな活動の種を生み出していく。

◎ 地域を担う次世代育成という視点を持つ

- 次世代育成を念頭に、若い世代の社会参画の場として、劇場やアート周りの仕事、芸術家の生き方などを中高生に知ってもらうことを意識する。

*1：2007年に、美術家の藤浩志と共に、いわきアリオスや施設の前庭のように整備された公園、街なかを舞台に市民がやりたいこと、大切だと思ふことにチャレンジし、成功も失敗も含めて手探りで進めたプロジェクト。別名モヤモヤ会議。月に1度の会議を軸に進め、2008年度末に市民のやりたいことを集めたフェスティバルを開催。翌2009年度はKOSUGE1-16をホストアーティストとして継続。同時に、会議発案の「いわきぼうけん映画祭」を準備し2011年2月に実施。震災後は、避難所を巡る映画会や、市民と共に復興を考える「アートおどろく いわき復興モヤモヤ会議」などを展開。



- 例えばいわきアリオスでは、公演時の影アナウンスを市内高校生の放送部員が担うほか、新聞部や写真部などで活動する学生達が、プロの現場を体験できる機会を提供している。

◎ 地域文化拠点に求められる新たなベクトルと評価軸

- 90年代以降各地に「創造型劇場」が誕生し、2012年に劇場法が施行されて、公立劇場・ホールのあるべき姿が示されてきた。今後は、それとは異なるベクトルから、その先の射程を見据え、地域の文化的つながりを総合的にコーディネートするような文化施設が求められている。
- そうした地域文化拠点には、これまでとは異なる新たな評価軸が求められる。

◎ 市民の創意工夫に寄り添い、市民に委ね、任せていく

- 市民の人を思いやる心、創意工夫する心に寄り添う存在として、地域の文化施設が果たせることを意識して事業を推進していく。
- 市民自身がコーディネーターとなり、地域全体でパフォーマンスをあげていくために、市民の発想や意欲に委ね、任せていくことが、地域の文化拠点の広がりを生む。

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

長野さんのコーディネーター業務は、(1) 市民の創造性を起点にしたコーディネート、(2) 既存の文化施設とは異なるアプローチからの市民との接点を通じた支援、(3) 中心市街地活性化や文化施設連携、の3つに大別できる。

いわき芸術文化交流館アリオス（以下、「いわきアリオス」、インタビュー発言中は「アリオス」）は2008年4月に開館（第1次オープン）し、日本の公立文化施設で初めてマーケティング・グループ（現・広報グループ）が設けられた。マーケティングというと、チケットを売る、営業をするようなイメージがあるが、いわきアリオスではこのセクションを市民協働や街なか連携の起点とし、街や市民のさまざまな窓口になりつつ、市民協働のアートプロジェクトなどにも取り組んだ。長野さんは、グループ内で広報の専門性を活かした仕事を担当した。そして、2012年からはチーフとして広報グループを率い、2020年度に副館長心得となり、2021年にはいわきアリオスの事業や運営全般を俯瞰、統括する支配人（副館長）に就任する。

(1) 市民の創造性を起点にしたコーディネート

いわきアリオスでは、開館当初から、何かに取り組みたいけれど何をしていいのかわからないというようなモヤモヤした想いを抱えた市民と共に、いわきアリオスや街なかで面白いことや大切なことに取り組む会議「アリオス・プランツ!」（*1）を行っていた。この事業は長野さんが配属されたマーケティング・グループが担い、この会議から「アリオス・パークフェス」「いわきぼうけん映画祭」「三函座リバーズプロジェクト」（古い映画館の再生プロジェクト）など、多数のプロジェクトが立ち上がった。

東日本大震災後には、この会議メンバーが中心になり「アートおどろく いわき復興モヤモヤ会議」を行い、そこから「アリオス・こどもプロジェクト」などの新たな活動が始まっている。

*2: 震災後に行った「アートおどろく いわき復興モヤモヤ会議」で立ち上がった「アリオス・こどもプロジェクト」が編集する媒体。市内の子ども向けイベントなどの情報を収集し発信している。

*3: 「フラガールのふるさと」福島県いわき市を舞台に、全国から集まった高校生たちがフラダンスの実力を競う。



キッズ☆アリベ vol.112

【インタビュー調査の発言から】

- 「アリオス・プランツ！」で始まった「いわきぼうけん映画祭」は市民が主体でやることと公的なものとの接点に疑問を感じて、一旦はやめたが、同時期に立ち上がった「いわきポレポレ映画祭」（駅前の映画館が企画した映画祭）にぼうけん映画祭のショートムービー部門の要素を継続するような形で整理した。「アリオス・パークフェス」は、2018年の11月まで、4月から11月までの第2日曜日に計60回開催した。（長野）
- 「アリオス・こどもプロジェクト」は今も続いていて、市民の人たちで自走できるようになっている。これは“成長産業”だと思ったので、きちんと担当スタッフを付けて伴走してもらいながら、月に1度の「あそび工房」実施と「キッズ☆アリベ」（*2）の発行を続けている（長野）
- モヤモヤ会議（アリオス・プランツ！）にも参加しつつ、モヤモヤするのが苦手だったので自分たちは街で具体的に動きたいと思った。ただ、今思うと、アリオスはそういう活動を先進的にやっていた場所だとすごく感じる。当時は、まだイベント中心で、いわきにはアーティストと協働するようなアートプロジェクトのような動きがなく、土壌も全然できていなかった。（阿部）
- 震災以降、「玄玄天」というまちなかのアートフェスティバルを行った。それを経済などに結びつけるのではなく、文化の土壌づくりにつなげていかなければならない。結局、そういうものがないとクリエイティブな視点や思考が育たないということを、ここ10年ですごく感じている。いわきは経済成長に合わせてどんどん産業を伸ばしていたが、アートを通じて、育む心を養う教育がなかなか生まれづらいと感じていた。アリオスを起点にそのような動きが芽生えた10年と感じた。（阿部）

(2) 既存の文化施設とは異なるアプローチからの市民との接点を通じた支援

長野さんは、いわきアリオスの広報紙アリオスペーパーの創刊編集長を務めた（～2016年）。特徴的なのは、媒体の編集を通じて市民と協働する点だろう。そして、広報紙を媒介にして市民と多様な関係をつくり、そこから次世代育成も含めた実践へと進化させている。

いわきアリオスには公演時の託児にも対応するキッズルームがある。その活用においても、既存の文化施設にはない市民との接点や、市民協働の視点からアプローチしている。

【インタビュー調査の発言から】

□ 市民協働の媒体編集

- 僕は広報寄りの人間で編集などが強かったので、2010年から「アリオスペーパー編集部員」という市民のライターを集めていった。育成系のものに力を入れていくのがマーケティング・グループの一つの鍵になっていたことは確かである。（長野）
- アリオスペーパー編集部員は2017年まで活動した。その後は「エンゲキ☆アリベ」があり、山田亜希子（子育てや子育て環境に関心が高い市民）さんが「キッズ☆アリベ」をずっと続けている。（長野）
- アリオスがすべてやるのではなく、市民の人たちが主体的に情報を収集し、こちらは彼らができる裁量がどこまでなのかを見極めつつ、それらの情報のアウトプットを形にしていく。（長野）

□ 媒体の編集発行支援を通じた次世代育成

- 広報グループになった2012年度以降は、次世代の子たちに何かをもたせたいかというところに、活動の軸足を置いた感じになっている。（長野）
- フラガールズ甲子園（*3）では、高校生のフラダンス部の全国大会の広報紙「フラガールタイムズ」の編集発

行を市内高校の新聞部や写真部が行い、アリオスは活動室や印刷機、編集用 PC などを提供している。（長野）

- 「いわき太平洋・島サミット」という外務省主催のイベント（2015年、2018年）のサポートを観光交流課から依頼されたときは、高校生の広報チームを編成して、取材活動を行い冊子にまとめた。（長野）

□ キッズルームを起点に、多様な表現活動や地域の子育てを支援

- 「アリオス・プランツ！」の中で市民の山田亜希子さんが担当していた「アリオス・こどもプロジェクト」や、これまで100回以上続いている「あそび工房」など、市民ボランティアの人たちと一緒に子どもの遊びのイベントなどを毎月1回行ってきた。（長野）
- 「あそび工房」のボランティアの高校生には、「あそび工房」でダンスをやってもらったこともある。彼女は、その後学習院大学で教育学を学び、自分のゼミ生や教授と一緒にワークショップをやってくれた。卒論のテーマも「あそび工房」だった。（長野）
- 2012年に設立された「こども♡あいネット」という団体のメンバーとして、アリオスのカスケードで子育て支援団体が集まる「こども♡あいネットフェア」をやっていた。また、アーティストが子連れで来たときのリハーサル・本番での預かりも行っていた。（前澤）
- 当団体のアンケートでも「アリオスは母子ともに、憧れや気分が上がる場所」という声が多かった。（前澤）
- 既存の文化施設ではないところでの接点を受け入れられる場所というのを大事にしている。（長野）

(3) 中心市街地活性化や文化施設連携～街のパートナーとして

「アリオス・プランツ！」から生まれた「アリオス・パークフェス」は年々規模が拡大して、いわきアリオスに面した会場の平中央公園には収まりきらなくなった。そこで、街の商店会青年部や NPO が主体となり、街なかの別の場所にも派生的に屋外フェスティバルが広がることになった。

また、「いわき七夕まつり」や「いわき街なかコンサート」、「いわきポレポレ映画祭」など、中心市街地で行われる「祭り」に参画することは、いわきアリオスと街なかでの催事を担う人たち双方が深く知り合うきっかけとなっている。長野さんは、ここでも媒体の編集という方向から街との関係を築いていて、そこには地域文化拠点として持てるノウハウを余さず街に提供するという姿勢が見てとれる。

また、中心市街地活性化の方法として、市立美術館や公民館との連携にも積極的に関わっているほか、市の文化事業と市民プロジェクトを連携させるなど、いわきアリオスの持つネットワークを活用した取り組みは幅広い。支配人としての長野さんは、街の催事の持続性にも配慮しながら、このような活動を通じて街との関係を深めつつ、いわきアリオスとして街の記録を蓄積させていくことも意識している。

【インタビュー調査の発言から】

□ 市民主導のプロジェクトからひろがる連携

- 「アリオス・パークフェス」はアリオスの立地する平中央公園で開催していたが、大体50くらいのお店で一杯になって、すぐに出店受け付けが終了になるようになり、街の若手がつくってくれた「三丁目ジャンボリー」に流れて出店するという事になった。（長野）
- その結果、アリオスといわき駅前を結ぶ経路ができ、NPO タタキアゲジャパンの方が、「大工町パークフェス」というのを立ち上げて、最盛期には、アリオスと三丁目と大工町と、3カ所で同時に展開することもあった。（長野）

□ 地域文化拠点のリソースを活用して街の祭りに貢献する

- 「いわき七夕まつり」実行委員会の幹事会に入っていて、毎年関わっている。また「いわき街なかコンサート」の実行委員会も十数年携わっている。（長野）
- アリオスで街の七夕まつりのパンフレットを制作しているが、そこではアリオスに蓄積したデザインや編集といった職能が生きている。仕事量は相当なものになるが、七夕の歴史が市民に可視化されるということで引き受けている。（長野）
- アリオスとしても七夕まつりを盛り上げるために、3日間のまつりの初日に、七夕飾りの審査をして、新聞号外にまとめて、翌日道行く人たちに渡して盛り上げるということも提案した。（長野）
- 「いわきポレポレ映画祭」では、アリオスも主催で入ってほしいと頼まれて参画している。アリオスペーパーで特集を組み、駅前の商業施設 LATOV や湯本の温泉宿古滝屋などから割引券やクーポンをいただく仕組みにして、市民が映画を楽しみつつ、市街地のにぎわいや、飲食店の活性化つながればと思っている。（長野）
- 商工会議所は、「いわきポレポレ映画祭」の実行委員会に入っていて、七夕まつり実行委員会では事務局を担っている。（木村）

□ 街との関係性を深め、街の未来を見据える

- 七夕まつりは2年目からパンフレット編集予算を取った。これを通じて、街の人たちと仲良くなれるし、七夕の歴史を知ることでもできると考えると、その価値はあると思う。（長野）
- アリオスと関係があまり近くなかった商店会の人たちとも、号外や取材先の話を通じていろいろな情報が集まる。また、主催公演のチラシやアリオスペーパーを置いてもらって、微力ながら貢献をしつつ関係性をつくっている。（長野）
- アリオスは、人を動かす上で中心的な機関。街なかのメンバーがそれをどう活かすかが重要。（鈴木）

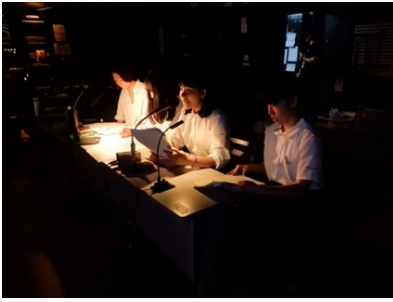
□ 市立美術館や公民館などとの連携

- 美術館では月例でアリオスとの連絡会を設けて、情報交換し、連携企画につなげようとしている。（杉浦）
- 今後はサーリネンの展示があるので、関係する映画を小劇場で上映する。そういうことのお膳立てを長野さんに相談する。美術館の担当学芸員は「いわきポレポレ映画祭」の実行委員にもなっている。（杉浦）
- アリオスがあるのとなないのとでは、いわきの風景がずいぶん違ったと思う。それは一言では言えない広がりがある（杉浦）
- 公民館主催でアリオスの見学会（バックステージツアー）をやってもらった。公民館に足を運ぶ人はなかなかエリアを出ないので、いい機会になった。（稲田）
- 市の文化振興課が進めた「潮目文化共創都市づくり」とアリオスの関係性は、2018年にあそび工房と連携し、そこで作った「かかし」をリヤカーに乗せて白水町まで引いていって、その流れで講座をやって、さらに屋外アート鑑賞ツアーも行った。（小林）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

(1) 編集者からの劇場・ホール広報への転身

長野さんは、いわきアリオスに入る前は、クラシック音楽誌の編集者だった。いわきアリオスはクラシック音楽以外にも、ワールドミュージックや演劇・ダンスのほか、ジャンルにとらわれない事業を展開しており、



福島県立磐城桜が丘
高等学校放送局

*4：震災後の対応や、いわきアリオス開館当初の市民協働型プロジェクトについては、「文化からの復興～市民と震災といわきアリオスと」（水曜社）に詳述されている。

特に長野さんが所属したマーケティング・グループは、既存の舞台芸術のジャンル以外のところで市民との接点をつくることを念頭に置き活動していた。その手法として、市民協働によるアートプロジェクトも手がけ、現代美術のアーティストとの協働も行っていた。市民の意見に耳を傾け、関係性を築きながら、うまく化学反応を起こすようなノウハウを、当時の上司や同僚のやり方を見ながら身につけていった。

【インタビュー調査の発言から】

- もともとクラシック音楽やバレエの情報誌の編集で、コーディネーションといえば、インタビューで編集方針に合わせたヘアメイクやカメラマンの撮影方法、インタビュー項目などを考え、それが誌面の中でどんな役割を果たすのか、必要な金はどうやって引っ張ってくるのかを、考えることだった。（長野）
- 「アリオス・プランツ！」などで、上司が市民の人たちとうまくやっていくのを見ていて、そのやり方を盗みつつ、幾つもの関係性を築きながら、良好にやっていくノウハウを得ていった。（長野）
- コーディネーターは、とにかく、マルチでいろいろなことに的確に対応しなくてはならない。（長野）

(2) 東日本大震災を経て

2011年3月11日の東日本大震災を経て（*4）、同僚の離職や上司の任期終了による退職などがあり、市民協働プロジェクトも形を変えていく。その中で長野さんが特に力を注いだのは、地域子どもたちや子育て世代の人たちとの関係性を深めることだった。続いて、地域の高校生、特に愛情を込めて「マイナー文化部」と呼ぶ高校生達との連携を起点に、中学校も含めた学校との関係性を深めていくなかで、市役所からも、学生の話を知りたいときには長野さんに相談が来るようになる。

【インタビュー調査の発言から】

- 高校生や中学生も含めて若い世代の社会参画の場として、劇場やアート周りの仕事、芸術家の生き方などを中高生に知ってもらうことを意識的にやってきている。（長野）
- 次世代育成というと、当然、聴衆や演じ手の育成もあるが、僕が意識しているのは、地域の劇場というのは、特に運動部や花形の吹奏楽部以外の子どもたちがやりがいを感じ、生きるために必要な自分の居場所や、活躍できる場所、社会の人に喜んでもらえる場を用意できるということである。（長野）
- 例えばアリオスでは、放送部の高校生が影アナウンスを務めている。卒業後も「いわき街なかコンサート」の司会のために進学先から戻ってきたり、マスコミに就職したりすることが起こっている。（長野）
- 中学校時代に全国大会出場や受賞経験のある中学生が、市内高校の放送部に入ると、自分とつながり、「フラガールズ甲子園」のMCや、アリオスの主催公演での影アナウンスなどをやることになる。（長野）
- アリオスは中学校の教員や生徒にとって頼りになる存在。（亀岡）

(3) いわきアリオスの支配人に就任

長野さんは、前支配人が定年退職を待たずしてヘッドハンティングされた後、副館長心得という役職を経て、2021年度より支配人（副館長）になった。それまで広報グループのチーフとして、事業のみならず施設の各セクションをつなぎ、市内の多様な団体とも連携を進めてきた長野さんが、館全体を俯瞰、統括する支配人のポジションに就くのは自然な流れだったといえよう。長野さんは、現在の新たな立場から、さらに街なかや市民との連携を深めていこうという意気込みを持っている。

【インタビュー調査の発言から】

- 言い方は悪いけれども、支配人というポストで直接お願い、発信することによって、動く物事も当然あると思う。そこを勘違いしない程度に把握しながら、より効果を上げていければとは思っている。（長野）

3. 長野さんのコーディネート業務の特性と成果

長野さんのコーディネートのスタイルを大別すると以下の3点に集約できる。(1)「来るものは拒まず」という精神で、市民や街からの要望を受け入れること、(2) アーティストのコーディネートのような狭義の文化的リソースだけではなく、媒体の企画制作、劇場が持っている機能なども含めていわきアリオスの持てるリソースを余すところなく提供すること、(3)次世代育成の視点も交えて、学生達が活躍できる場を用意すること、長野さんはその3つに力点を置いている。

そして、コーディネートの先には、相手の活動が持続できるかも見据えて、長い年月付き合っていく覚悟をしっかりと持つことが大切だという発言もあった。

いわきアリオスのように立派な文化施設の一般的なイメージは、地域の「文化の殿堂」で、市民にとっては非日常的で敷居の高い場となりがちだろう。長野さんはそこから離れて「日常化」の接点を探ることこそが大切だと指摘する。そこからは、学生の部活動や、ただ施設のロビーで過ごす人たちへのまなざしが、施設に拠点を置くコーディネーターに求められるということが浮かび上がってくる。

【インタビュー調査の発言から】

□ 地域連携のキーワードは「来るものは拒まず」

- あそこは役所っぽくないからといって、いろいろな相談事が来る。基本的に来るものは拒まずという姿勢でいる。アリオスが、何か役に立ってくれるだろう、解決してくれるだろうと持ち込まれたものに関しては、公的であることが担保される限り、お手伝いできそうなところで関わりたい、ということがすごく多い。（長野）
- 満たしたいものが個人的な要望の場合は、無理だということはある。でも、その人たちも、アリオスの取組みを見て、こういうことだったら相談を持ち掛けても受け入れてくれると理解している。（長野）
- 建物を見た時は、閉じた施設なのかなと感じていたが、相談すると二つ返事で物事が進むと感じている。（小野寺）
- 学校から見ると、やはり敷居が高いと感じていた。でも、実際に付き合いをはじめると、気さくで付き合いやすいと感じる。（亀岡）

□ 街の雑用から子育て支援まで、持てるリソースを総動員してコーディネートする

- アーティストを介在させた地域でのコーディネーションも当然やるが、街の雑用的なコーディネーションもある。（長野）
- アリオスは子育て支援のコミュニティの一翼を担っているという感じはする。いわき市のこども家庭課などの事業には入っていないが、子育てコンシェルジュ（子育て支援相談窓口）の方々は、「キッズ☆アリベ」を参照してここのイベントなどを紹介したり、見に来たりして、ママたちに情報提供している。これは10年続いている。（長野）
- 前澤さんが副代表の「こども♡あいネット」は、いわき市の子育て支援団体が20近く入っている団体。その人

たちも、保健福祉センターで開催していた「こども♡あいネットフェア」という、活動団体が一堂に会すイベントを、2013年からアリオスでやらせてほしいと言って来たので「あそび工房」との共同開催という条件で受け入れた。イベントをやるための付き合いから始まったが、例えば各国体の取り組みを「キッズ☆アリベ」に載せる段階になると日常的な連絡が始まって、さまざまな情報が入るようになる。（長野）

□ 次世代の育成～文化施設から子どもたちがさまざまな職業を知るきっかけをつくる

- 柳家小三治独演会での影アナウンスを担当した男子高校生には、小三治さんがわざわざ彼の控え室まで来て、「いやあ、素晴らしかった。頑張れ、いい声だった」と声をかけてくれた。そういう風に、芸術家の表でやっている芸の姿と、裏での生態を彼らに見せることも重要。（長野）
- アリオスの一番近くの中学校の生徒たちが、玉川奈々福さんの浪曲公演を見て、映画も一緒に見て、奈々福さんに取材してもらった。浪曲師や曲師の生活や生態、芸術の魅力や、自分が中学・高校に進学するときのこと、将来どんな生き方をしてほしいかというアドバイスをもらったりした。（長野）
- 彼らには、創造的なことや手づくりで創意工夫をする現場を見てもらう。あとはマスコミの人など「憧れ産業」の人たちと出会ったり、地元ラジオ局や放送局のアナウンサーにアナウンスの部活動の指導をしてもらったりするだけでも、全然違うということがある。（長野）
- 「あそび工房」に参加した中学生がアリオスペーパーの取材を受けたことをきっかけにつながりができて、映画監督の周防正行さんにインタビューをさせてもらった。浪曲師の玉川奈々福さんへの帯同取材では、興味を持った生徒たちの働きかけで生徒全員が参加しての浪曲鑑賞教室が実現した。（亀岡）
- 生徒たちには、学校の外でしか学べないことがあると感じた。（亀岡）

□ 5年後10年後を見据えた「覚悟」

- コーディネーター的な仕事を頼まれることは結構多いが、それを実際に引き受けると覚悟するときは、どうすればそれが継続できるのかを念頭に置いて、5年後、10年後にどのようなところまで行けるといいかイメージして引き受けている。（長野）
- そういう活動によって、地域にどういった花が開いていくといいなという懐勘定だけはする。（長野）

□ 市民のハレの場としてだけではなく、ケの時間の市民とどれくらい接点を作れるか

- 皆さんが文化施設に来るのは、年に1回か2回あればいいほうで、しかもそれはハレの日に来るという概念が昔からあり、そういう認識はたぶん変えられていないだろうと思う。（長野）
- 人口35万人の地方都市の市民の人たちは、それ以外の三百六十何日は大体ケの日を過ごしていると思う。そのケの日々の中で、私たちが提案できることは他にないのかということ。要は、ここに来て何かを見聞きする、練習する、発表するというだけではない接点をどれだけつくれるか。（長野）
- 前支配人の大石時雄さんも言っていたが、トイレに立ち寄るだけでも、中でお弁当を食べるだけでもいい。キッズルームで子どもが遊んで、親が世間話や子育ての悩みを話して帰ってくれるだけでもいいし、勉強する高校生たちがいてくれることでもいい。（長野）
- 接点となり得る可能性を、自分たち自身で否定しないことである。例えば、ロビーの机で勉強していたり、あそび工房を手伝ったりした学生が東京に行くと、「東京にそんなところはないですね、アリオスはやはり特殊です。そういったところがあって良かったです」と言ってくれる。（長野）

◎ 成果

ここまで見てきたとおり、いわきアリオスは、アリオス流とでも呼ぶべき独自の市民協働のスタイルを確立してきた。ただ、長野さんはその成果を謙虚に捉えている。街に派手な変化をもたらすのではなく、市民の日常が少し変わるくらいの変化でいいという視点は、コーディネーター業務を推進する上での大切な指標になると考えられる。

いわきアリオスが様々に用意してきた次世代育成の機会から、具体的な職業につながる人もでてきている一方、長野さんは、このようなコーディネート業務を地域文化施設が受け持つ上で、館内の理解はまだ十分に進んでいないかもしれないと指摘する。これからの文化施設では、市民協働、地域協働の視点を館で働く全員が持つことが肝要となるだろう。

最近、「アリオスコミュニティ」というアリオスの名前を付けた市民団体が立ち上がった。館の主導する事業に参加するだけでなく、地域文化施設の運営に市民自らが積極的に関わっていこうという姿勢からは、市民自治の萌芽を感じられる。そういうコミュニティが立ち上がることで自体が、いわきアリオスが市民の声に耳を傾ける施設であるということの裏付けでもある。

【インタビュー調査の発言から】

□ 街の変化

- 街が変わったと言ってくれる人もいれば、ピンとこない人もいるだろう。それはどちらでもいいと思う。あまり派手な成果というよりも、日常がちょっとだけ変わっているというくらいでいい。（長野）
- いわき在住の地域活動家、小松理虔さん（*5）が話を聞いてくれたときに、アリオスの役割は「地域に文化という名の“漢方”を処方すること」ですねと要約してくれたが、継続的に投与することによって、地域の基礎体温が少しだけ上がったたり免疫力がついたりすることが大事なんだろうと思う。（長野）
- ここに集ってくるいろいろな生態系の人たちのもたらすものが、変容とまではいかないけれども、市民生活に大なり小なり影響を与えていくということだと思う。（長野）
- 記者時代に感じたが、アリオスは県内の中通り地方、会津地方にも文化的な影響を与えている。（木村）

□ 行政や街からの信頼の獲得

- いわき市の文化政策ビジョンを決定するときに、市の文化振興課から中高生、大学生の声を聞きたいと相談された。アリオスは高校生が得意だからという感じで来る。（長野）
- アリオスで1～2年ボランティアをしてくれた生徒たちには感謝状を出している。それを、大学の推薦入試に提出する書類として使うと、皆さん早々に進学先が決まることが多い。すると、校長も進路指導主事も教え子がアリオスでのボランティア経験を武器に志望校に入れたということで感謝してくれるし、アリオスは学校の評価を高めることに貢献するところという認識も芽生える。（長野）
- 亀岡先生の中学時代の教え子で、高校時代アリオスでボランティアしていた人が、去年、新聞記者になった報告に来てくれた。また別の1人は、大学の芸術学部で映画を専攻するようになり、去年、周防正行監督が来た時も、後輩のお世話をしたり、影アナウンスのピンチヒッターを手伝ってくれたりした。（長野）
- 街のコーディネーター的な仕事への館内での評価はひょっとして低いかもしれない。事業にもなっていないし、急に余計な仕事も増えるし、今後の課題だとは思いますが、対外的な評価という点では、商工会議所や商店会から感謝されることは、やはりマーケティング・グループや広報グループ案件だったりする。（長野）

- アリオスほど外に出て行っている文化拠点は知らない。（杉浦）

□ アリオスコミュニティ

- アリオスに要望を出すのではなく、自らが活動したいことに対して、アリオスや他の市民にどう手伝ってもらうかを話し合い、動かしていく場。あくまでも主導は市民というスタンス。（長野）
- 役員8人で、月に一度の定例会には15～20名くらいが出席する。（長野）
- アリオスコミュニティの事務局長を務めている。自分はアリオスの応援団という意識。交流ロビーの一部のカンティーンに置かれたままになっていたスタインウェイのピアノを活用する企画をはじめた。（稲田）

4. 問題点・課題

(1) 地域文化施設に求められる地域のコーディネート力と継続的な人材確保

1990年代以降、全国各地に公立劇場・ホールが急増したが、当時は専門的な知識や経験を持った人材が不足しており、地域創造のステイジラボなどを通して、公立劇場・ホールの運営に関する基礎的な知識やノウハウ、公演事業やアウトリーチなどを行うための専門性を備えるようになってきた。

しかし、今回の調査から、その次の課題が見えてきた。それは、地域の人に寄り添い、地道に伴走するような存在、つまり地域のコーディネートを担う立場としての地域文化施設あるいは機関が求められているということである。文化施設で働く人たちには、地域や社会と文化芸術の両方に軸足を置きつつ、市民目線からの発想や豊かな企画力、バイタリティ溢れる行動力や実行力が求められるだろう。あわせて、そういう機能を持った文化施設には、それに相応しい評価軸を考える必要もある。

また、グループインタビューに参加した多くの方から、長野さんのような仕事を担う後継者について心配しているという声が寄せられた。

【インタビュー調査の発言から】

□ 地域文化施設に求められるのは、企画制作力に加えて地域のコーディネート力

- 地域の文化施設はスタッフ内の発想の転換が必要な時期に来ている。劇場法ができてスタッフの専門性はこれだと思っているところがある。東京や大都市圏ではそれでやっていけるかもしれないが、地方だとそれだけではやっていけない。街の文化状況や、何があって、何が足りないのか、どのような人がいるのかという、マップが的確に分かり、更新されていて、その中で何が必要なのかを察知して、そのために必要なことをオーガナイズできる人材。さらにそれを、クオリティチェックできる専門性を持つ人材が必要だと思う。劇場の現場が好き、音楽が好きというだけでは、結局広がらない。（長野）
- アニメや食文化なども含めた文化や創造性が市民生活にどれだけ密接な関わりをもたらすか。この街のこの人とこの人とこの人を組み合わせれば、効果的に動いていくという地図と設計図を描いてくれる人のほうが、舞台芸術だけの専門家より、正直、街に生きていくだろうという感じはする。（長野）
- そういう人に価値を置いて、しっかり評価されるような仕組みが必要。求められるものは地域の人を大事にすること。そのために、文化施設が持っているリソースを、どう注入するかという究極的にシンプルな話だと思う。そこをやる技をしっかりと共有できるようにしたほうがいい。（長野）
- 時代に即してモデルチェンジができる組織体であればいいと思う。地方に行けば行くほど、そのモデルチェンジができないまま旧態依然としてやっていて、結局、だんだん地域の実情から離れていくという状況がある。

そこに対する危機感は持ってほしい。（長野）

☐ 既存の枠外から考えられる発想と、予算がなくても進められるバイタリティを

- 役所も公立文化施設も、事業＝予算がないと成立しないし評価しない、という固定観念が強いが、予算がなくてもできる事業は多い。必要なものは企画書をつくって、組織内のコンセンサスを取って、どこかからお金を引っ張ってでも、事業として成立させるくらいのバイタリティがないといけない。（長野）
- 企画書は年間10本でも20本でも書いて、これが成長分野だと思ったらどんどんスタートさせるくらいのベンチャー的発想がないと、民間のスピード感と完全に離れていく。（長野）
- いつかお金がなくなったときに、どうやってお金を引っ張ってくるのか、助成金だけじゃないということは、きちんと知っていてほしい。（長野）
- 外に出るから味方ができて、資金はこちらが用意するから、アリオスはこういったところをやってくれという形で事業化できることもある。純粋に舞台芸術周りだけを見ていないで、お金の回し方や事業枠のつくり方を相当したたかにやっていけるような人が必要。純粋培養では困る。（長野）

☐ 地域文化拠点には新たな評価軸が必要

- 今の文化施設の評価軸には、なかなか引っ掛からない形での成果なり手応えではある。お金をかけずに、活動する場所を用意して、応援していると、みんな頑張っていて、人材育成につながる。（長野）
- 館内での評価は低いかもしれない。事業にもなっていないし、急に余計な仕事も増えるし。その点は今後の課題だとは思いますが、外からの評価という点では、商工会議所や商店会から具体的に感謝されることは、マーケティング・グループ案件だったり、広報グループ案件だったりする。（再掲）（長野）

☐ 後継者育成について

- 長野さんの後継者の問題は気になる（杉浦）
- 長野さんの動き方が半端なくて心配になる。後継者について気になる。（木村）
- 長野さんの後継者をどのようにするか、人的な資産をどのように継承していくかが課題。（鈴木）

(2) 市民と日常的にお付き合いできるような働き方、時間をどう設計するか

幅広く市民の声に耳を傾け、多彩な協働に携わるいわきアリオスであるが、市民に丁寧に対応する時間をどう確保するか、それを前提とした職員の働き方についても解決すべき課題があるという発言もあった。また、本調査では、他のコーディネーターからもコロナ禍で失われつつある無駄話の意義や必要性が共通して話題に上る。長野さんも、一見非効率と思われる対話の時間から重要なタネが出てくると指摘する。

【インタビュー調査の発言から】

☐ 市民と対話する時間を、職員のワークライフバランスの中でどう設計するか

- 難しいのは、ワークライフバランス。市民と関わるといったら、市民の勤務時間終了後からの活動にどれだけコミットするかになる。市民の皆さんがきちんと時間を捻出して来てくださっているのに、こちらが規定の時間内だという訳にはいかないから、その働き方は課題。さらに、リモートで働いているスタッフが増えているから、スタッフワークをどう割り振るのかも含めて、すごく悩ましい。（長野）

☐ 効率化は、非効率なことをやるために

- アリオスは開館当初から、本当によく外に出ていろいろなところを回って、移動中にもスタッフ同士で対話した時間がすごく大事だったと感じる。（長野）
- スタッフの時間の過ごし方と考えると、効率と非効率のはざままでせめぎ合うというか、非効率なことをやるために、効率化できることは極限までしてくれということになる。ルーティンワークはもっと切り詰められるだろうという話もしつつ、でも移動しながらどこかへ行って人に会ったりする非効率なことによって、それ以上の情報を得るためにやるという、その両輪をどうつくるか。（長野）

(3) 地域活動の持続可能性へのまなざし

長野さんが課題として捉えていることはいわきアリオスのことだけでなく、地域の持続可能性にまで広がっている。

【インタビュー調査の発言から】

☐ 活動の持続性

- 10年間やっていると担い手が疲れる。ライフステージも、結婚して子どもができると割ける時間が変わってくる。後継者にきちんとバトンタッチができるかどうかというのが、すごく重要（長野）
- コロナになって如実に感じるのは、街のイベントごとにしても何にしても、それがないと、みんな忙しいから会わなくなってしまうということ。中心市街地でも一部の商店街は、どんどん高齢化していて、この2年やれないだけで、もうできなくなってしまうだろうという話もある。（長野）
- 街の催事も実行委員会などで会って話さないと、情報として分からなくなってくる。そういったところに足を運んで、何が必要なのか、どんな応援、貢献ができるか。あとは、実行委員会で一人ひとりにあいさつするときに、聞き込むだけでも全然違う。（長野）
- 「いわきポレポレ映画祭」も赤字だが続けている。いずれ公共の仕事にする方がいいのではないかと感じている。継続的に文化的なまちづくりを担うのがアリオスの役割。民間では単発で持続性がないことが一番きつい。継続性を担保することによって、街の文化と経済が成り立つと考える。実はあまり見えないけれど、アリオスはその役割をきちんとやってきてくれた。学校で言えば教頭、校長、教育委員会、そういうところがどこまで理解を示してくれるか。やはり皆で情報共有する場をつくりながら、志あるものだけでもやっていかなければならない。その担い手の中心としてアリオスがある。（鈴木）
- 教育と文化がこれからのいわきを変えていくはずなのに、予算が付いていない。それがクリエイティブな活動につながり、地域に創造産業が根付くといいと感じる。（阿部）

5. コーディネーター推進の方向性

(1) 市民自身がコーディネーターとなるために文化施設ができること

コーディネーター推進のためには、文化施設にひとりのコーディネーターが居るだけでは不十分で、館のスタッフや市民自身がその考え方やスキルを学び、館内や地域で複数のコーディネーターが活動できる環境を整える必要がある。文化施設のスタッフには、地域のコーディネーターをマネジメントしていくという発想も必要だろう。文化施設の理念に共感できる市民にその役割を任せ、全体でパフォーマンスを上げることを視野に入れることが、今後は重要になると考えられる。

また、次世代育成ということに関連して、長野さんは、いわきアリオスで育った人たちが将来コーディネーター的な役割で外部から関わってもらえるようなことも見据えている。

【インタビュー調査の発言から】

□ 地域にコーディネーターが多数いて、そのマネジメントをする劇場スタッフという未来

- 地元でアーティストとして育成し、それだけで生計を成り立たせることに限界を感じていることはどこもあると思う。コーディネーター的要素やコーチングを学んでもらい、後続の人たちのメンターになるなど、アーティストで一本立ちは無理でも、それ以外の要素で生計が成り立つという可能性もあるだろう。（長野）
- コーディネーションも含めて、地域で生きていくアーティストの仕事の選択肢を増やす。そういう提案をして、それを僕らが支援していったほうがいいのではないかなと思う。（長野）
- スタッフの仕事も、1つの現場の制作やアーティストとのやりとりよりも、地域のコーディネーターの数を増やして、地域全体でどのような効果を出しているのかを、きちんとマネジメントできる人材のほうが、アリオスの中には必要かもしれないと思う。（長野）
- 例えばアウトリーチについて、いろいろと意見もあり、市民からの動きが結構出ている。市民の皆さんから意見やアイデアがあるとき、施設としてイエスです、ノーですと言うだけではなくて、皆さんは何をどこまでやってくれますかと返して、協働や市民参画の方法を模索し、その人たちに委ねるなり、権限委譲するなりして、アリオスの理念に共感した市民の人たちと協働でパフォーマンスを上げていかなくてはならない状況にきていると思う。（長野）
- 大きな枠組みで市民を巻き込める動きが生まれるといい、その中心にアリオスがあるようなイメージ。（阿部）

□ 人材育成ではなく、次世代育成という視座～未来の街の担い手としての若い世代への期待と投資

- 演劇制作のための人材や、舞台のための人材の育成は、うちの企画制作課や施設管理課がやっている。そういう人たちを自前で育てていくのはいいことだと思うけれども、もう少し外からここを応援してくれたり、自分たちも次世代の子たちにこうしてあげたいという人が、少しでも増えていくといいと思う。それが結局、文化施設の豊かさにつながっていく。（長野）
- 現場できちんと次を育てたいというところもある。内部のスタッフだけではなくて、高校生や大学生が、10年後に、アリオスや街の担い手としてしっかり機能するような期待を持てる子たちを、どのような形で、育てたいと思う。（長野）
- メインストリームの生き方ではないけれども、生きていく上での補助線になるような考え方や枠組みをアリオスが意識的に用意することで、この芸術文化施設の可能性を広げられないか。（長野）
- 中心市街地だけで見ると、文化的視点より経済的視点が多くて、売上げにしかつながらない。そうではなくて、もっと面白いことをやって人を回遊させて人が巻き込めるような仕組みをつくるのが中心市街地の役割。その思考が変わるといい。（阿部）
- いわきは歴史的に見ても、産業主体の「文化不毛の地」。市町村合併によって多くの小・中学校を抱える教育委員会は多忙で動きが遅く、リーダーシップを期待するのは難しい。それぞれの学校や教員、生徒たちがプランを立案するなどして、文化と教育が両輪となっていくような部分をもっと進めたい。（亀岡）
- アリオスがアーティストとの地域活動をコーディネートして、小さい子どもでも将来の夢を見られるような地域になってほしいと考えている。（前澤）

*6：地域創造による調査研究報告書で提案された言葉。地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みを意味する。
「災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究—文化的コモンズの形成に向けて—」、2012-13 年度

(2) 広報に対する認識を改めること

組織におけるコーディネート業務の推進には、全体を俯瞰できる位置づけが必要だと考えられる。いわきアリオスの事例からは、文化施設の中では広報担当がそのような横串を刺す役割を担うことで効果を発揮しやすいポジションだということが分かる。いわきアリオスでは、広報が街の人との窓口になって、施設と地域や市民とのコーディネーター役を果たしている。

文化施設の広報は事業や施設利用を広く市民に伝える役割だと考えられがちであるが、いわきアリオスの事例を見ると、広報セクションは文化施設が地域における文化的コモンズ（*6）を形成していくために重要な役割を担えるということが見えてくる。

【インタビュー調査の発言から】

□ 市民の声を傾聴し、いわきアリオスの広報資源を活用して発信する

- 自分たちでもきちんと耳を開いて聞くということが、やはり大きな仕事だ。その中で、どのような人と人をどう組み合わせしていくのか。あるいは、この地域に他地域と比べて足りないものは何なのか、それをどう処方するかを考えていく。横串を刺すとしたら、そういう観点でできるかもしれない。（長野）
- アリオスの場合は、アリオスペーパー、キッズ☆アリペ、エンゲキ☆アリペなど、媒体が豊富にあって、Twitterも地方都市の中ではそこそこのフォロワーがいる。そのメディアをどう使えば街に好影響を与えるか、地域社会にどう貢献できるのかを広報の視点から考えることが大事。（長野）

□ 広報は事業の付属物ではなく、広聴的な役割を果たして館全体を引っ張っていくべき

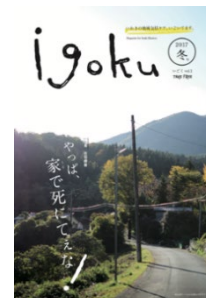
- 劇場の仕事の中の花形は、公演制作・プロデュースという考え方は当然ある。でも私は、「こういうアーティストと信頼関係があって劇場に呼べます」という考え方は、20世紀的だと思う。（長野）
- これから強く言っていかなければいけないのは広報の在り方。広報は劇場の事業の付属物というポジションだと思われている。そうではなくて、広聴という概念を持って回していくセクションが広報で、それそのものが事業なのだということを、公立文化施設は、しっかり認識したほうがいい。（長野）
- 市民との関係性の窓口として、広報なり広聴を置く。事業として、セクションとして位置づけるべきだし、必要な予算を用意することが、これから生き残っていく上では必要ではないか。（長野）
- 自分より上の世代の人たちは、広報はどちらかというと事業のための付属物で、チケットを売るためと思っている方が多い。アリオスだと文化施設全体の評価も広報が担当している。それを踏まえて、今後の事業や施設の在り方、戦略、そういったものの先頭を切っていくのが広報なのではないか。広報的なことだけを担うセクションではない（長野）

(3) より広い関係性の構築へ向けて

90年代以降、芸術監督を置く公共劇場ができ、プロデュース公演やレジデントカンパニーなどさまざまな取り組みが進んできた。一方、2017年に改正された「文化芸術基本法」に基づいて、翌年閣議決定された「文化芸術推進基本計画」の中では、「地域の文化芸術を推進するプラットフォーム」が4つの目標の一つに設定されている。しかし、そのプラットフォームを担う拠点となりうる地域文化施設において、必要とされる人材のイメージは未だ確立途上にあるといえる。長野さんのように、編集者的な視点で文化芸術やその周辺に集まるコミュニティ（文化的コモンズ）を編み、共創型で文化からの地域振興を担う人材が、地域の文化芸術拠点にコ

*7: いわき市包括ケア推進課の取り組み。高齢者の生き方についてユニークな視点で掘り下げるウェブメディア、フリーペーパーを発行するほか、いわきアリオスを会場に「igoku Fes」を行う。
<https://igoku.jp/>

紙のいごく創刊号 (2017 年)
いわき市地域包括ケア推進課



ーディネーターとして存在することは、今後の地域文化施設のあり方を考えるうえで、大きなヒントになる。

長野さんは、いわきアリオスが今後その活動の裾野を広げていくためには、さまざまな機関・団体との協働が不可欠だと考えている。その時に、これまでのように「媒体」をつくることから始めることも有効だろう。あるいは、アウトリーチ事業の「おでかけアリオス」を再編することも一案だと考えられる。しかしそれ以上に重要なのは、どこまで市民に任せられるか、担い手が増えていくかということだと長野さんは指摘する。いわきアリオスは、市民の中でその役割が循環するように次世代への目配りも怠っていない。それも地域においてコーディネーターによる多層的な取り組みを推進する上で重要な点だと考えられる。

グループインタビュー参加者からは、今後地域のプラットフォームとして、いわきアリオスやコーディネーターが活動するために、既存の連絡会や市役所のシステムを活用すべきといった具体的な提案もあった。

長野さんは、その未来に、人がそれぞれの創意工夫や創造性を起点に、思いやりある社会を形成していくということを見据えている。それは、地域文化施設やそこに働くコーディネーターが目標とすべき社会の姿だといえよう。

【インタビュー調査の発言から】

□ 多様な連携と任せる関係の必要性

- 正直、アリオスが単体で提案するのは限界がある。例えば商工会議所や医師会、あるいは経済団体の人たちと会議体をきちんと組織して、社会をより良くするための投資対象としての芸術について説明する。医療や介護の人たちにも、芸術文化と福祉の協働事例を紹介して、病院や介護の現場で役に立てることはありませんかと尋ねるなど、日常的に話ができる場所が絶対的に必要だと思っている。(長野)
- いわき FC (JFL 加盟) サッカーチームは「スポーツによる人・まちづくり推進協議会」を設けている。芸術文化の周りにはそういうものはない。会社の経営者にとって役に立てることはもちろん、医療現場、病院の中の掲示板ひとつとっても、アーティストを連れて行って、こういふことができますよということすらも、まだ提案できていない状態だから、そういうレベルのことからやっていきたい。(長野)
- それをテーマにした媒体をつくってもいい。「社会と芸術」というキーワードでアーティストにも出してもらい、医療機関での取り組みをいろいろな人たちと共有して、うちも、うちもと広がればと思う。そのために当館に寄付などをしてもらって、それで媒体をつくって回していけるとなありがたい。igoku 編集部 (*7) の人たちと、それを下支えするようなものを構築できないかなと妄想している。(長野)
- 重要なのは、市民にどれだけ権限を委譲できるかである。担い手が増えていって、その予備軍が待機できるようにするため、僕らが目配りをして、将来の人材をどのように育成するのが大切。(長野)
- NPO 法人 Wunderground の主要メンバーは次々と起業している。そのベースには「将来のまちの文化」を考える態度が身についてきたと感じる。(阿部)
- 基本的には自分たちが好きなことをやる、イベントのような形になっているが、後に文化になっていくような形で続けられるといい。運営する人が育つような寄り添い方や、支え方をしている。そのような地域におけるコーディネーターの育成、支援に関しては、アリオスを見習った部分がある。アリオスに限界がある部分を NPO として裾野を広げる役割を担っているという自覚がある。(阿部)

□ 子育て団体との連携

- 今、新型コロナの状況下で、キッズルームは遊具も撤去して稼働率がゼロに近い状態になっていた。自分たちでは対処できないから、子育て支援団体などに、常に誰かがいて、衛生管理、消毒などをきちんと行ってプロ

グラムを継続的に提供したいと募集したら、6組の団体が応援してくださった。（長野）

- それぞれの団体が、自分たちのプログラムを持ってきてくれたが、キッズルームのような半公開の場所で行うことによって、それまでとは違う人たちが寄ってくれるようになった。（長野）
- このように、子育て支援に関して言えば、一翼を担えているという感触が出てきた。その人たちとつながったことでより効果的に、子どもたちに対してのアプローチができたり、こちらからも貢献をしたり、逆にアリオスの告知などをお願いするなど、持ちつ持たれつの関係性ができたりした。それで、常にビビッドな情報が入ってくる。（長野）
- その関係性の中で、収入格差などの課題がある地区の子どもたちに対して、アリオスがきちんと出かけて、引きこもっているママたちに何かしてあげないと駄目だよというアドバイスをもらった。すると、どうしたらいいのかを考えるようになる。日常的に付き合いができる関係と、その関係性をアップデートできるシステムをどうつくるかということが、すごく大事だという気がする。（長野）

□ コロナ禍を機に、おでかけアリオス（アウトリーチ）を再編成する

- 今、コロナの影響で、学校アウトリーチも体育館での実施が主体になってしまっている。「おでかけアリオス」のスタイルだった小さな空間で子どもたちの近くで行うという方法が、完全にはできない。（長野）
- さらに立ち上げ当初からの担当がいなくなって、学校以外の地域でのアウトリーチというのがここ数年、全然できていない。（長野）
- アリオスペーパーの編集部員だった方や、アリオスコミュニティの人たちが、従来のアウトリーチだけでは足りないよねと言っている。いわき交響楽団や地元のダンスカンパニーの皆さんなどが、地元の人たちに対して行っている活動も含め全体像をきちんと見て、地域そのものに文化芸術を浸透させるようなことをやらないと、アリオスだけが、しかも学校だけで行うというのはもったいない。（長野）
- 市民の皆さんにどこまで仕事を委ねていくか。そのためのコーディネーターは市民自身がいいのか、あるいは、地元出身アーティストを中心に研修・実践を積み重ねてきたおでかけアリオス研究会で育った人たちがコーディネートし、育成もやれるようになるのがいいのか。そういうことを再編成するべきだと思う。やはりアリオスの問題だけとして考えていたら、先はないと思っている。（長野）
- 「おでかけアリオス」は学校中心になっているが、地域でやってもらうとずっと地域の人が集まれるし、もっと膨らましていけると感じている。各地域で、アリオスの応援団ができるとさらにいい。（下山田）

□ 市関係者からの提案

- 学校やアリオスとのつながりをコーディネートできる人がいるといい。（稲田）
- 地域振興担当員の会議にアリオスが出張っていくといい。（下山田）
- おでかけアリオスの情報を市役所の職員ポータルサイトに載せてもらえると、興味のある職員にリーチできる。（下山田）

□ 創意工夫する心に寄り添う機関として

- 人を思いやる心や、創意工夫する心が広まっていくことによって、人をバワハラ、モラハラのような感じでマウンティングするのではなくて、理解し合いながら、傷つけ合わないよう暮らししていく社会のために、創造する心などが生きていくといいなと思っている。それを、なるべくいろいろな人と価値観を共有しながらやっていけるといいと思う。（長野）

事例 2

越境と更新を繰り返す アーティスト・表現としての コーディネート

調査対象

【コーディネーター】

アサダワタル（文化活動家／社会福祉法人愛成会品川地域連携推進室 コミュニティアートディレクター、アーティスト、文筆家）

事例調査から見てきたポイント

◎ 日常に寄り添い、プロセスを重視し、時間をかける

- 単発のイベントとしてインパクトを出すよりも、プロセスを重視することで、地域の生活に寄り添うことができる。
- トークや熟議の時間をたっぷり取ることで、他者の思想や経験、立場等の差異をこえて共に在ることができる豊かなパブリックの場が立ち上がり、「文化的コモンズ」の形成につながる。
- コロナ禍による議論の場のオンライン化で、無駄話や熟議の機会が減少している。今後は、あえて無駄話をする機会をつくることもアートコーディネーターに求められるのではないかな。

◎ コーディネーターには、分野横断できる「通訳者」としての役割が求められる

- 行政と現場のより良い関係、あるいは他の領域との連携を進めるときの媒介役となるコーディネーターの位置づけが重要だろう。その時に、コーディネーターには双方の考えを「通訳」できることが求められる。
- コーディネーターが「通訳者」として他分野の専門家と協働することで、地域における文化拠点の存在意義を広げていくことにつながる。

◎ 生活と地続きの施設として、地域の話聞くために、相談を事業化する

- 市民の聞き手となり、熟議につなげる受け皿として、相談事業の展開が効果的なのではないかな。
- 文化の相談と言っても、人によっては人生相談につながることもあり、それほどライトではない。
- 福祉におけるコーディネーターは相談支援専門員として活動しているが、文化分野の相談を設計するときにも福祉の事例は大いに参考になる。

◎ 文化施設の業務にコーディネーター的な仕事を位置づける

- コーディネーターを持続的な役割として組織の中に位置づけるためには制度化が必要であり、福祉分野の相談支援専門員が長期間にわたって生活レベルの並走を続ける仕組みや、地域ケア会議での異分野と連携するプラットフォームづくり等が参考になる。

◎ プロセスを重視した取り組みをいかに評価していくかは課題

- 文化施設においては、集客数などのアウトプットで事業を評価することが多いが、社会共生などを意図したプログラムを実施する際、事業のプロセスにおいてどのようなやりとりや交流があったかを俯瞰した上で、相応しい評価ポイントを見極める指標が求められる。

*1：2012年10月～2013年3月にかけて、TOYOTA「子どもアーティストの出会い」の一環で実施された音楽ワークショップ事業。高知県四万十市西土佐小学校の生徒と、保護者や地域の大人の記憶に残る楽曲をリサーチし、それをコピーバンドのコンサートという形で発表した。

*2：東京都足立区千住地域を舞台に、2016年から2020年末まで「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」の中で実施していたプログラム。「タウンレコーダー」と呼ばれる市民チームと、まちの音を素材にオリジナルサウンドメディア『音盤千住』を

制作したり、イベントを開催した。

*3：2016年からアーツカウンシル東京の「Art Support Tohoku-Tokyo」の一環で福島県の復興団地を対象に行われているアートプロジェクト。住民のメモリーソングやリクエストソングをもとにオリジナルのラジオCDを制作し、配布する。

*4：2006年から2009年まで應典院が大阪市の事業を受託し実施していた事業。アサダさんはディレクターを務めていた。詳細は後述。

- 社会的な要請があって行う社会共生や社会包摂事業に対する評価軸は、文化芸術のアウトプットで規定されているものに限らないところまで掘り下げてつくる必要がある。

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

アサダさんは、音楽家としての活動と並行して全国各地でアートプロジェクトやワークショップを展開しており、「表現による謎の世直し」をテーマにしたその活動は多岐にわたる。その実践は(1)表現者としてのアートプロジェクトの演出、(2)障がい・福祉の現場におけるコーディネート、(3)執筆活動による経験の共有の3つに大別できる。

(1) 表現者としてのアートプロジェクトの演出

アサダさんは、アートプロジェクトやワークショップの内容や構成を考えることを「演出」と呼び、アーティストの「表現」としてアートプロジェクトに取り組むことで、コーディネーションの場をつくっている。

例えば、音楽をベースにした実践として、2012年の「コピーバンド・プレゼントバンド」(*1)では高知県の小学生とともに、2016年の「千住タウンレーベル」(*2)や「ラジオ下神白」(*3)では地域住民とともに、参加者の記憶とリンクする音楽を深掘りして発表することを演出し、演奏や作曲だけではない音楽への新しい参加方法を提示している。

【インタビュー調査の発言から】

- 演奏することや、何か作品を生み出すというような感覚から、日常のいろいろな出来事を企画・演出することが自分にとって表現になるのだと思った。その時に、コーディネーターのような立場とアーティストのような立場が混ざってきた。
- ワークショップやプロジェクトにおけるプロセスを大事にすることと、自分が音楽をやってきたこととをつなぐことが、30歳を超えてからやっとできるようになった。

(2) 障がい・福祉の現場におけるコーディネート～ひとりの支援者として

アサダさんは、表現者としてアートプロジェクトに取り組むことと地続きの活動として、福祉分野、特に障がい者福祉の分野でもさまざまな取り組みを行っている。この分野においてはホームヘルパー2級の資格を取得し、福祉現場で働いた経験もあり、アートと福祉双方の視点から、さまざまな福祉現場でのワークショップのコーディネートをを行っている。

【インタビュー調査の発言から】

- アートリソースセンター by Outenin（築港 ARC）(*4)の仕事をしている時にヘルパーの資格を取りにいった、週一回、介護の仕事をしていた。
- そこに着目してくれたのが滋賀県社会福祉事業団（現・社会福祉法人グロー）(*5)で、そこが運営するボードレス・アートミュージアム NO-MA で、「障がい×アート」ということに取り組み始めた。
- 幾つかの団体からワークショップのオファーがあり、横浜の「カプカプ」(*6)という所では、4年ぐらい定期的にワークショップを行っている。また「ハーモニー」(*7)さんにも月に2回通ってみなさんと一緒に作品をつくっている。

- *5：前身となる滋賀県社会福祉事業団の頃から障がい者支援に取り組み、現在では近江八幡市の「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」の運営等で知られる。
- *6：神奈川県横浜市の団地の一角にある地域作業所で、喫茶を併設している。
- *7：東京都世田谷区にある精神障がいを持つ人のための作業所。
- *8：2019年10月に開所。指定管理を請け負う愛成会の誘いでアサダさんは立ち上げから参加している。

- *9：2012年1月に刊行した自身初の単著。2020年3月には大幅な加筆修正を加えた文庫版『増補版 住み開き』を発表している。
- *10：『想起の音楽』2016年に滋賀県立大学に提出した博士論文をベースに書籍化したもの。自身の実践に音楽とコミュニティの接点を見出し、その繋ぎ方と受け取り方をまとめている。2018年に水曜社から刊行。
- *11：ココルーム 正式名称「こえとことばとこころの部屋」。

- 現場に一番関わっているのが「品川区立障害者総合支援施設ぐるっぽ」（*8）。仕事はディレクターなので部下もいて、2019年度、20年度の2年間は非常勤雇用で入っている（21年度は請負契約で継続）。福祉の事業は相談支援や成人の生活支援、児童の支援など幾つかに分かれていて、私は成人支援部門を担当している。雇用元は施設の指定管理者の愛成会という法人。

(3) 執筆活動による経験の共有

アサダさんは、現場で経験したことを執筆活動として整理することで活動全体を前に進めてきた。それは、「表現」の持つ可能性を社会に対して示していくことでもある。

文化施設・機関においても、現場の様子や業務から得られた気づきをなど文章にまとめて経験を施設内外に共有していくことが、スタッフや市民の思考を深めたり、次なる活動のヒントとなったりしていると考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- 自分は書くことによって仕事というか、全体を前に進めてきたところがある。その最初のきっかけは住み開きアートプロジェクト（詳細は後述）をやった時に、たまたま出たトークイベントに来ていた出版社の方から「これは面白いから本にしないか」と言われたこと。（*9）
- 現場では、アートの興味を持ってくれる人たちとの出会いはあるが、その枠を超えて社会というかコミュニティのことについて、表現でこういうことを考えられたらいいなというので書いていった。
- 自分がやってきた音楽とコミュニティについてはきちんと自分なりに深めて書きたいと思って、大学院に行って研究した。（*10）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

(1) 社会と表現をむすぶレッスン期～大阪・ココルーム（*11）時代

アサダさんは大阪市立大学卒業後、バンドマンとして活動しながらアルバイト生活を送っていた。また、「大和川レコード」（*12）という名義でソロ活動もしていて、フィールドレコーディングを中心とした音源を制作したり、ライブパフォーマンスを行ったりしていた。その頃、出入りしていた場所の一つでチラシを見かけたことをきっかけに、ココルームでのライブに出演することになった。ココルームには「どうやって自分の表現を社会化していくか」に悩む多様なバックグラウンドを持つメンバーが集っており、アサダさんはそこでボランティアとして仕事をするようになった。翌年（2004年）にはフルタイムのスタッフとなり、西成地区の人々とパフォーマンスや朗読などの発表の場所づくりに奔走した。

ココルームでは、野宿経験者や障がいのある方など「今までに出会ったことがないいろいろな人たち」と創作活動を行った。社会的なこととの関わりで表現が生まれる実感を持ちながらも、自分の表現としてうまく消化しきれないことに息が詰まるようになり退職したが、アーティストとしてはその後もココルームと関わり続けている。

【インタビュー調査の発言から】

- 音楽をやっていてもライブハウスなどの枠に収まることに違和感があった。自分がやる表現にフィットする場所はどこなのかと求めていく流れで、オーガナイザーや、スペースを運営している店長という方々にまず注目した。その方々が「どういうふうに生きているのか」というところに関心を持ち始めた。

詩人の上田假奈代氏が主宰し、釜ヶ崎の住民が出入りするスペースとなっている。

*12：大和川レコード アサダさんのソロ活動時の名義。大学近くに大和川が流れていて、その近くで弾き語りやフィールドレコーディングをして遊んでいたことにちなむ。

*13：詩人、NPO 法人「こえとことばとこころの部屋」（ココールム）代表。2014 年度芸術選奨芸術振興部門新人賞受賞。アーツカウンシル堺プログラム・ディレクター

*14：208 南森町 編集者・岩淵拓郎ほかとともに運営していたマンションの一室。ゲストを呼び、トークやライブを不定期で開催し、一般公開していたのが「住み開き」の原点となっている。

*15：應典院 大阪府大阪市にある浄土宗の寺院。NPO「應典院寺町倶楽部」を中心とした市民に開かれた活動で知られている。

*16：pia NPO 大阪府大阪市港区築港にあるビルで、NPO が多数入居していた。駅の反対側には海遊館などのレジャー施設がある。

- 最初は自分の中でも、自分たちで何をやっているのかが理解できなかった。おそらくココールム主宰の上田假奈代（*13）さんも理解していなかったのではないかなと思う。何か先に手が動いてしまう感じというか。今思えば、それはもちろんアートプロジェクトといってもよかったかもしれない。
- 表現のパートナーやフィールドが、変わらざるを得なくなっていった。その変化と、自分の一表現者という立場の中でも、その変化が表現に入り込むというか、つくっていくものが変わっていった。その時期が自分でも何をやっているのかが一番分からないのと同時に、他人からもそう思われていると感じていた。「今、何かむちゃくちゃ迷走しているよね」という感じだった。

(2) コーディネーターとしての仕事をネットワークづくりからはじめる～築港 ARC

2006 年 3 月のココールム退職後、映像制作会社の仕事をしたり、友人たちの運営する 208 南森町（*14）のメンバーに参加したりしながら、應典院（*15）の秋田光彦住職から、應典院が受託した大阪市の芸術系 NPO 支援育成事業のディレクターの打診を受ける。仕事は、2009 年度までの約 4 年間の事業で、pia NPO（*16）という建物の一室を使って・アトリソースセンター by Outenin（築港 ARC）という場を構え、中間支援を行うというものだった。

應典院からは、ディレクションのすべてを任せられ、当時 27 歳だったアサダさんは、これまでに形成したネットワークやココールムでの経験を活かして、4 人のスタッフとともに、外部のヒアリングに出かけながら、築港 ARC のフレームを完成させた。具体的には新たに現場を立ち上げようとする人たちの後方支援、ボランティアのコーディネート、ネットワーキングなどの企画で、その核となっていたのが、毎月開催していたトークイベント「ARC トークコンピレーション」である。

このトークイベントでは、小学校の先生、福祉関係者や医療スタッフ、環境系 NPO の職員、アーティストなど、ジャンルを問わずゲストを呼び、アートが各分野の中でどういう役割を果たせるかをテーマにトークを行った。1 人のコアスタッフとアサダさんがそれぞれ異なる分野にバックグラウンドを持つことで実現できたジャンルの幅は、アサダさん個人にとって「自分自身の表現を越えて」事業のコーディネートを実施する初めての現場となったが、それはいわゆる走りながら考える式でもあったという。

【インタビュー調査の発言から】

- 「『分かりました、やります』と言ってしまったが、全然その専門性がないな」と思いながら、本当は自分がネットワークを持っていて、いろいろつなげていくという役割だとは理解したものの、自分自身がネットワークをつくっていったと同時にそれを見せていくというやり方をしないと間に合わなかった。
- 私はどちらかというと音楽や今で言うアートプロジェクトのようなところを受け持ち、他のスタッフは文化政策・演劇・デザインなどそれぞれの相談委員という形で、「このような人を紹介してくれないか」「こういう所でイベントをしたいが、どうやったらいいか」「どういうところで助成金を取ったらいいか」というのを一緒に考えながら相談に乗って、自分たちも力を付けていくような感じでやっていた。
- 多ジャンルの人たちと表現について語り、各分野の中でアートがどういう役割を果たせるかということをテーマにトークした。

(3) コーディネートが表現になる～住み開きアートプロジェクト

築港 ARC の最終年度に行った「住み開きアートプロジェクト」では、家のようなプライベートな空間で集いの場をつくっている人たちを訪ね歩いた。アサダさんは、それぞれの場で熟議や表現をキーワードにプログ

*17:正式名称は八戸ポータルミュージアム。八戸の玄関口として、いう意味があり、八戸の情報を手に入れて、まちなかや観光地に誘う役目を持つ。事業としてアーティスト・イン・レジデンスにも取り組んでいる。



208 南森町での
トークの様子

ラムの仕立てを考えた。それは、「いろいろな人たちをコーディネートしながらその在り方を考える」というコーディネーション自体が、表現や企画・演出になるということをはっきりと自覚したきっかけになったという。

このプログラムの種となっているのは、自分たちの創意工夫でプライベートな空間からパブリックな場をつくっていくことができるという実感を得た「208 南森町」運営の経験である。この時期、アサダさんは、4つの現場—ココルーム・築港 ARC・應典院・208 南森町—に同時に関わっていて、場づくりで相当鍛えられたと振り返っている。

また、公的資金で運営される空間とプライベートの場を行き来することにより、コーディネートの濃淡のつけ方のバランス感覚も養っていった。

【インタビュー調査の発言から】

- ・ コーディネーション自体が自分の表現やクリエーションになるのだということを実践したのが「住み開きアートプロジェクト」。
- ・ 大阪市が税金を使って行う築港 ARC という事業と、当時、公設置民営型だったココルームと、宗教法人の應典院と、プライベートの208南森町の4つをやっていた時に、お金の感覚も公共の担い方も、そこに入出入りする人たちの感覚もおそらく違うのだが、私の中では同時にやっていたのもあって、比較できることがいろいろあった。
- ・ 住み開きアートプロジェクトは、すごくプライベート寄りのこと。しかし、使っているお金は100%税金とアサヒビールさんから。それこそ逆に公的な資金や民間の助成金を使うべきところだと思ってやった。

3. アサダさんのコーディネート業務の特性と成果

アサダさんのコーディネート的な活動を俯瞰すると、次のような点が浮かび上がる、それは、(1) 単発のイベントとしてインパクトを出すよりも、プロセスを重視すること、(2) トークや熟議の時間をたっぷり取ること、(3) 日常的な表現の場をつくり、少しずつ状況を好転させていくこと、(4) 実践の成果や課題を文章として構成しなおして一般に共有していくこと、である。これらに共通しているのは「時間をかける」という態度だといえる。

(1) 単発のイベントとしてインパクトを出すよりも、プロセスを重視する

「住み開き」や福祉施設での取り組み、滞在制作、時間をかけたワークショップを行うことなど、アサダさんの特性の一つとしてプロセスを重視することが挙げられる。

また、障がい者福祉との関わりでは、障がい者施設で文化的な取り組みを行うとき、施設で祭りやイベントをやるというようなレベルから、もっと踏み込み、日常的に個々の表現と関わっていくことで、社会と障がい者の間にあるステレオタイプな関係を越えていこうとする。

【インタビュー調査の発言から】

- ・ (「住み開き」は、) 自分にとっては演奏することや、何か作品を生み出すというような感覚から、日常のいろいろな出来事を企画・演出することが自分にとって表現になるのだと思った。(再掲)
- ・ コミュニティに関わる表現者として、最初に「住み開きアートプロジェクト」を見て「来てくれないか」と言われたのが八戸市の「はっち」(*17) だった。オープン前のプレレジデンスという事業で、2カ月ぐらい滞在

*18：地域創造による調査研究報告書で提案された言葉。地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みを意味する。
「災害における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究—文化的コモンズの形成に向けて—」、2012-13 年度



アサダワタル
『住み開き 増補版』
(ちくま文庫)

した。はっちが開設されるまでの間に、近くの空きテナントを活用した展示スペースをつくって、そこで実験するということだった。

- プロジェクト的なワークショップや、プロジェクトのプロセスを大事にすることと、自分が音楽をやってきたことをつなぐことができるようになっていった。

(2) トークや熟議の時間をたっぷり取る

アサダさんは、パブリックとプライベートを行き来してコーディネートすることで、その時々トピックに多様な角度からアプローチし、その場に居合わせる人々の熟議を生んでいく。必ずしも結論がもたらされるとは限らず、金銭のやりとりが発生するとは限らない時間の中に、他者の思想や経験、立場等の差異をこえて「共に在る」ことを可能とする豊かなパブリックの場が立ち上がっている。これは「文化的コモンズ」(*18) のつくり方を考える上でも、大いに参考にしたい点といえよう。

【インタビュー調査の発言から】

- トークはとにかく長い時間を使うのが大事だと東浩紀さんも言っているが、それには結構賛同する。
- 結局2時間のトークは自己紹介をして、どこでも話しているような話をして終わってしまう。そこからが大事なのになかなかそれができない。「208南森町」はプライベートな場所なので、とにかくゲストも観客もずっとだらだらと話して、みんなが鍋を囲みながら話すことによって生まれる熟議のようなものがすごく面白かった。別に結論が出るわけではない。この感覚というのはやはり、他ではできなかった。

(3) 日常的な表現の場をつくり、少しずつ状況を好転させていくこと

プロセスを重視する姿勢とも重なるが、アサダさんのコーディネートに重要なのは、日常的に表現と接する場を丁寧に設定する点であろう。そこでの振る舞いはアート性を前面に出すのではなく、むしろ「アートの背景をできるだけ消す」ことにあるという。アートというときに「敷居の高さ」がついて回るとするのは文化におけるコーディネートを担う人にとっても共通の悩みであるが、アサダさんの考え方は大いに参考になる。

【インタビュー調査の発言から】

- 福祉施設では利用者さんの個性が出ることや、人となりが見れることと同時に地域ともつながっていくというような、一連の流れをどういうアーティストとなら一緒につくれるかということを、いろいろ考えて進めてきた。
- 自分は設定として結構不思議なことをやっているのだから、それがアートということだと思うのだが、説明自体が難しい。やりながらだんだん分かってもらうが、それは「利用者さんを参加させてあげている」のではなく、「一緒に訳の分からないことをやる」という時間を持つこと。それによって、関心のレベルがひとつ違ってくる。
- 文化・芸術をアウトリーチしているというような感覚をあえてなくしてやっていくことによって、結果的にいろいろなコミュニティ活動や社会活動の選択肢を増やしていく。
- 福祉の現場では、人的リソースが少ない中で現場を回しているのだから、スタッフが気持ちよく対等にやれることが大事だ。過度なアート性を強調するというよりは現場になじんでいく、一緒につくっていくというようなコーディネートが必要で、自分も「私はアートの立場で来ている」という態度を取らないことを意識してきた。

(4) 実践の成果や課題を文章や放送として構成しなおして一般に共有していく

現場で起こることを重視しつつ、その体験が一部の参加者としてしか共有されない状況に対して、執筆・出版やポッドキャストなどの手法を用いて、より広く経験を共有していくというのも、アサダさんのコーディネートの特徴のひとつである。ただ、メディアで事例が大きく取り上げられた際、誤解も含めて広がっていったことがあるが、それでも事例が社会に広く共有されることを優先し、誤解もある程度許容するというのがアサダさんの考え方である。

公的な文化施設・機関では、事業の報告書を作成しても事例だけが羅列されていて、考察が行われないケースが多いこと、その報告書を読むことができる人が行政や関係者などの一部に限られることが課題であろう。公的資金が投入される施設や事業においては、その成果の共有が求められるが、アサダさんのように出版であれインターネット上のアーカイブであれ、取り組みを言語化し、広く共有していく姿勢は参考にすべき点である。

【インタビュー調査の発言から】

- 毎月のトークはすべてアーカイブした。さらに、毎週このトークの内容を分割・編集して流すネットラジオ(ポッドキャスト)を立ち上げた。リアルな現場でのトークは、20名ぐらいいしか入れないので、ネットラジオと組み合わせ、その場で語り合い、そこから生まれるネットワークを基にしていろいろ基盤をつくっていった。
- 「住み開き」についてメディアではアートの活動としてやっているとはことさら書かれないので、「家を開いてコミュニティができる」という見出しでだいたい広まっていく。それに反応する人のほうが、やはり圧倒的に母数は多い。

◎ 成果

文化施設や文化拠点が行う創造的な活動は、集客や話題性など単発的なインパクトで評価されがちだが、アサダさんの活動は、派手な成果は生まれなくても、地域の日常を少しずつ改善するような形で、個人の生活に確実に変化をもたらしている。文化施設という大きな塊に対する評価と合わせて、今後、このような小さな活動に対する眼差しをどのように持っていくのかが問われるべきだろう。

【インタビュー調査の発言から】

- 障がい者に対してどう接していいか分からないことが、「イコール接しないほうがいい」となってしまうことを超えていくために、アートは結構有効だろうと思っている。現場でやっていくことによって向こうに安心してもらって、そういう感じなら一緒にこういうことができるかも、という期待を少しずつ持ってもらう。そこが「お祭りに参加しよう」というだけでは超えられないところだろうと思っている。
- 障がいのある方自体がすごく変わるということは、実はそれほどない。何といたらいいか、生活レベルでは単純に時間をかけていっているの、最初はすごく来るのが苦手で、なかなか落ち着かなかった人が、普通に笑顔が多くなって落ち着いていくということはよくある。
- 単純に、みんなが個性を尊重する時間を24時間持ち続けるような支援ができれば、この間までほかの事業所では暴れまくって居られなかったような人が、うちに来て居られるようになったという話は本当に何例もある。

4. 問題点・課題

(1) 文化施設スタッフの仕事の仕方

既存の劇場・ホールでの仕事分担は、施設貸出・管理、舞台技術、事業企画・制作、票券、広報、総務・経理などが基本だろう。そうした文化施設が実際にコーディネートを行おうとする場合、身近にアサダさんのような立ち位置のコーディネーターがいれば業務委託などが成立するかもしれない。しかし、アサダさんのように市民との日常的な関係を重視する場合、やはり施設スタッフがそうしたコーディネートを行うべきだと考えられる。

ところが、現在そのような役割のスタッフが文化施設に置かれていることは稀で、気がついたスタッフが自らその役割を担っている場合もある。問題は、その行為が仕事として位置づけられていなかったり、その人が特別だからと理解されていたりすることである。アサダさんは、具体例を紹介して、このような仕事について仕組化の必要性を指摘している。

【インタビュー調査の発言から】

- 思い浮かぶのは、以前とある地域の文化振興財団で働いていた友人。職場ではホールのコンテンツをつくるというよりは、ホールの外に出て日常的に地域の人と付き合っていた。ホールの主催としてミュージシャンが街なかの各所で演奏するイベントや地域にある昆虫館と連携して、そこのスズムシをまちなかに点在させて、サウンドインスタレーションのようにスズムシが各地で鳴くのを聴きながら街を歩くという、実に素晴らしい企画などをやっていた。
- 彼自身は界限では有名になったが、しかし、そういうスタッフは最後に辞める。ずっといると物足りなくなる。しかし辞めてしまったときに、結局それが答えになってしまう。要はそういう活動をその文化ホールの仕事にするという認められ方が、ここで途絶えてしまう。「あの人は特別だった」で終わってしまう。やはりホールのような物理的な空間にいる人が、目に見える形で街の人を巻き込みながらプロパーとして居続けるという状態をつくるのが、おそらく地域からは一番分かりやすい。
- おそらく彼は、パーソナルな部分を出して仕事していたのだろう。いい意味ではそこまでやって初めて実現できたことでもあるし、その点とても尊敬しているが、強いて課題を言えば「それは彼でないと引き継げない」と言われてしまうようなことだと思う。彼のような仕事の仕方を、個人の取り組みとして終わらせるのではなく、どこかで仕組みとしてみてはと思うが、一方で、仕組みにしたらしたでマストな業務になり「それをやろう！」と内発的に思えないかもしれない。だから、その塩梅は難しい。また、この問題は自分にとってもまったく他人事ではない。

(2) コロナ禍による、熟議の場の減少と効率化への危惧

「208 南森町」や「住み開きアートプロジェクト」で生まれた対話や熟議の場づくりは、各地の現場でも引き継がれ、市民参加型のプログラムにおいては市民の意見をすくい取る重要な装置となっていた。しかし、コロナ禍によって、大人数で集うことはおろか、対面で会話することすら憚られる状況になった。その代替手段としてのオンライン化は遠方に住んでいる人や、持病などを理由に参加できない人を対象としたサポートとしての効果的な活用も見られる一方で、アサダさんは業務効率化を優先していくことに危惧を示している。そして、今後、一見無駄そうに思われることを話す場を、わざわざつくることもアートコーディネーターの仕事の一つになるのではないかと指摘する。

【インタビュー調査の発言から】

- 無駄にずっと話している議論する時間や話す時間が、おそらく世の中ではこれからはどんどん減っていくと思う。オンラインになるとノイズ（一見無駄な話）が圧倒的に減る。長く話す中でやっと「実は」と悩みを言ってくれる。今後、そこに行く手前で「じゃあ、もう用件は済んだから」と話しが終わってしまうようになっていくと、結構きついなと思う。
- アートプロジェクトでは、「私たちは何で一緒にこんなことをやったのだろうね」というような不思議な体験をする時間があつたからこそ、その後一緒に自分の街について語ることができたり、自分の家族について語ることができたりする。自分の日常生活にこの経験を落とし込んで初めて、一人ひとりが成長していくことがあると思う。
- 無駄なことや、一見無駄そうなことなどをきちんと話すような考える場をしつらえていくこと自体が、一つのアートコーディネーター的な仕事になってくるのかなと思う。

(3) 分野横断できる「通訳者」の必要性

アサダさんはこれまで多くの仕事で行政担当者とともに事業運営に取り組んできた。しかし、その中で行政が求めているものが「もっとわかりやすいアートイベント」であることを課題に感じてきたと言う。「わかりにくい」ことをそのまま受け入れるには、経験と見識の裏打ちが必要だが、分業に基づく行政システムの中では、個々のパフォーマンスと理解力に個人差が大きいことも課題の一つだと指摘する。

アートでも福祉でもあるような活動について、それが文化振興で行った事業の場合、結果的に福祉につながった、福祉的な意味もあつたと行政職員が理解できるようになれば良い、というのがアサダさんの考えである。安易な「わかりやすさ」に落とし込まないことで解決に近づけるようなアプローチも必要だろう。

【インタビュー調査の発言から】

- アートプロジェクトとしてやっていても、「アサダさんたちがやっていることって、福祉じゃないですかね」という話になる。私の中では「いや、福祉ではなくて、これはアートなのです」ということを戦略的に言うこともできるが、「まあ、福祉でもありますよね」というのが正直なところ。きちんと考えてコーディネーションをしたときには、福祉とアートが溶けるはず。
- 本当にコーディネーションできていたら、どちらのものということとはできないのではないかな。まだ取り出せるのなら、むしろ混ざっていないということだろうと思うところがある。
- 分野・ジャンル・カテゴリーで分けるという思考から抜け出せない限り最終的には難しい。
- 例えば、役所の人たちが、きちんと文化振興課としての立場でいつつ、これは文化振興をやった結果として福祉やまちづくりのようなことにつながつたと、活動自体にいろいろな意味があることまで含めて理解するようなことになっていけばよい。

5. コーディネーター推進の方向性

アサダさんの事例調査から、地域の劇場やホールなどが、時間をかけて地域の課題に向き合っていく姿勢を持つことが、今後の地域における文化拠点にとって極めて重要な役割であることがわかってきた。そのために必要と考えられるのは、(1) 相談を事業化すること、(2) 文化施設にコーディネーターの仕事を位置づけ連携を模索すること、(3) 結果だけでなくプロセスを評価することの3点である。

*19：大阪市の中心となって設立された芸術創造活動支援事業実行委員会が開設。芸術系 NPO の立ち上げを考えている方や市民に対する相談や情報提供のほか、NPO 運営やイベント運営のノウハウなど、広く情報を提供。2012 年 3 月に終了

(1) 相談を事業化する—生活と地続きの施設として、まず地域の話しを聞く

アサダさんは、自身の経験から相談の大切さについて、相談者にとっては人生の悩みのような奥深い部分につながっている、と指摘する。文化拠点が地域のコーディネーター的な役割を担うために、まずは、自ら市民の聞き手となる相談事業をスタートさせることを提案している。

【インタビュー調査の発言から】

- 築港 ARC の現場でも、相談窓口を設けて相談事業に力を入れていた。築港 ARC が終わった後、それなりに評価され、継続事業としてアートインフォメーション&サポートセンター中之島4117 (*19) というスペースができた。
- 相談というのは結構楽しい。私はコーディネーター的に築港や中之島でやっていたときに、相談の日に「憂鬱だな」と思ったことはなかった。結構自分も楽しんでやっていた。「そんな悩みがあるのか」「そんな実存があるのか」と、「なるほど」と思ってやっていた。
- 福祉の現場におけるコーディネーター・相談支援専門員の役割はすごく大きい。彼らは基本ずっと伴走している。「ケース」というが、その人のケースをずっと受け持っていてくれるから、例えば、3年間この事業所にいたが、次はこちらで就労するとなったときに、ずっと追い掛けてくれる。
- そこでも相談員として定期的にいろいろなタイプの相談に乗っていた。「こういう所で働きたい」「作品を発表したいけれども、ギャラリーは？」というようなレベルの相談でも、突っ込んで話を聞いていくと、ほぼ人生相談になる。相談に来た案件よりもそちらのほうが大事ではないかというような話や、「実はお母さんが病気で」というような話になることもある。自分が何に悩んでいるのかが分からない状態で話を始めて結果的に「入り口はそこではなかった」という風に一緒に考えていくことが一定数ある。文化の部門の相談と言っても、それほどライトではなく、人によっては人生に関わる相談になる。
- 文化施設に相談できる人がいるというのは、とても豊かな話だと思う。

(2) 文化施設にコーディネーターの仕事を位置づけ連携を模索する

アーティストとコーディネーターの仕事を往復することがアサダさんの仕事の特性の一つで、特に行政と事業を行う場合はプログラムオフィサー的なコーディネーターとして、地域や市民との橋渡し、協働をしてきた。

文化施設が、具体的に地域課題にアプローチしていくためには、このようなコーディネーターを配置し、他のジャンルのコーディネーター職と連携することも求められる。福祉の場合は、細分化している地域福祉に横串を刺す「地域ケア会議」があるが、文化施設側にコーディネーター職が置かれている場合、このような会議の場にも接点を持ち、文化や芸術が福祉に対して果たせる役割を探していく姿勢が必要だと考えられる。そうした取り組みを福祉に限ることなく、相互連携により文化行政の効果が生まれそうな他分野の現状やシステムをよく研究し、そこに文化芸術が果たせそうな役割を見だし、協働を打診してみることから始めるのもひとつの方法ではないだろうか。

【インタビュー調査の発言から】

- プログラムオフィサー的なアートコーディネーターが、住民だとか、いろいろな立場の人たちの意見を足し算的に自分の中に眠らせながら、「だからこういう意見も出るよね」ということをきちんと通訳できる立場の人とすると、アートの専門性や知識だけではなくて、コミュニケーションの話になってくる。
- 東京芸術劇場の社会共生課という所が、幾つかの社会共生プロジェクトをすでに動かしていて、私は3人のア

「品川区立障害者総合支援
施設ぐるっぽ」の様子



ドバイザー的な委員の一人として協力している。具体的には障がい福祉の現場でダンスのワークショップを行うチームや、視覚障がいや聴覚障がいの方の鑑賞教育のプログラムがある。スタッフは、もともと舞台やコンサートの企画やマネジメントをしている人たちが、そういった部門を兼務している。

- 今、学生の人たちは当然コロナの経験や、社会的な混沌とした状態の課題をたくさん感じていると思う。劇場に勤めることや、これからアートの現場で働く人たちが、アートの仕事を「演劇が好きだから」ということ、それもすごく大事だと思うが、と同時に、世の中で、自分が、仮に劇場に入ったらどういう役割を担えるだろうかという、もう少し大きなところで考えられるといい。

(3) 結果だけでなくプロセスを評価する

また、劇場・ホール等が地域の課題と向き合うプログラムを実施する際に、アウトプットとなる公演の内容や成果で評価するのではなく、あくまでそのプロセスにおいて、どのようなやりとりや交流があったかを検証し正しい評価ポイントを見極める必要があると、アサダさんは指摘する。

【インタビュー調査の発言から】

- ある種社会的な要請もあって行う社会共生や社会包摂事業に対する評価軸は、芸術のアウトプットで規定されているものに限らないところまで掘り下げてつくりたいと無理だと思う。
- なぜなら、結果的に公演になっていることは、公演の評判や集客数などで評価されるということになる。そのほうがむしろ危ない。
- その事業の過程で、参加者から進学の相談を受けるようなことがあった場合、一見「それはアートの専門性に関係ありますか」と言われそうな話だが、そのプロセスで担当者が信頼されること自体が、むしろ社会共生といえる。
- 文化からアプローチして、一人ひとりの市民の相談に乗れるような信頼関係が構築されていくということがきちんとつながっているところまで掘り下げて評価ポイントをつくる必要がある。そうでないと、事業の担当者が報われないし、社会共生事業自体もよくなり、形だけで終わってしまう。
- アートコーディネーションは、よりソーシャルワークに近くなっていく。そこまで含めて、評価軸をつくる評価委員の方も考えていく必要がある。それとセットで現場も変わっていくというようなことが必要だと思う。

事例 3

地域や政策の境界を超える NPO ならではの多様な取り組み

調査対象

【コーディネーター】

小川智紀（NPO 法人 S T スポット横浜 理事長）、田中真実（NPO 法人 S T スポット横浜 事務局長／横浜市芸術文化教育プラットフォーム 事務局長）

【関係者】

鬼木和浩（横浜市文化観光局文化芸術創造都市推進部 文化振興課長（主任調査員））、中澤務（横浜市教育委員会事務局学校教育企画部小中学校企画課 主任指導主事）、端山聡子（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団横浜美術館教育普及グループ 教育プロジェクトチームリーダー）

事例調査から見てきたポイント

◎ ネットワーク化する行政のガバナンスとコーディネーター

- 行政は、従来のヒエラルキー型ではなくネットワーク型のガバナンスでなければ、地域の課題に対応するのは難しい状況で、そのためにコーディネーターの役割は重要性を増している。
- 横浜市では、区民文化センターの指定管理者の業務にコーディネーターの役割が明記されている。

◎ NPO 法人ならではの機動力、柔軟性と分野を超えた展開

- ST スポット横浜は、教育、地域、障がい者福祉の3分野でコーディネート業務を展開しているが、アート NPO ならではの機動力と柔軟性に基づき、3分野を融合、発展させて活動をヨコに展開することで多様な成果を生み出している。
- 最近では、団体の原点である小劇場「ST スポット」における事業にもつながり、創造空間を有する NPO 独自の広がりが生まれている。

◎ 分野や立場を超えた集まりや話し合いの重要性

- 地域や市民と文化芸術をつなぐコーディネーターを推進するうえで、問題点や課題としてあげられたのは、①分野や立場を超えた集まりや話し合いの場が少なくなっていること、②労働環境が脆弱で将来に不安があること、③活動の継続性が見通せないこと、であった。

◎ 事業単位のコーディネーターから政策レベルでの価値の明確化を

- 文化芸術のコーディネーターの業務は、多くの場合、個別の事業として実施されているが、今後は政策レベルでコーディネーターの必要性や文化政策における価値を明確にしていく必要がある。

◎ コーディネーターの専門性と理想像に関する共通認識を

- 文化芸術と地域や市民をつなぐコーディネーターの重要性については、かねてから指摘されてきたが、コーディネーターとは何か、専門性を含めて必ずしも明確になっていない。
- コーディネーターは、経験に裏打ちされた知識やノウハウ、柔軟な発想や機動力、現場対応の迅速性、適格性が求められるなど、アートマネジメント分野において極めて高度かつ専門性の高い業務であり、その

*1：横浜市芸術文化教育プラットフォーム：「横浜の子どもたちの創造性をはぐくみ、豊かな情操を養う機会を拡大するために、横浜などで活動続けるアート NPO や芸術団体と、地域の文化施設を中心に、学校、アーティスト（芸術家）、企業、地域住民、行政などがゆるやかに連携・協働する場」
<https://y-platform.org>

専門性や必要性に関して、共通認識を形成し、普及させていくことが必要である。

◎ 地域の課題を捉え直し「文化の権利」として考える

- 社会的な課題は複雑化する中で、従来の行政の政策分野をベースに捉えるのではなく、その間からこぼれ落ちるもの、課題同士の関係性や背景も含め、総合的に把握する必要がある。その際、文化芸術の立場からは「文化の権利」として捉え直すことが、コーディネーター業務にとって有効な手がかりとなる。

◎ 非営利のアートで「地域の体質改善」を

- 文化芸術が教育や福祉、まちづくりなど、さまざまな分野において幅広い効果を有することは、広く認識されるようになってきた。しかし、アートによって具体的な問題が解決すると短絡的に受け止められている側面も否めない。
- 劇場や美術館で鑑賞し、楽しむ文化芸術だけではなく、社会的な価値を幅広くとらえる非営利のアートによって、人々に気づきを与え、考え方の変容を促すことで、「地域の体質改善」につなげていくことが、文化芸術と市民や地域をつなぐコーディネーターの役割である。

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

NPO 法人 ST スポット横浜（以下「ST スポット横浜」、インタビュー発言では「ST」）は、小劇場「ST スポット（1987 年開館）」の運営団体として設立され、2004 年に NPO 法人化された組織で、現在「創造環境事業部（主に小劇場運営）」と「地域連携事業部」の二つの部門で事業を行っている。地域連携事業部は教育、地域、福祉の 3 つの分野でコーディネーターの役割を果たしており、小川さんと田中さんはその中核を担っている。

ST スポット横浜が神奈川県基金から活動資金を得てアート教育の事業をスタートさせたのは 2004 年。その後、2008 年に横浜市の芸術文化教育プラットフォームの事務局、2014 年にヨコハマアートサイト（横浜市地域文化サポート事業）の事務局、そして 2020 年から神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターの運営を行うようになるなど、教育分野で始めたアートと市民や地域とをつなぐコーディネーターの仕事を、地域課題や障がい者福祉の分野に拡充、発展させてきた。

(1) 教育事業（横浜市芸術文化教育プラットフォーム）(*1)

横浜市芸術文化教育プラットフォーム（2008 年設立、以下「教育プラットフォーム」）は、学校教育とアートをつなぐ「学校プログラム」を通じて教育とアートの新しい可能性を探っている(*1)。

学校プログラムは、音楽、演劇、ダンス、美術、伝統芸能の 5 つのジャンルで、ワークショップ形式で子どもたちの潜在的な創造性を引き出す 3 日程度の「体験型プログラム」と 1 日で終了する「鑑賞型プログラム」の 2 つの形で実施されている。2004 年のスタート以来、17 年間で、延べ 1520 校あまり、17 万人を超える児童・生徒たちが参加した。

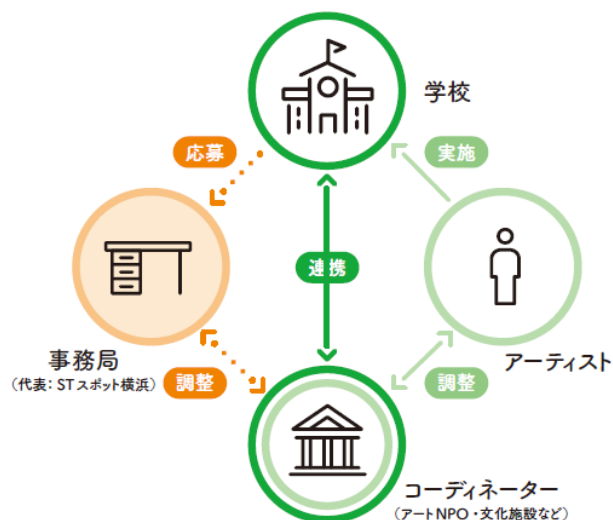
具体的な仕組みは図のとおりで、事務局の ST スポット横浜が学校から応募を受け付け、コーディネーターと調整、コーディネーターがアーティストを選んで学校に派遣し、学校プログラムを実施する。



特別支援学級での
ダンスワークショップのようす
アーティスト：山猫団、2020 年

*2:「かながわボランティア活動推進基金 21」の協働事業負担金を受けて 2004 年度から 08 年度まで実施した「アートを活用した新しい教育活動の構築事業」。神奈川県、県教委との協働事業として県内の幼稚園、小・中学校及び高等学校、特別支援学校等にアーティストを講師として派遣し、演劇やダンス、現代美術等の授業を行った。

◆ 学校プログラムの仕組み



出典：横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局「学校プログラムのご案内 アーティストが学校へ」（2021 年 1 月）

教育プラットフォームの運営に関して、ST スポット横浜、(公財) 横浜市芸術文化振興財団（以下「財団」）、横浜市（教育委員会事務局、文化観光局）の三者が協定を締結しており、ST スポット横浜は、事業計画書や収支予算の作成、事業の実施及び経理業務、広報など事業・運営の全般にわたって中心的な役割を果たしている。

◎ アート教育の継続と広がりを生み出した教育プラットフォーム

ST スポット横浜では、2004 年から神奈川県と共同で、現在と同様のアーティストを学校に派遣する事業を実施していたが（*2）、5 年間の時限事業で、活動の継続や広がり課題があった。その頃、横浜市から教育プラットフォーム事務局参画の打診があり、現在の仕組みづくりにつながった。

今では横浜市内の文化施設や芸術団体を中心に 38 団体がコーディネーターとして活動し、ST スポット横浜はその束ね係となっている。当初、市は区民文化センターなど市の文化施設がコーディネーターになることに懐疑的だったが、ST スポット横浜が積極的に働きかけたことで、市の文化施設の 9 割近くがコーディネーターになるなど、オール横浜体制が構築された。

現在、区民文化センターでは、指定管理者の業務の基準に教育プラットフォームの事業が含まれており、実施校数の目標も盛り込まれている。

【インタビュー調査の発言から】

- 教育プラットフォームの考え方については、県の事業を実施しながら市と意見交換をしていた。（小川）
- ST が全校のコーディネートを引き受けていた県の事業では、中身の濃い、意味のある活動はできても、広がらないのが課題だった。悩みも共有しながら、成果を広げるため、市内の文化施設や芸術団体と一緒にコーディネートできる仕組みづくりを目指した。（田中）
- 以前、財団が単独で事務局として市内50～60校で実施していた際には、ST も一部の事業を委託されていたが、「委託先」という言葉には違和感があった。ST が事務局に参画して、コーディネーターという言葉に切り替え、

先生のためのワークショップのようす
2021 年



コーディネーターの依頼先を開拓していった。(小川)

- ルールがない中、突撃で市の文化施設を訪問して一件ずつお願いしていった。ある区民文化センターは3年連続で断られたが、今はそこも含め10箇所の区民文化センターすべてがコーディネーターとなっている。(小川)
- 教育プラットフォームが横浜市の管轄であることは知っているが、美術館の現場の人間としては ST と一緒にやっている、という意識が強い。(端山)

◎ プラットフォームにおける教育委員会、文化施設の役割

横浜市の教育委員会がプラットフォームの構成員となっていることは、事業推進に大きな力を発揮している。アーティストが出向く学校プログラムは、教師にとっても貴重な学びの機会となっており、文化施設にも、コーディネーターとして自らの役割の再考を促している。

【インタビュー調査の発言から】

- プラットフォームには教育課程全般を見ている教育委員会を入れるべき、と市に強く申し上げた。現在は美術・図工の指導主事が事務局メンバーとして参加しており、必要に応じて国語や体育の指導主事とつなぐなど、とりまとめ役、窓口として理想的な形。(小川)
- 教育委員会がプラットフォームに入っていることで、学校からはお墨付きが得られる。トラブルが発生しても、教育委員会が対応してくれるので、安心して事業に取り組める。(小川)
- 身近な文化施設から学校にアーティストが来る仕組みは本当に素晴らしい。そこに教育委員会が入っているのは画期的な仕組みだと思う。学校や児童生徒が全部受動的になる仕組みでないところもいい。学校の資源には限界があり、アーティストや資金を提供してくれる仕組みはありがたい。(中澤)
- 教育プラットフォームがあることは、子どもの育成だけではなく、先生の育成にもつながる。先生方が社会とつながるきっかけとしても大きい。(中澤)
- この仕組みを使って自分たちがアーティストと一緒に活動すると、学校はどういう場所なのか、翻って私たち美術館や生涯学習施設とはどういう場所なのかを考えさせてくれる。学校でこういう美術をやっているなら、美術館はどういうことをやればいいのか、比較して考えさせてくれる。(端山)

◎ 現場のコーディネーターに委ねるアーティスト選び

教育プラットフォーム事務局が発行した「令和2年度事業報告書」には、授業を担当した86名・組のアーティストのプロフィールが掲載されている。アーティストは教育プラットフォームの事務局が選んだり、推薦したりするのではなく、現場のコーディネーターに委ねられている。

【インタビュー調査の発言から】

- アーティストは、学校とのやり取りに基づいて、現場のコーディネーターが決めている。関わりの少ない人を連れて行くと責任が持てなくなり、自由度が下がってしまう。コーディネーターの感性や審美眼に現実性があるので、彼ら／彼女らの選ぶアーティストなら大丈夫だと判断している。(田中)
- アーティストは、経験があればいいのか、誰が適しているのか、本当の意味ではやってみないと分からないところがあり、コーディネーターに裁量権を持たせている。(田中)
- アーティストは東京からという部分があるが、今では3つの事業ともプログラムをつくる人たちは「地産地消」に近いところまで来た。アーティストも横浜在住が中心になるともっとうまく回る。(小川)



*3: ヨコハマアートサイト

<https://y-artsite.org/>

ヨコハマアートサイトの参加団体の活動のようす
団体名: 居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会、2020 年

(2) 地域事業（ヨコハマアートサイト）(*3)

ヨコハマアートサイト（横浜市地域文化サポート事業、以下「アートサイト」）は、地域課題の解決にアプローチするため、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動などを広く公募し、支援する事業で 2008 年にスタートした。

具体的には図の 3 つのテーマで募集を行い、1 件につき 10 万円～200 万円を助成、広報協力等のサポートも行っている。2020 年度は 28 件が採択され、採択額の合計は 1,650 万円。応募件数は徐々に増え、2021 年度は新型コロナの影響がある中で過去最高の 61 件が応募、29 件が採択された。

◆ ヨコハマアートサイトで募集する 3 つのテーマ



アートフェスティバル

アートを通じて
地域資源の魅力を引き出し、
開催地域内外のにぎわいを
創出するもの



コミュニティアート

アートを通じて
福祉・環境・街づくり・国際交流等
における地域課題に
アプローチするもの



アートプロジェクト

横浜の歴史や自然、景観などに
着目し、アートを通じて
横浜の魅力を
市内外へ発信するもの

出典: ヨコハマアートサイト事務局「ヨコハマアートサイト 2020 実施レポート」(2021.3.31)

ST スポット横浜は、2014 年度から横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団とともに事務局を務めており、教育プラットフォーム同様 3 者で協定書を締結している。アートサイトでも、事業計画書や収支予算書の作成、事前・事後ヒアリング、選考委員会事務局、採択団体への助成金交付、団体からの相談対応、実施事業への訪問・調査など、主要な事務局業務は ST スポット横浜が担っている。

アートサイトには教育プラットフォームや福祉事業で関係のできた団体からの申請もあり、年々応募内容が多様化し、可能性が広がっている。

【インタビュー調査の発言から】

- アートサイトの事務局を ST に依頼した理由は、全市をエリアにした事業で地域の実情をよく知っていること、幅広い芸術分野を扱っていること、地域の活動を応援するノウハウを持っていること。（鬼木）
- 助成事業であるが、採択という言葉を使うと上下関係が生まれるので、一緒につくっていくという関係をつくるため、参加団体、参加事業という言い方をしている。（田中）
- コミュニティアート的な活動が支援対象だが、地域で課題を持っている方、外国にルーツのある子どもたちとの取り組み、性暴力サバイバーの写真展など、参加事業は多種多様になってきている。（田中）
- 参加団体は、助成金を出している側に言いづらい部分もあるが、中に入っていって課題整理を応援するように

*4：障害者芸術文化活動支援センターは、厚生労働省が2017年度から実施している「障害者芸術文化活動普及支援事業」の一環として、全国の都道府県に設置を進めているもの。この事業では、ほかに広域ブロックの「障害者芸術文化活動広域支援センター」、全国「連携事務局」といった支援拠点が設置されている。

福祉施設での美術ワークショップのようす
アーティスト：ドゥイ、WHITELIGHT
2020年 ©金子愛帆



務めている。事業以外の話を聞いたり、他の助成金申請書の推薦書を書いたり、よろず相談に応じるような感じ。（小川）

- アートサイトの仕事では、教育プラットフォームや障がい者支援センターで出てきた関係性やネットワークが、完全に融合している状態。地域で取り組んでいる、というのはそういうことだと思う。（小川）
- 応募内容も年々興味深いものが増えている。地域とアートが関わることでどんな可能性があるか、新しいものを実験しながらどんどん広がって、ある種の「最前線」のようになっている。（小川）

(3) 福祉事業（神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター）(*4)

ST スポット横浜では、2015年から文化庁の委託や神奈川県との協働事業を通して、障がい者の文化芸術活動に関する活動を行っている。2017年から3年間は、2004年にアート教育に取り組んだときと同様、神奈川県基金から協働事業負担金を獲得して、福祉施設を訪問する市民活動に取り組むようになった。

2020年度からは、神奈川県から委託を受けて「神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター」（以下、「支援センター」）の運営団体として、障がい者が身近な地域で芸術文化に触れることができるように、さまざまなサポートを行っている。この支援センターは、厚生労働省が2017年から全国の都道府県に設置を進めているもので、神奈川県の場合は、ST スポット横浜が先行して進めた活動の積み重ねの上に、県がセンターを設置した形となっている。

センターの具体的な活動内容は図のとおりで、①つなぐ：障がいがある方や家族からの芸術文化に関する相談の受け付け、②つくる：福祉施設の中で芸術家がどんな活動ができるかのモデルづくり、③支える：障がい者の芸術文化活動を支える人材育成、という3つの活動を展開している。

◆ 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターの活動



出典：神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターパンフレット（令和3年版）

*5：如月小春（劇作家・演出家）：1982年に劇団「NOISE」を設立、1980年代の小劇場ブームを牽引したひとり。戯曲の他にエッセイや評論も多数執筆。1988年から兵庫県立こどもの館で中学生の野外移動劇づくりを指導、以降、子どもたちを対象とした演劇ワークショップを積極的に展開。2000年12月にクモ膜下出血のため死去。

【インタビュー調査の発言から】

- 2015年から2年間は、文化庁の「戦略的芸術文化創造推進事業」を使ってモデル事業的に調査研究に取り組んだ。その後の2017年からの3年間は、アート教育を立ち上げた時と同じ「かながわボランティア活動推進基金21」を獲得して、今度は学校ではなくて福祉施設に出向く市民活動を始めた。（田中）
- 教育プラットフォームの中でも、特別支援学級など障がいのある子どもたちとアーティストとの活動が非常に興味深く、求められているという実感があった。地域の助成金（アートサイト）でも参加団体の3分の1ぐらいは障がい者が対象となる取り組みで、福祉系の団体からの申込も多かった。（田中）
- 支援センターの運営団体について、県は公開でプロポーザルを行ったが、STが委託先となった背景には、過去3年間の活動実績への評価もあったと思う。（田中）
- 他の都道府県の支援センターは、ほとんどが社会福祉法人で、芸術系の団体が受けていることは非常にめずらしい。障がいのある方が目の前にいる福祉団体と私たちでは課題の捉え方が違うところもある。（田中）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

多彩な分野でコーディネーターとして活躍している小川さん、田中さんが現在の仕事を行うようになった経緯はそれぞれ次のとおりである。

小川さんは、演出家の如月小春さん（*5）の紹介で、世田谷パブリックシアターのアルバイトを始め、その中で子ども向けのワークショップに関わるようになる。2000年12月に如月さんが急逝し、仕事を継続するために、仲間と「演劇百貨店」というNPOを設立。1年前に如月さんが始めていた子どもたちを対象にした事業を担当することになった。

その頃、ST スポット横浜から、神奈川県ボランティア基金を活用したアート教育事業の立ち上げ、運営に関する依頼があった。それを受けてからST スポット横浜で仕事をするようになり、今の幅広いコーディネーター業務につながっている。2014年にNPO法人の理事長に就任したが、地域連携事業部のディレクターとして、日々、現場での仕事にも携わっている。

田中さんは、大学で地理学を学んでいる時に、世田谷パブリックシアターの「三茶 de 大道芸」（地元商店街と共同で1997年に始まった野外パフォーマンスなどのフェスティバル）という事業のボランティアとしてNPO法人「演劇百貨店」と出会った。そのボランティアで子どもたちの事業のサポートをするうちに、地域との関わりが面白いと思うようになった。

その流れで、世田谷パブリックシアターの中高生のためのワークショップを手伝うようになり、大学院を卒業するタイミングで、小川さんからST スポット横浜の仕事に誘われてNPO法人に入職、今まで活動を継続、発展させている。

【インタビュー調査の発言から】

- 如月さんが亡くなったからその活動がなくなる、というのは一番悔しかったので、継続させたいと思った。2年目が始まる時に劇場の責任者から突然「あなたたちに如月さんの事業をやってもらうことにした」と言われ、「困った、どうしよう」と言いながらやり始めて、今につながっている。（小川）
- 演劇百貨店でファシリテーターの仕事は食えたけど、制作、企画は一切食えなかった。そのタイミングでSTの理事から、アート教育事業の立ち上げ、運営のオファーがあった。ただし、5年間の時限事業で、神奈川県から助成金が取れたら席はあるけど、取れなかったら仕事はない、という条件だった。（小川）

*6: 芸術家と子どもたち: 1999 年に発足、翌 2000 年から現代アーティストを学校に派遣してワークショップ等を行う Artist's Studio In A School (ASIAS) をスタート、2001 年に NPO 法人。小中学校の教育現場や児童養護施設などでダンスや演劇、音楽などのワークショップを積極的に展開しており、同様の活動では日本のパイオニア的な存在。

*7: 『自治体文化行政 レッスン 55』(監修・編著: 小林真理、編著: 鬼木和浩、著: 土屋正臣・中村美帆美学出版、2022、p.199-201) に詳しい。本書には、他にも自治体の文化行政職員にとって参考となる内容がわかりやすくまとめられている。



- 「芸術家と子どもたち」(*6) を参考に当時の小劇場 ST スポットの館長と議論して申請書を提出した。申請が採択された後、館長は別の新しい文化施設に移り、結局自分がすべて行うことになった。(小川)
- 2008年に大学院を卒業して、社会人になってからずっと ST で仕事をしている。大学院で都市計画を勉強している時に「地域の中で人々がもっと気楽に楽しく過ごせないだろうか」と思っていたが、今考えるともう少し広い人の幸せを考えるとという意味で今の福祉事業につながっている。(田中)
- 大学院が終わってどうするの? という話になって、演劇百貨店の小川さんから横浜の仕事で人手が足りないからと誘われるまま参加して、今もここにいるという感じ。ただし、ST で仕事をする事について、小川さんから、アート NPO の厳しい状況や、その仕事で収入を得ていくことの難しさなどについて、1日ばかりで説明、説得されたうえでの決断だった。(田中)

3. 横浜市の文化行政におけるコーディネーター

(1) ヒエラルキー型からネットワーク型に変わる行政のガバナンス(*7)

教育プラットフォーム、アートサイトは横浜市の文化行政の一環として実施されているが、その前提として、横浜市の鬼木さんから行政のガバナンスの仕組みが、従来のヒエラルキー型からネットワーク型、つまりお互いが横につながるイメージで地域の課題に取り組んでいくガバナンスに変わりつつあり、コーディネーターの役割がより一層重要になっている、という指摘があった。

【インタビュー調査の発言から】

□ ヒエラルキー型からネットワーク型へ

- ヒエラルキー型の場合、行政が政策の目的から中身まですべてを考え、市民や団体はそれに基づいて対応することになるが、今はその形では地域の課題を把握し、最適な解決手段にたどり着けない。(鬼木)
- ネットワーク型ガバナンスのポイントは次の3つ。
 - ①地域のことは地域にお任せする: 市が中央で市全域のことを一括で決めて一律の対応策を求めるのではなく、対応策は地域ごとに変わる
 - ②現場のことは現場にお任せする: 市役所のデスクで分かることは限られており、現場をよく分かっている方がその場その場で判断することが重要
 - ③専門のことは専門家にお任せする: 文化芸術について行政は基本的に素人で、文化芸術の特性や価値観の分かる専門家に極力お任せしていく(鬼木)
- 文化行政における自治体職員の仕事は、誰に何の権限を委ねるかという分配のデザインを考えていくこと。どういう人がこの業務に一番適しているか、それを地域の人材の中で考えて、委ねていくのが行政の役割の一つ。(鬼木)

□ 事業と事業の谷間に落ちる問題への対応

- 行政の方は、担当の事業以外に興味がないが、問題になっているのは事業と事業の谷間に落ちて誰も手を付けない部分。それを共有して、あの人に相談すると何か見えてくるかもしれない、とつないでいくのがコーディネーターの役割。(小川)

□ 階層的なコーディネーターの仕組み

- 文化行政には、プロジェクトを組み立てる、事務局を回していく、制度の仕組みを考える、などいろいろなレ



横浜市芸術文化教育プラットフォームの
コーディネーター会議のようす、2021 年

ベルのコーディネーターが必要。そうしたいろいろな階層のコーディネーターがネットワーク型ガバナンスの骨組みになる。（鬼木）

□ ST スポット横浜の功績（コーディネーターの定着と文化政策の拡張）

- ST は教育プラットフォームという仕組みが有効だという認識を、役所の中に植え付けてくださった。大げさに言えば、文化政策の歴史の中でコーディネーターの重要性を定着させた功績がある。コーディネーターが関わること、文化政策の可能性が広がるということを示していただいた。（鬼木）
- 教育プラットフォームとアートサイトの二つの事業は、横浜市の文化政策で重要な位置づけがされており、市議会でも議員からもっと積極的にできないかとしばしば前向きに取り上げられる。この両事業のこれまでの成果は、ST の小川さん、田中さんのお二人の力に負うところが大きい。（鬼木）

(2) 文化施設・指定管理者制度におけるコーディネーターの役割

横浜市の文化施設のうち、地域に根ざした事業運営を行う区民文化センターなどの指定管理者制度では、業務の基準の6つの使命のひとつに「コーディネーターとして文化的コモンズの形成に寄与する」ことが明記され、教育プラットフォームにコーディネーターとして参画することなどが記されている。

◆ 横浜市瀬谷区民文化センター指定管理者業務の基準

使命 4 文化芸術活動を媒介として地域の力を結びつける

地域の文化施設として求められる役割と専門性をふまえ、地域の様々な施設・団体・資源を結びつけるコーディネーターとして、地域コミュニティのベースとなる文化的コモンズの形成に寄与する。

VI 文化事業実施にあたっての留意事項

2. 地域の子どもたちに対して文化芸術に触れる機会を提供するため、横浜市芸術文化教育プラットフォームにコーディネーターとして参画し、学校プログラムを実施してください（原則：年3校）。

(3) 各業務に係る業務責任者

エ 地域コーディネーター（兼任可）

出典：横浜市瀬谷区地域振興課「横浜市瀬谷区民文化センター指定管理者業務の基準」（令和2年8月）

【インタビュー調査の発言から】

□ 権限を委ねる仕組み

- 指定管理者制度もネットワーク型ガバナンスの一つの典型。従来行政が持っていた使用許可の管理権限を、指定管理者が持っているなど、指定管理者側に相当の権限を委ねている。（鬼木）
- ただし、施設の指定管理なので、地域に出ていくところがイメージしづらい。そこまで含めて文化施設の役割だということを、行政側がまず理解し、業務の基準に書き込まないと進まない。（鬼木）

□ 公立文化施設の関わり方

- 公立文化施設がどのように関与できるかはいつも悩むところ。地域の団体をいろいろな形でバックアップしたり、人材の供給源になったり、ということを期待したいと思いつつ、現在の文化施設にそうした伴走支援を依頼するのは難しい面もある。（小川）
- 文化施設の質的な転換やセンター機能の強化を促しながら、コーディネーター的な仕事を掘り起こしていくこ

とが必要。とりあえず教育事業に取り組む、福祉ならギリギリ対応できる、といった感じで調整を続けている。
(小川)

4. ST スポット横浜のコーディネート業務の特性と成果

ST スポット横浜のコーディネート業務の特性は、(1) アート NPO ならではの機動力と柔軟性を備えていること、(2) 教育、地域、福祉という 3 つの分野を融合、発展させて活動をヨコに展開していることである。最近では、教育プラットフォームやアートサイト、支援センターの活動が、団体の原点である小劇場「ST スポット」と相互乗り入れするケースも出ており、3 つの地域連携事業と小劇場が有機的につながりながら、ST スポット横浜ならではのコーディネート業務の成果が生み出されている。

(1) アート NPO ならではの機動力と柔軟性

ST スポット横浜のコーディネート業務は、特定の地域や行政課題にしばられることなく、拡張と深化を繰り返しているが、それを支えているのはアート NPO ならではの柔軟性や自由度である。また、市の財団は、従来、市全域の文化行政に目配りする存在だったが、指定管理者制度が導入された結果、個々の文化施設の運営や事業の比重が高くなっており、市全域を視野に入れた対応についても、ST スポット横浜の方がやりやすいポジションにいる。

【インタビュー調査の発言から】

□ アート NPO ならではの機動力、自治体からの自由度

- アートサイトでは市全域で地域ごとにきめ細かく対応する必要があり、機動力や臨機応変という点では団体の性質としては、どちらかという市財団より NPO 法人のほうが向いている。(鬼木)
- NPO 法人の特性は、一自治体にそのままぶら下がっていないところ。県の事業や他の民間のいろいろな事業と連携しているということで、それが結果的に横浜市にもプラスになっている。(鬼木)
- ただ、自治体ごとに状況が異なるので、他の自治体においても NPO 法人がいいという訳では必ずしもない。誰がコーディネートの役割を担えるのか、自治体ごとの状況でやり方を考える必要がある。(鬼木)

□ NPO としてのアイデンティティ

- 活動をするうえで、NPO としてのアイデンティティには、結構こだわりがあり、それがモチベーションになっている部分がある。NPO はいつでもやめられると思われがちだが、誰もが満足してなおかつ面白いもの、意味があるものをつくっていく、そういう市民社会というのはきちんとできる、と思っている。(小川)
- 行政と違って、筋論にこだわらないのが NPO らしい強み。学校や公的な組織だとお伺いを立てる必要があって時間がかかるが、我々はとにかく現場に行ってみる、ということがよくある。(小川)
- 行政には ST のことを理解してもらう努力をしている。ただし、第二財団になったり、体のいい下請けにならないよう、行政とは異なる発想で、面白いことをやるよう努めている。(小川)

□ 市全域への対応と指定管理者制度の影響

- 誰が市全域を見ているのかという話だと思う。以前は財団がすべての文化施設を運営していたが、今は、指定管理者となっている施設のみである。活動領域の重なる中間支援どうして情報交換をよく行っている。(小川)
- NPO は行政の境界を超えることも可能で、動きやすい。また、指定管理者として財団をはじめとする他団体の



*8:しょうぶ学園:1973年に知的障害者厚生施設として設立、2007年に入所支援施設「しょうぶ学園」に改築され、現在は社会福祉法人太陽会が運営するライフサポートセンター。障がい者のアート活動にも積極的に取り組んでおり otto（民族楽器を中心にしたパーカッショングループ）& orabu（ヴォイスグループ）は、2001年から音楽活動を続けている。

小劇場 ST スポットで行われた「ST スポットオープンデーvol.1 場所と音楽-劇場でつくる-」のようす
ディレクター:西井夕紀子(音楽家)、2021年

競争にはならないため、安心して付き合ってくれる。(田中)

(2) 分野を横断・融合させ、活動をヨコにつなぐ

ST スポット横浜は、教育プラットフォームの事務局に加え、アートサイトの事務局、神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターの運営を行っており、NPO 法人としてそれら3つの活動の相互の連携や乗り入れが図られている。最近では、ST スポット横浜の原点といえる小劇場 ST スポットでの事業にもつながるなど、小劇場という創造・表現空間を有する NPO ならではの展開も生まれている。

さらに、コーディネーター同士の意見交換や分野を超えた連携を図ることによって、人材育成やその先の新たな事業の種まき、提案につなげようとしている点も、ST スポット横浜がこれまで多彩なコーディネート業務を積み上げてきた成果といえる。

【インタビュー調査の発言から】

□ 教育、地域、福祉3分野の相互乗り入れと小劇場への展開

- 地域連携事業部の仕事は、教育、地域、福祉の3つに分かれてはいるが、意識的にその枠組みを飛び越えて、シナジーを発揮できていることが ST の成果。アーティストの中には、教育、まちづくり、福祉の3分野すべて、あるいは2つの分野に関わっている人もいる。(小川)
- 福祉事業でダンスのワークショップを行った福祉施設の職員が、自分たちでもやりたいとアートサイトに応募したケース、福祉事業でワークショップのお手伝いをした方が、精神障がいの当事者たちのバンド活動でアートサイトに応募したケースもある。(田中)
- その精神障がい者のバンドは、今度、小劇場「ST スポット」で演奏会を行うことになった。今や、小劇場を運営する「創造環境事業部」と「地域連携事業部」の垣根までもがなくなっている状況。(小川)
- 劇場の主催事業で関わっていたアーティストが、精神障がいのある人たちの病院と生中継でつないでワークショップを行ったり、特別支援学校の先生方が、教育プラットフォームをきっかけにアートサイト知り、有志で団体を立ち上げて「しょうぶ学園」の映画や同学園で活動する otto&orabu を呼びたい(*8)、と申請したこともある。(田中)

□ 小劇場から始まった地域連携事業

- ST 全体の予算規模で見ると、今は地域連携事業は、母体の劇場を大きく超える状況だ。でも、小劇場から始まったからこそ、地域連携事業の多様な活動が成立している、といえる。(小川)
- ただし、劇場は劇場としてある意味「聖域」の部分が必要。例えば、ダスキンとミスタードーナツのような関係で、洗剤の臭いのするドーナツになると駄目だということと同じ。(小川)
- すぐ横で生きのいいアーティストの情報がすぐ入ってくるから、「学校が困っているんだけど、スケジュール空いてない？」という話が直ぐにできるのは利点。(小川)

□ 活動をヨコにつないだ担い手の育成と新たな事業の種まき

- ST は、ただ事業をするだけではなく、アートサイトの報告会や、コーディネーター会議など、層としてヨコでつなぐという努力をしている。つまり、横浜全体の文化の担い手をどうやってつなぎ、育てていくかということとを常に頭に描いている。(端山)
- コーディネーター会議など、情報共有の場をつくることで広がりが見られる。教育を入りに、違う分野、違

ヨコハマアートサイトラウンジのようす
2020 年



う問題に関しても話し合う場をつくって関心分野を広げていく必要がある。（田中）

- 横浜市の教育事業と神奈川県福祉事業は切り分けているが、学校の中でも障がいのある子どもたちとのアートの取り組みに期待をよせられていたり、特別支援学校と交流する文化施設もある。横浜市が福祉の分野でも教育と同じようなプラットフォームを展開できないか、種まきをしながら、提案に向けて話し合っている。（田中）
- 「学校連携事業担当者」で終わりがたくないということもあり、福祉、まちづくりとの連携は意識的にやっている。アートサイトで地域向けの助成金に取り組むようになると、地域の解像度があがってくる。地域向けの助成金に福祉系の人に応募するようになり、福祉の事情がわかってきて障がい者福祉の事業をきちんと立ち上げなければ、ということにつながっていく。（小川）

5. 問題点・課題

今後、地域や市民と文化芸術をつなぐコーディネーターの仕事を進めるうえで、問題点や課題としてあげられたのは、(1) 分野や立場を超えた集まりや話し合いの場が少なくなっていること、(2) 労働環境が脆弱で将来に不安があること、(3) 活動の継続性が見通せないこと、であった。

(1) 分野や立場を超えた集まりや話し合いの場が少なくなっている

コーディネーターの仕事は、必ずしも確立されたものではなく、目的のない集まりや雑談、背景の異なる人たちとの出会いから、ヒントが生まれ、具体的な取り組みにつながっていく。現在は、すぐに結果を求められたり、数値目標やわかりやすいことが優先され、「無駄」や「余白」のない社会となっていることが、今後、コーディネーター活動を推進するうえで課題だと考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- 新型コロナの発生する前から、今はより、目的がない中で何となく集まる、ということが難しくなっている。その結果、自分と全く違うバックグラウンドの人に出会えなくなってしまった。（田中）
- 文化施設も、制度としてしっかり対応する、ということから染み出たり、漏れたりしてしまう人にどう出会えるかを、小さくてもやっていかなければならない。いろいろなバックグラウンドの人が「不意に出会える」ということ、分野を横断していろいろなことができることが文化芸術の特性。（田中）
- 生活の中での芸術文化の優先度がすごく落ちている。どこかで無駄なことだと思われていることや創造することに対する価値がすごく小さくなって、役に立つこと、明日使えることが優先される。（田中）
- 地域や市民と文化芸術をつなげるうえで最大の問題は、まず、そのことを話す場所がない、ということ。個別の現場についてじっくり話をする時間が、まったく取れなくなった。世田谷パブリックシアターでは、子どもと5時間のワークショップの後、5時間の振り返りを行っていた。（小川）
- 我々は数値評価に馴染まない世界の問題を扱っている。では、何がベースになっているか、ひと言で言うと「勘」。現場で使う見立てや例え話がどこで養われるかというと、現場の無駄話。無駄話をしながら、関係者を説得したり、自分たちの状況を整理せざるを得ない。専門用語によって組み立てられている世界ではないので、そういう仕事をみがく場所として一番有効なのは雑談だと思う。（小川）

(2) 脆弱な労働環境、不安定な将来

ST スポット横浜は、教育プラットフォーム、アートサイトでは横浜市と、支援センターでは神奈川県とそ

れぞれ契約を結び、人件費を含めた経費が提供されているが、必ずしも十分な金額ではなく、将来への継続性も不安定だというのが実態である。

【インタビュー調査の発言から】

- ST は、劇場を含めて11名、地域連携事業部は正職員6名（小川、田中含む）、アルバイト1名の7名体制。教育、地域、福祉を2名ずつで担当している。自分は理事長であると同時に、アートサイトの担当でもある。納税からシュレッダーのゴミ捨て、郵便物の受取まで行う。（小川）
- みんな低賃金でよく働いている。コーディネーターが専門性のある職員として位置づけられなければ、賃金が上がっていくということはない。（小川）
- 市や県との契約は毎年更新なので、何年後まで続くかわからない。年度の後半になるといつもドキドキする。行政の事業なら、賃金体系も行政と合わせられるのではと思うが、毎年変わらない。（田中）

(3) 活動の継続性

行政からの補助金は、3 年程度で打ち切り、というのが通例となっている。ST スポット横浜のコーディネート業務は、いずれも行政からの補助・委託となっているため、その慣例が適用されると、長期的な継続は難しい。コーディネーターの仕事は、現場での経験や人的ネットワークのうえに成立しているため、一旦途切れると、それまでの積み重ねが途絶えてしまい、同じような成果が生まれるとは限らない。

一方で、同じ団体だけが継続し続けることが必ずしも望ましいとは言えず、また、文化芸術は成果が現れるまでに時間を要することから、コーディネーターの質を担保しながら継続、発展させることは大きな課題だといえる。

【インタビュー調査の発言から】

- 補助金は3 年程度で減額・打ち切りになるのが通例だが、本当に文化のことを考えたら3 年で打ち切りなどはあり得ない。それをどうクリアするかは事務局でもよく話し合っている。（鬼木）
- ST だけが今の事務局をずっと持ち続けているのが正しいかどうかは分からない。本来はいろいろな中間支援組織が入れ替わり担当する、アクターと呼ばれる現場の方と中間支援が入れ替わる、行政と NPO の職員が人事交流する、といったことが必要だと思うが、諸条件が違いすぎて現実的ではない。（田中）

6. コーディネーター推進の方向性

今後、コーディネーター活動をより一層推進するためには、(1) 事業単位ではなく政策レベルとして展開していくこと、(2) コーディネーターの理想像、専門性に関する共通認識を形成すること、(3) 社会的課題との向き合い方を捉え直すこと、そして、(4) 非営利のアートから地域の体質改善を目指していくこと、が求められている。

(1) 事業単位から政策レベルの展開へ

劇場やホールで行われているアウトリーチに代表されるように、文化芸術のコーディネーター業務は、多くの場合、個別の事業として実施されている。それだけではこれからの広がりが限られており、今後は政策レベルでコーディネーター業務の必要性や文化政策における価値を明確にしていく必要がある。

【インタビュー調査の発言から】

- 普通コーディネーターの仕事は事業担当ということになるが、その上位の政策までいかないと本当の仕事にならない気がしている。単に事業に責任を持つということではなく、政策に責任を持てるようになる必要がある。地域や市民と文化芸術をつなげるところで、我々がもがいているのはこの点だ。（小川）
- 個別の事業でこんな成果があった、というだけでは不十分。事業全体を俯瞰しながら、新しい事業を立ち上げるならこれとこれ、という形で攻めていくことが必要。（小川）
- 事業より上位の部分、文化芸術と地域や市民をつなぐことにどんな意味があるのかを説明して政策に活かしていく部分を、市町村の文化政策担当者に支援してもらいたい。（小川）

(2) コーディネーターの専門性と理想像

文化芸術と地域や市民をつなぐコーディネーターの重要性については、かねてから指摘されてきたが、コーディネーターとは何か、専門性を含めて必ずしも明確になっていないのが実情である。劇場やホール運営においても、企画制作や広報、施設管理や技術など他の職種と比べると、コーディネーターや学芸の仕事は曖昧な部分が残されており、公演事業や貸館業務に対して周縁の業務と捉えられがちであることは否めない。

アウトリーチなどコーディネーターの仕事は収入に結びつかないのが一般的であり、指定管理者にとっては、優先度の低い業務とならざるを得ない側面もある。

コーディネーターは、経験に裏打ちされた知識やノウハウ、柔軟な発想や機動力、現場対応の迅速性、適格性などが求められるなど、アートマネジメント分野においても極めて高度かつ専門性の高い業務だといえる。今後はコーディネーターの専門性や必要性に関して、共通認識を形成し、普及させていくことも肝要だと考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- 全国美術館会議の示す美術館の原則や関係者の行動指針のように、公共ホール・劇場も、どういう像を目指すべきかという共通見解や、コーディネーターも含めてそこで働く人の理想像を、一度、皆で描かないと結構苦しいかな、と現場実感として思っている。（田中）
- その中で、もっと地域を知ったり、気軽に外に出ていくことがきちんと劇場やホールの業務に入るようなうまい方法があるといい。（一財）地域創造に指針を出してもらえると、それが支えになる人は多いのではない。（田中）
- 専門性をどう考えるか、は難しい。いわゆる芸術本体の部分と、地域連携系の部分を比べると、今は、地域連携の方が難しいのではない。何を参照したらどの問題が考えられるのかが分からず、模索しながら実績を積み重ねるしかない。（小川）
- コーディネーターは、定義の仕方やカバーしている業務の内容もさまざまだと思う。アーティストと地域や学校をつなぐ、地域団体とうまく連携する、ジャンルを越えて連携体制をつくる、大きな枠組みをつくる、あるいはファンドレイズに貢献するなど、それぞれコーディネートの種類がある。（鬼木）
- 本当にその人に合ったものや大事なものをどのようにフィットさせるかということとは簡単ではない。コーディネーターはそれをうんと分かりやすくして、現場に必要なものを考えてくれる大切な役目。教育プラットフォームは、それがきちんと機能している。（中澤）
- 劇場には本丸の部分と周辺の部分みたいなものがあるが、今、鍛えられているのはこれまで周辺だと思われていた部分。（小川）



福祉事業の写真展のようす
2021 年 ©金子愛帆

(3) 社会的課題との向き合い方を捉え直す「文化の権利」

ST スポット横浜が、文化芸術のコーディネーターとして向き合っている政策分野は、教育、地域づくり、障がい者福祉の3つである。それぞれの分野が直面する政策課題と向き合い、アートならではの発想、アーティストならではの取り組みによって、具体的な事業や活動を展開している。

しかし、社会的な課題は複雑化する一方で、行政の従来の政策分野ごとに個別の課題として捉えることは困難であり、課題同士の関係性や背景、課題を捉える立ち位置なども含め、総合的に捉え直すことが重要となっている。その際、文化芸術の立場からは「文化の権利」として捉え直すことも、コーディネーター業務にとって有効な手がかりだと考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- 社会的課題で大事なのはどういう文脈でそれを見るか、ということ。同じ課題でも説明の仕方や捉え方によって、見え方や解決方法、関係者が変わってくる。障がいがある、ということを特別支援教育の余暇活動の問題として捉えるか、福祉施設の日中活動の問題なのか、劇場の社会包摂として考えるかによって、入り口や関係者は相当変わってくる。(小川)
- 貧困や障がい者、子ども、ひとり親など、いろいろな問題があるが、それを個別の社会的課題と捉えるのではなく、それらを掛け合わせたところでさまざまなことが起きているのが実情。自分たちが束ね役として市役所などに話ができる立場なら、そこをきちんとと言わないと次につながらない。(田中)
- 我々が考える社会的課題と文化の関係は、ひっくりめると「文化の権利」として考えるべき。例えば、貧困の問題を文化に関係ないことだとして逃げるのではなく、文化側で捉え直して文化の権利として考えなければならぬ。(小川)

(4) 非営利のアートによる「地域体質改善」に向けて

市民にとって、芸術や文化は劇場やホール、美術館で鑑賞するもの、エンターテインメントとして楽しむものだと受け取られているというのが、まだまだ一般的だと考えられる。コーディネーターが扱うのは、それらとは性格が異なるアート、あるいは同じ文化芸術でも鑑賞やエンターテインメントとは異なる視点やアプローチが求められるものである。

それを定義するのは簡単ではないが、ひとつの手がかりは「非営利のアート」という考え方に基づいて文化芸術の社会的な価値を広く捉え直すことであろう。2017年に文化芸術振興基本法が文化芸術基本法に改正され、翌年閣議決定された文化芸術推進基本計画には、文化芸術の社会的価値の意義や活用が明記されている。

この法律改正を待つまでもなく、文化芸術が教育や福祉、まちづくりなど、さまざまな分野において幅広い効果を有することは、広く認識されていた。しかし、アートによって具体的な問題が解決すると短絡的に受け止められている側面も否めない。解決には至らなくても、同じ問題を違う確度から捉え直すこと、従来とは異なるアートならではの発想やアプローチから取り組むことによって、人々に気づきを与え、考え方の変容を促すのが、芸術や文化の特性である。

今回の調査で、横浜市の鬼木さんから提示された「地域の体質改善」という考え方は、芸術や文化の持つ可能性を的確に表している。今後、コーディネーターの活動を推進するためには、非営利のアートによって市民の意識変化を促し、地域の体質改善を図るという考え方や姿勢が肝要だと考えられる。



【インタビュー調査の発言から】

□ 非営利のアートの存在価値

- チケットを買って楽しむのとは異なる非営利のアートというものが世の中にあることを、機会あるごとに伝える努力をしている。身近な問題とアートが関係するということへの理解が少し進んだ気がする。（小川）
- 学校教育の現場では、非営利のアートが何の役に立つのか、何の意味があるのかということとをずっと問われ続けている。福祉の現場では、未だに「敷居が高い」と言われる。「私たちはアートはやっていません」と言われて「そこで起こっていることがまさに創造的な活動です」と励ますこともある。（田中）
- 文化がおしゃれですてきなものとか格好いいものというだけでなく、本当に市民社会に必要でなくてはならないと思ってもらえる仕事とは何かを考えて取り組んでいく必要がある。（端山）

□ アートによる地域の体質改善

- 格差の是正や共生社会など根深い問題は行政が何か施策を打ったからすぐ良くなるというものではない。そうした長期的に取り組むべき課題について、文化芸術やアートの役割を考えると、地域の課題を直ぐに直す対症療法ではなく、地域そのものの体質改善に寄与することが求められている。（鬼木）
- 今は、問題が複雑化して、対症療法が有効ではなくなっている。対症療法の枠組みから離れて、人と人との関係をもっとフランクにする、地域のあり方の基本に戻って考えていくことにアートや文化芸術は役に立つ。（鬼木）
- 文化芸術で地域の課題を「解決する」というのは、難しいと思う。明確な効果は見えづらい。アートによって地域の課題に気づいた一人ひとりの意識が変わり、地域に何かの変化があれば、長い目で見たときに、根深い課題が少しずつ良くなっていくはずだ。（鬼木）

事例 4

演劇や表現から 地域の生きにくさと向き合う 民間劇場・市民グループ

調査対象

【コーディネーター】

荒井洋文（一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表／プロデューサー）

【関係者①：のきした】

伊藤茶色（犀の角 照明・制作スタッフ）、黒岩友香（NPO 法人リベルテ 副代表理事／roji 相談支援専門員、犀の庭・子ども部シマウマ）、清水洋幸（一般社団法人あそび心 BASE アフタフ・バーバン信州 理事長）、直井恵（特定非営利活動法人アイダオ／NPO 法人上田映劇 理事、うえだこどもシネマクラブ）、野川未央（特定非営利活動法人 APLA 事務局長）、八反田貴史（デイサービス Sora／管理者生活相談員）、武捨和貴（NPO 法人リベルテ 代表理事／スタジオライト・roji 管理者）、元島生（NPO 法人場作りネット 理事／やどかりハウス スタッフ）、よしざわまほ（犀の庭・しまうま子ども部、1135 ラジオ）

【関係者②：行政・サントミュージゼ】

掛川泰督（長野大学 学部学科再編室 室長／元・サントミュージゼ）、清水一郎（上田市政策企画部交流文化スポーツ課 文化振興担当係長）、谷口弘毅（上田市教育委員会事務局生涯学習・文化財課 主査）、横尾慎二（上田市交流文化芸術センター（サントミュージゼ） 演劇・ダンス企画制作）

事例調査から見てきたポイント

◎ 演劇や表現活動をとおして生きにくさと向き合う

- 演劇をとおして未知のものと出会うこと、自ら表現活動に取り組むことが、生きづらさからの救いや生きる力につながる。
- 地域に演劇を持ち込むことが、異なる価値観の共存する街をつくり、誰をも受け入れる地域へとつながっていく。

◎ 劇場という創造の場、空間が持つ力を活かす

- 劇場という創造の場や空間が持つ力は、地域の課題と向き合う市民グループ「のきした」の活動を生み出す大きな要因となっている。
- 地域をよりよくしたいという想いを支え、フットワーク軽く活動を立ち上げ、実行に移せるのは、民間の劇場という場の持つ力。

◎ 余白や隙間、決まり事がないところから生まれるもの

- 余白や隙間、決まり事がないところから生まれることを大切にしたい。

◎ 悩みを共有し、次のアクションをイメージしてつなげていく

- 支援する側と支援される側を分けることなく、悩みを共有しながら、皆で考え、お互いができないところを支え合うことで、社会は生きやすくなる。
- 課題と向き合い、こうなってほしい、こうなったらいいというイメージを持って、人や活動をつないでい

海野町商店街に立地する「犀の角」
撮影：太田拓実



くことで、具体的なアクションが生まれる。

◎ 地域社会が支える共有地としての民間劇場

- 民間の劇場は公立の文化施設にない自由度やポテンシャルを有している。
- それを従来の経済システムの中で運営していくのではなく、神社や寺社仏閣のように地域社会の共有地として皆で守り、維持していくことはできないか。
- 公的な補助金や助成金の矛盾（国や地方公共団体の基準や評価が優先され、本来の目的や狙いからずれてしまう恐れがあること）に自覚的でありたい。

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

長野県上田市の中心、海野町商店街の中心に位置する「犀の角」は、一般社団法人シアター&アーツうえだが運営する民間の文化施設である。1階は劇場とカフェの複合施設、ほかに稽古場などに利用できるレンタルスペースやゲストハウスが併設されている。

犀の角の開設や一般社団の立ち上げで中心的役割を果たし、現在社団の代表として犀の角の運営責任者を務めているのが荒井洋文さんである。施設構成からもわかるように、荒井さんは犀の角を拠点に演劇を中核としつつ幅広い事業を展開し、地域や市民と向き合いながら多様な成果を生み出している。

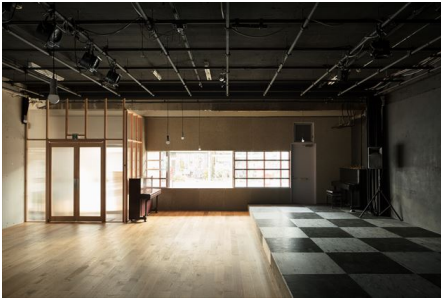
犀の角のHPには「自分の外側にあるものと出会う場所」「変な人でも住みやすい街に」というキーワードが掲載されている。それは、この施設や荒井さんの活動の狙い、市民と演劇との関係づくりや地域に対する眼差しを象徴している。

同じくHPには、「観る（上田街中演劇祭、主催公演）」「創る（稽古場として使えるスタジオ、アーティストインレジデンスなど）」「出会う／交流する（カフェやゲストハウスでのアーティストや地域住民、旅人などの出会い・交流）」「裾野を広げる（演劇への興味関心の喚起、さまざまな文化的イベントの開催）」という4つの事業や活動の方針が掲載されている。

ここでは、荒井さんのコーディネーターの仕事として、犀の角の運営や事業の基本的な構造を整理したうえで、地元の市民団体と共同で取り組む「のきした おふるまい」、「上田街中演劇祭」の二つを中心に、行政組織と取り組む事業も含め、荒井さんのコーディネーターとしての業務内容を整理した。

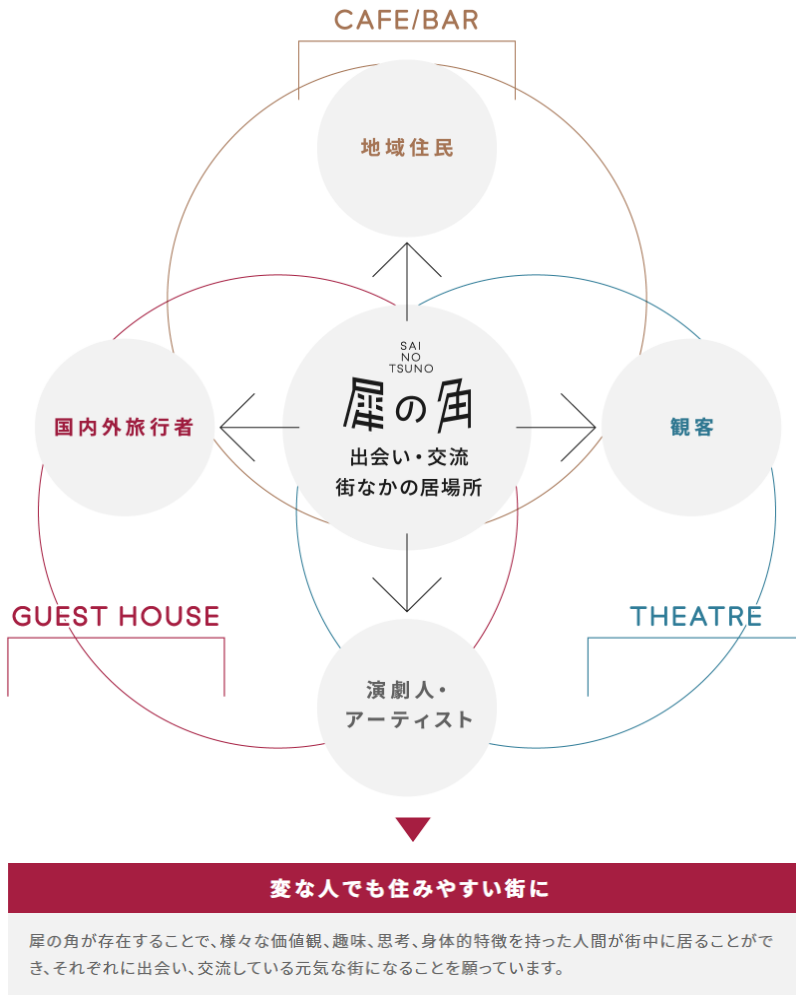
【インタビュー調査の発言から】

- コーディネーターという意識はあまりないが、犀の角がアーティストと地域の人と旅行する人が交流できるように設計したので、結果的にコーディネーター的な役割になってきたと認識している。（荒井）



本館 1 階の劇場・イベントスペース
撮影：太田拓実

◆ 出会い・交流の場としての「犀の角」



出典：「犀の角」HP (<http://sainotsuno.org/about/>)

(1) 犀の角の運営

犀の角の中核となる事業は演劇であり、劇場としての機能や役割が優先されている。その自由度を確保するために、宿泊とその他の事業を展開して、建物の家賃や施設の維持管理経費を賄うというしくみで運営されている。ただし、劇場といっても必ずしもブラックボックスのような本格的な劇場ではなく、ガラス張りで商店街に開かれた建物であることが、演劇の本質を見直したり、境界線を越えて地域との接点や市民との出会いを生み出したりすることにつながっている。

◆ 犀の角の施設構成

- 本館（劇場）
 - 1階：劇場・イベントスペース（120㎡）、カフェ／バーカウンター
 - 2階：レンタルスペース01（約120㎡）（楽屋／倉庫／小規模の作業場／アトリエなどとして）

のきした おふるまい 2(2021年)
(本館裏手の駐車場)
写真提供：犀の角



3階：レンタルスペース02（約120㎡、フローリング張り、西側一面鏡張り）（ダンス団体など各種芸術団体の練習場として）

● 別館（ゲストハウス、最大12名の宿泊が可能）

1階：シャワールーム／トイレ

2階：個室2室、男女兼用ドミトリールーム1室

3階：女性専用個室ツインルーム1室、女性専用ドミトリールーム1室、シャワールーム／トイレ

※3階は現在「やどかりハウス」（後述）として運営されている。

【インタビュー調査の発言から】

□ 劇場の自由を担保するためのビジネスモデル

- 収入は宿泊が6割、文化事業が3割、他が1割という感じで、文化事業は助成金と入場料収入で成立させているが、一番やりたいことは演劇なので、民間としてその自由を担保するために宿泊と飲食とをやっている。（荒井）
- かなり安価にしてもらっているが、家賃や固定費として月30万円程度を支払っている。定期的な支払いは楽ではないが、そのためにいろんな事業を行って、さまざまな人が入ってくることにつながっている。（荒井）

□ 不完全さの持つポテンシャル

- 犀の角はブラックボックスのきちんとした劇場ではないために、逆に劇場とは何だろうか、ここで演劇は成立するだろうか、といった問いが生まれ、それが演劇や劇場の新しい可能性につながる。（荒井）
- ガラス張りで商店街に開かれた建物であることで、演劇自体を開いたり、劇場から飛び出して演劇を考えたりする。境界線を越えていくことで、地域の人々や演劇界とは違う人と接点を持つことができる。本格的な劇場ではないところからスタートしたから出会いが生まれやすくなった。（荒井）

(2) のきした おふるまい

新型コロナによって、犀の角の運営は大きなダメージを受けた。しかし、困っているのは犀の角だけではなく、地域には困難を抱えた人たちが大勢いて、そうした人たちを支援しようと始まったのが「のきした おふるまい」である。

「のきした」は、新型コロナの感染拡大をきっかけに、犀の角と交流のあった障がい者福祉団体や NPO、文化団体などが共同で立ち上げた市民グループである。コロナ禍という風雨をしのぐ「軒下」をつくって、困っている人が助かるための時間や場を提供しようという思いから名付けられた。

最初の「おふるまい」は 2020 年の大晦日から正月にかけて犀の角で開かれた。社会福祉協議会などから寄付された食料品や日用品が犀の角のステージに並べられ、支援を求める方々に提供されたほか、のきしたメンバーと来場者が一緒に火を囲んで豚汁を食べたり、ステージで歌ったりした。

おふるまいという名前も、従来の福祉的なイメージの強い「炊き出し」とは違う言葉を、という議論から生まれたものである。おふるまいは、その後も継続され、2022 年の 1 月には第 5 回目が開催されている。支援する側と支援される側を分けない、というのがのきしたの基本的な姿勢で、ふるまう側とふるまわれる側の垣根をなくし、皆で話をしながら一緒に食べ、互いに楽しみ、手伝い合うような催しとなっている。



ゲストハウス（別館）
撮影：太田拓実



やどかりハウス
写真提供：犀の角

◆ のきしたの主なメンバー・所属団体の活動

団体名（メンバー）	活動の概要
NPO 法人場作りネット （元島生）	3年前、東日本大震災を契機に（一社）社会的包摂サポートセンターが厚労省と復興庁の補助金を得て始めた「よりそいホットライン」の拠点を長野県に設置する話があり、富山県高岡市から上田に拠点を移して2019年3月にNPO化。 - 電話やLINEなど各種相談支援の窓口を運営し、年間8,000件もの相談に応じながら、相談者から寄せられる声をヒントに、地域社会の中に必要な場をつくっていくことを最大のミッションとしている。 - 犀の角と共同で、新型コロナで悩みを抱える女性専用の宿泊施設「やどかりハウス」をスタートさせた。元島さんは「やどかりハウス」のスタッフも務める。
上田映劇／NPO 法人アイダオ （直井恵）	「上田映劇」はもともと大正6年（1917年）に立てられた上田劇場で、昭和に入って映画上映が中心となって「上田映画劇場」と名称を変えた。2011年4月に定期上映を打ち切っていたが、創立100周年の17年4月に定期上映を再開、翌年NPO法人上田映劇が設立された。 「アイダオ」は社会と人とNPOのアイダ（間）をつなぐ中間支援のNPOで、上田映劇で「うえだこどもシネマクラブ」を運営している。「学校に行きづらい、行くのをやめてしまった子どもたちのための、もうひとつの居場所づくり」として、月1回（2021年度からは月2回）、平日の昼間に上田映劇のスタッフがセレクトした作品を上映、子どもたちだけでなく、保護者や先生も参加できる。 「うえだこどもシネマクラブ」はコロナ禍の2020年夏に立ち上げられ、引きこもりや不登校を経験した若者たちがコミュニティカフェを開き、上映の合間にはゲームやワークショップ、雑談をしながら過ごせる空間も用意されている。
NPO 法人リベルテ （武捨和貴、黒岩友香）	- リベルテは障がいのある人と一緒に活動する福祉事業所で、アトリエ活動を3ヶ所で展開するほか、相談支援という形で障がいのある方が社会資源として福祉サービスの活用も含め相談を通じて地域生活を行うためのケアプランを立てる仕事も行っている。 - 犀の角がカフェを営業していなかった日中の時間帯、リベルテが障がいのある人たちの運営するカフェ「リベルテの角」として1年半ほど運営していた時期があった。それが終了した後、同じく日中の時間帯で展開されているのが「犀の庭」である。 - 犀の庭はカフェスペースの日中の時間帯を「庭」に見立てて、誰もが気軽に集まれるサークル活動のような場づくりを想像して始めた。子ども連れの親子などが絵本を持ち寄って読み聞かせをしたり、「ポーセラーツ」というオリジナルの陶器づくりの体験教室や子どものニット帽づくりなどの活動が犀の庭で月1回開催している井戸端会議から始まった。コーヒーを片手に市政に関する雑談会「＃上田と市政とコーヒーと」なども開催された。

出典：各団体のHP、SNS掲載情報等から作成

◎ やどかりハウス

「のきした おふるまい」の活動と並行して2021年2月にスタートしたのが女性専用の宿泊施設「やどかりハウス」である。

のきしたメンバーの元島さんが運営する「場づくりネット」では、新型コロナの発生以降、子育てや夫婦関係、親からの虐待などに悩む女性や女子生徒の相談が増えていた。コロナで女性の自殺が増加していたこともあって、悩みを抱えた女性が気軽に家を出て、再スタートできる駆け込み寺のような居場所をつくりたい、と元島さんが犀の角の荒井さんに相談して実現した。

新型コロナで利用者の減ったゲストハウスの女性専用ルームの一部を開放し、1泊500円、最大10泊でき

第0回うえだ街中演劇祭(2016年)
劇団百景社「走れメロス」
演出：志賀亮史
写真提供：犀の角



るというもので、支援の必要があれば専門機関につないでもらえる。10月から上田市の補助金も出るようになっていく。

【インタビュー調査の発言から】

□ 新型コロナがもたらした苦境と向き合う

- 犀の角にホームレスがふらっと入ってきてじっとしている。自分たちもたいへんだけど、社会全体がたいへんになっている。何とかしなければと思った。（荒井）
- のきしたのメンバーは、犀の角がオープンして以降つながっている人たちだったが、一緒に事業をする関係性はなかった。それが事業と一緒にやろうとなったきっかけはやはりコロナである。（荒井）
- コロナでこの活動が止まっていて、武捨さんの「犀の庭」など同時多発でいろいろな動きが起こっていた。一度、皆で集まって話をしようということになって、苦しい時をしのぐ「軒」をつくっていくということになぞらえて「のきした」をはじめた。（元島）
- のきしたの集まりで、回を重ねるごとに人が増えていった。（直井）

□ コロナで浮かび上がってきたこと

- コロナで今まで水面下にあったものが浮かび上がってきた。DVで悩んでやどかりハウスに滞在する人、ホームレスっぽい人、知的障がいのある女性など、困っている人たち、制度の狭間でこぼれ落ちてしまう人たちに、犀の角は、3時間、4時間じっと居てもらえるだけでもかまわない。（荒井）
- コロナになってゲストハウスの稼働が少なくなってきたタイミングで、困った人が泊まれる場所にしてやってみようというのが「やどかりハウス」のスタート。（元島）
- 生きづらさを抱えている人は思った以上にいるし、その人たちが立ち寄れる場所が犀の角だけではなく、世の中にもっとたくさんあったほうがいいと思う。のきしたでそれが広がりつつある。（荒井）

(3) 上田街中演劇祭

上田街中演劇祭は、「シアター&アーツうえだ」の主催で2016年に始まったものである。犀の角を中心にさまざまな場所で演劇公演やイベントが実施される。劇場に併設された稽古場やゲストハウスを活用して地域とアーティストとの交流を含めた滞在制作にも取り組んでいる。

2021年は9月17日から11月23日にかけて、犀の角や街中の施設を会場にさまざまな演劇公演が行われたほか、写真展、詩の朗読と音のライブ、トークセッション、映画の上映会などが開催された。演劇公演の中には、島崎藤村の長編小説「夜明け前」をモチーフに、犀の角が開設当時から連携している茨城県土浦市の劇団百景社と2年間をかけて創作している「Before the Dawn 夜明け前 第一部」も含まれている。

【インタビュー調査の発言から】

- 上田を拠点に3年ぐらい劇団の活動が続けていたら、犀の角が立ち上がるという話が出てきた。私自身が見ていた演劇という価値観から少し違った角度のお芝居や舞台などに合わせてもらえる。（伊藤）

(4) 行政との協働

上田市の文化行政や上田市交流文化芸術センター（サントミューゼ）と連携した取り組みも、荒井さんの重要な仕事に位置づけられている。具体的には、上田ロケ作品などの上映、映画関係者のゲストトークなどを行

い 2021 年で 25 回目となる「うえだ城下町映画祭」や、市内の文化財を活用し音楽や美術、パフォーマンス等の催事を行う「文化財 de 文化祭」への協力である。

また、公共劇場のサントミュージゼとは、演劇のワークショップや街中での事業などで連携が行われている。

【インタビュー調査の発言から】

- 「文化財 de 文化祭」という文化財を活用した演劇、音楽活動を行っているが、会場となる文化財は市が提案し、文化財の活用方法や具体的な事業を荒井さんをお願いしている。（谷口）
- 街の中に芸術を展開していくことが、サントミュージゼのミッションの一つだが、犀の角ができたことで予想よりずっと早くそれが具体化した。（掛川）
- サントミュージゼと犀の角の最初の連携事業は、劇作家・演出家の多田淳之介さんに来てもらって、ワークショップでこの会場を使わせていただいたこと。（横尾）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

(1) 演劇活動への取り組み

上田生まれの荒井さんは大学時代に演劇を始め、劇団を旗揚げした。卒業後もアルバイトをしながら演劇活動が続けるが、やがて行き詰まって郷里に戻り、民間企業に就職する。自分に向いていない仕事だったことから 3 年で辞め、上田市役所の臨時職員として美術展などの手伝いをする仕事をしている時、静岡県舞台芸術センター（SPAC）が制作スタッフを募集していることを知る。

上田市役所の仕事をしている間も「演劇とは何か」を自問し続けていた荒井さんは、応募して採用された。SPAC で働いて 10 年が経った頃、生活はギリギリでもいいから自分の演劇をつくってみよう決心し、郷里の上田に戻った。地方紙で記事を書く仕事を始めてしばらくした頃、元銀行の建物の再活用の話に巡り会って現在の犀の角の開設につながった。

【インタビュー調査の発言から】

- 大学時代に演劇を始めて、会社勤めをした時期もあるが、どうしても演劇を続けたいという気持ちがあったので、30歳を過ぎて「静岡県舞台芸術センター（SPAC）」で制作の仕事をするようになった。（荒井）

(2) 犀の角の立ち上げから現在まで

犀の角は、もともと上田商工信用組合という銀行の建物だった。2001 年に銀行が経営破綻して、現在のオーナーが買い取り、北欧の家具や雑貨などのお店がテナントとして入った時期もあったが、空き店舗となっていた。オーナーが建物の活用方法を公募し、市民ワークショップなどを経て計画案が示されていた頃、荒井さんがここなら劇場ができるのではと考えてまとめた事業計画書を提案し、オーナーもやってみようということを実現したのが犀の角である。

建物の改修費用はオーナーが負担し、荒井さんが別の法人「一般社団法人シアター&アーツうえだ」をつくって運営する形で 2016 年 9 月にオープンした。宿泊業と飲食業で経営を成立させて、助成金と入場料収入で文化事業を実施するという計画だった。

オープンから 3 年間、家賃を払いながら、ゲストハウス 6 割、劇場・文化事業 3 割、その他 1 割という売上げで、何とか運営していたが、劇場で演劇が行われ、ゲストハウスもあってカフェもやっている「犀の角」が

うえだ街中演劇祭 2018
「72 時間トーク」
写真提供：犀の角



どういう場所かがなかなか理解されず、運営を手伝ってほしいと思っていた若い人もなかなか集まらなかった。

その後、演劇だけではなく、シンポジウムや講演会、ライブなどさまざまな事業を行い、ゲストハウスを通じた出会いもあって、ここは面白い場所なんじゃないか、ということが次第に認識されるようになった頃に、新型コロナが発生し、ゲストハウスを収入源とする犀の角は大きなダメージを受けることになった。そうした状況の中から、前述の「のきした おふるまい」につながっていった。

【インタビュー調査の発言から】

- 自分でやるとは思わずに、ここのスペースであれば劇場ができるのではないかと提案をした。小劇場があると上田の街はもっと面白くなるという気持ちはあった。（荒井）
- 自分の中で演劇を（犀の角という）劇場として上演する、20年間継続するのだという気持ちになり、コーディネーターや劇場主という役割ができるかもしれないと思って始めた。（荒井）
- 最初、このスペースと一緒にやる人はいないか呼び掛けたが、何を言っているのだという感じ。「いや、分かるが、それは無理だろう」という反応が大半だった。（荒井）
- 最初は犀の角を立ち上げる意味が分からなかった。しかし、面白そうだと思って、できることがあればぜひ手伝わせてほしいと、運営スタッフの一員になった。（伊藤）
- 設計図をみて「やらない」という選択肢はないと感じた。演劇人として演劇に関わってきて、自分も表現したい人で、劇場ができるかもしれないときにやらなかったら多分一生やれないと思った。（荒井）
- 建物の改装費はオーナーが負担してくれたが、音響や照明、什器は自分で借入をして用意した。宿泊が6割、劇場が3割、その他で1割という収入計画を立てているうちにできるとしか思えなくなって、やらない方が損だと思うようになった。（荒井）
- ここが暖まるまで全速力で走り続けないと、場が冷えてしまう、という感覚があった。（荒井）

3. 犀の角を拠点としたコーディネート業務の特性と成果

(1) 演劇・劇場ならではの思いに支えられた確信

犀の角を拠点に活動する荒井さんの仕事として極めて重要なのは、何より演劇という表現活動が核になっていること、民間の劇場ならではのポテンシャルが発揮されていることであろう。

まず、荒井さんが重視しているのは、上田街中演劇祭などで、上田という地域に演劇文化を持ち込むことが、多様な価値観や新たな出会いを生み出すという考え方である。その根本には学生時代から演劇にこだわり続け、演劇を通して自分が思いもつかないような表現と出会い、演劇に救われたという経験のある荒井さん自身の確信に近い思いが存在している。

「変な人が住みやすい街に」という犀の角が掲げる目標は、生きにくさを抱えた人たち、支援の必要な人たちも含め、上田という街が誰をも受け入れられるような地域にしていきたい、ということにほかならない。荒井さんが演劇をとおして実現したいと考える地域社会の姿と、のきしたのメンバーがそれぞれの活動で目指していることがシンクロして生まれたのが、おふるまいという取り組みであろう。

【インタビュー調査の発言から】

□ 異なる価値観の共存する街

- SPAC やアヴィニヨンの演劇祭の良さはあらゆる価値観がフラットにあって、そこで出会いがあるということ。その状況を上田につくればもっと住みやすい街になるのではないか、と思った。（荒井）
- 街が、いわゆるモノカルチャー的な雰囲気からいろいろなものがあっていいという感じにはなった。街の雰囲気が変わった、と言ってくれる人もいる。（荒井）

□ 演劇からの救い、異質なものを許容する力

- 劇場で、自分が考えもしないことが表現されているものと身体をとおして出合ったときに、初めて救われるというか、自分と全然違うところでこのように生きている人がいるということを知って、初めて演劇が救いになった気がした。（荒井）
- 生きていく上で解決できない問題やどうしようもない問題があったときに、演劇に触れることで何とか生き延びてきた感覚があった。（荒井）
- 犀の角は、自分たちがより生きやすくなる状況をつくっていく試みでもあり、犀の角を立ち上げる時のプレゼンで「変な人が住みやすい街にしたい」と言っていた。演劇をしていると変なのは自分だけではないという感じがある。（荒井）

(2) 商店街に立地する民間劇場ならではの展開

犀の角が商店街に立地する民間の劇場であるということも、荒井さんの活動の広がりには不可欠な要素である。劇場という空間や創造の場に漂う雰囲気や空気感のようなものが、「のきしたの活動を生み出す大きな要因になった」「公民館や公共施設ではこうはならなかった」という意見は、のきしたの複数のメンバーから寄せられた。さらに、それが商店街の中に立地し、荒井さんが商店街の一員として活動していることが大きいという意見も、犀の角の特性を物語っている。

□ 民間劇場の有する空間や場のポテンシャル

- のきしたの活動は、公民館ではこうはならなかったと思う。ここが劇場だからということで、広がり方がすごく大きかった。演劇など表現する場にいると、何でもできるのではないかと思えてくる。（直井）
- 同じ劇場でもサントミューゼでは同じようなことはできないが、犀の角なら何かできる余地がありそうだ、ということを知り、感覚的にわかっている。（元島）
- 社会的なニーズを埋めていきたいという想いや、社会的な意味合いが強いことを身軽にできているのは、ここが民間の劇場という場であること、公共施設ではないこと、そして荒井さんの存在があると思う。（野川）
- 犀の角は公共劇場とは違った空間で、通りに面しているなどの制約もあるが、そのことがアーティストの挑戦を喚起し、ダンサーの鈴木ユキオさんは犀の角を飛び出してパフォーマンスをやった。（横尾）
- 荒井さんは「それは止めてほしい」ということを言わない。サントミューゼのピアノを犀の角に運び込んでピアニストの仲道郁代さんの演奏会を行うなど、普通ではできないようなことがいろいろ実現している。（掛川）

□ 商店街の一員としての活動

- 犀の角というこの場所がこの商店街にあるのがすごく大きい。日常とは遮断されている空間に身を置くのが劇場かもしれないが、ここは商店街の一角にあるので、すごく暮らしや街を行き交う人々に近い。（直井）

- 犀の角や荒井さんが商店街の一員として毎日のことをやってきたのが大きい。この辺りの人たちは通りがりに何をやっているか少しずつのぞきながら通る。それがお互い楽しい。ホールのような閉鎖的な空間だとそれはない。（掛川）
- 演劇公演の前後で商店街の向かいの中華料理店でご飯を食べたり、観客が花屋さんでお花を買ってここに持ってきたりなど、商店街の中で人々が循環し、商店街の方々との交流も生まれている。（荒井）

(2) 複合機能が生み出す予期せぬ出会い

犀の角は劇場以外にカフェや稽古場、ゲストハウスなどが複合した施設であり、それぞれの利用者が出会い、交流することから、新たな動きが生まれ、さまざまな成果に結びついている点も注目すべきであろう。

【インタビュー調査の発言から】

- 同じ場所で性格の異なる活動をすることで、演劇を見たい、アートに触れたい人たちと、地域の人たちや旅行者が偶然出会ったり、交流したりすることが発生している。（荒井）
- 商店街の人は最初は怪訝そうだったが、活動が続けるうちに、何かよく分からないが、犀の角で何かが起きているということが、理解されるようになったのではないかなと思う。（荒井）
- 犀の角で何かをやっていること自体が街に伝わることはすごくプラスになっている。何か頑張っている、楽しそうだと、街の人が面白がってくれている感じは実感としてある。ゲストハウスに泊まりに来た方に劇場の催しを案内すると、ご飯の後に立ち寄ってくれるなど、予期せぬ出会いが生まれる。（荒井）

(3) 街中への波及

上田街中演劇祭では、空き店舗や使われなくなった場所で演劇公演を行っている。その結果、演劇祭の終了後にカフェやデイサービスセンターが入居するなど、再利用されるケースが少なくない。しかし、空き店舗の有効活用や街中の活性化がこの演劇祭の本来の目的ではない。結果的にそうした街の活性化に結びつくことがあったとしても、多様な価値観が同時に存在している状態にしていくということが、荒井さんが演劇祭で目指していることである。

全国各地で地域活性化を目的に芸術祭やアートプロジェクトが開催されるケースは極めて多いが、本来の事業の目的と結果的に生じる波及効果を見極めることは、重要なポイントだと考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- はす向かいはずっと空き店舗で廃墟のような場所だったが、3年前の上田街中演劇祭のダンス公演で使わせてもらったところ、使えるという話になって、今は高齢者向けのデイサービスセンターが入居している。（荒井）
- 「うちは使えるか？」と声をかけてくれる人も出てきて、演劇公演で使った場所が、そのままどんどん次の人が入るという感じになっている。松尾町の倉庫でもやったが、そこも使わせてもらった後にカフェになった。元銭湯も劇場として使わせてもらった。（荒井）
- 自分としては空き店舗の有効活用や街中を活性化したいという意識はなく、いろいろな価値観や全然違う考え方が同時に存在している状態にしないと駄目だという思いがあって、そちらのほうが大きい。街中演劇祭をやったら、結果的に空き店舗の再生や商店街の活性化につながった、という感じ。（荒井）

(4) 文化行政、公共劇場との相乗効果

犀の角は民間の文化施設であるが、荒井さんはこれまでの経験やネットワークを活かして上田市の文化行政や公共劇場のサントミュージーゼと連携した事業を行うことも少なくない。行政職員からは文化財の活用方法について固定概念が変わってそれが係の中で共有されているという成果が報告された。また、サントミュージーゼの職員からは「犀の角の利用者や観客がサントミュージーゼとは異なることから地域の文化芸術の底上げや担い手の広がりが生まれる」「犀の角と連携することでサントミュージーゼの信用が高まる」といった意見が聞かれた。

【インタビュー調査の発言から】

□ 文化行政への波及

- 「文化財 de 文化祭」で別所神社の歌舞伎舞台で英国から来日したシェイクスピア・アンサンブルによる『マクベス』を実施した時、そこで繰り広げられた光景にカルチャーショックを受けた。文化財の新たな活用方法だけではなく、普段とは全然違う方々が別所神社に来てくれたことで、文化財への意識が変わる可能性を感じた。（谷口）
- その経験で視野が広がり係の中で共有されている。荒井さんの協力でいろいろな活用が可能だという判断材料が生まれ、文化財活用についての意識や固定概念が変わった。（谷口）

□ 公共劇場との相乗効果

- サントミュージーゼに来る方と犀の角に来る方は若干違う。上田にこのような人材がいたのかと気づかされる。（横尾）
- サントミュージーゼは、行政がやっているからという理由で近づかない方々もいるが、犀の角でサントミュージーゼの関連事業をやると、サントミュージーゼへの信用が高まる。それはすごく大きい。（掛川）
- 劇場と地域の拠点があることが、地域の芸術文化の底上げや、普段着で行ける場所が増える実感につながっている。サントミュージーゼだけだったら広がりが出ていなかった。（横尾）
- サントミュージーゼに来ない市民の意見を聞くのは難しいが、荒井さんからは、上田商店街を含めた地域の方々の思いや要望を結構ダイレクトに聞くことができ、私の中では宝になっている。（横尾）

4. 問題点・課題

現在、犀の角にとって、活動や施設の運営を継続させることが大きな課題となっている。とりわけ、新型コロナウイルスの影響で、ゲストハウスの利用者が減少したり、カフェなどの売上げが落ち込んだことが、深刻な状況をもたらしている。そうした状況下でも、上田街中演劇祭を継続させ、のきしたのメンバーとともに、支援の必要な人たちへの「おふるまい」を継続している荒井さんの姿勢や取り組みは、敬意を持って受け止めるべきであろう。

さらに、国や地方公共団体などの公的な支援に対して、荒井さんは極めて重要な問題点や矛盾を指摘している。自分たちの活動のために、公的な補助金や助成金を得ると、国や地方公共団体の意図や目的に沿ったものにならなければならなくなり、結果的に本来の目的や事業のあり方を見失う恐れがあるということは、コーディネーターの活動に限らず、公立の文化施設や民間の文化団体にとっても留意すべき点だと考えられる。

一坪半劇場
写真提供：犀の角



【インタビュー調査の発言から】

□ 犀の角を継続すること

- 街の中の劇場や居場所をどう継続するかが一番大きな問題。公的資金に頼ると制約が出てくる。コロナになって当初計画していたように宿泊と飲食で経営を支えることが難しくなっている。（荒井）

□ 公的な補助金や助成金がもたらす矛盾

- 芸術はフラットというか、誰にとってもどのような立場であっても平等にその人が受け取りたいように受け取ればいいものだと思う。しかし公共や国のお金が入るともっとサービスしなければいけないなど、違う力学が働く気がして、公共のサービスとはどのようなものなのかを考えないといけない。（荒井）
- 補助金や助成金の比率が大きくなると自分たちの思いとは別の、国や地方公共団体の意図や目的をインストールしなければいけなくなる。でも、僕らは公共の人間ではないので、完全にそうする必要はないはずだが、いつの間にか国や公共団体の意図や目的が、元々あったかのように思ってしまうところもある。すると自分は何だったかと分からなくなってしまう、そのジレンマはすごく大きい。（荒井）

5. コーディネーター推進の方向性

(1) 演劇や表現活動をとおして生きにくさと向き合う

生きづらさを抱えた人たちが悩んでいることと、演劇や表現活動における葛藤には共通するものがある、という荒井さんの指摘は、犀の角やのきしたが地域や市民と向き合う際の基本的な考え方や姿勢を示している。

インタビューでは、アートと障がい者福祉に親和性がある、評価に左右されない子どもたちの自由な表現にとって映画や演劇などが重要である、という指摘もあったが、そうした視点からアートや表現活動の価値を捉え直すことが重要だと考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

□ 表現活動と生きにくさに共通するベクトル

- 生きづらさを抱えている人が何とかならないかと思っていることと、表現者が何か新しい表現ができないかと思って葛藤していることは、実は同じベクトルではないかと思う。実際、やどかりハウスに泊まった子が、別役実の戯曲を読むワークショップを受けて、別役さんの言葉に感動している。（荒井）
- コロナで劇場でイベントができなかった時に最初に犀の角に来たのはアーティストだった。ギターを持って「ここで歌わせてもらってもいいか」とやってきて、営業はしていなかったが窓から商店街を通る人に見てもらった。2020年の4月ぐらいから「一坪半劇場」と名付けてやっているが、やはり、最初に何かを始めるのはアーティストのような敏感な人たちだ。（荒井）

□ アートと福祉の親和性

- 若い人が就職できないから死ぬしかないと思うなど、社会の中に自分が生きる隙間を感じられない人が増えている。でも、オープンマイクで自分なりの表現をすると、自分の内側を表現する場所が生まれて、まだ生きていけるかもしれないと思える機会になる。そういう点では、アートと福祉はすごく親和性が高い。（元島）
- アートという先入観ではなく、取りあえずトライしてみよう、話し掛けてみようといった積み重ねを楽しんでいて、犀の角という空間にいる人たちがつくっている空気や視点がすごくフラット。そこには、自分たち

が普段の活動で悩んでいる「障がい」がある人への支援が前提になってしまう関係を変えていくようなヒントがある。（武捨）

☐ 評価から離れた子どもたちの自由な表現

- 映画の見方には正解がない。自分が感じたものがすべてで、他者から評価されないところが大事。その考え方で「うえだこどもシネマクラブ」は運営している。今の子どもたちは作文でも人に評価されることを意識して、自由に表現することがなさ過ぎる。映画や演劇は子どもたちにそうした自由な表現の機会を与えてくれる。（直井）

(2) 共に悩み、次のアクションにつなげる

のきしたのメンバーから聞かれた「皆で考えて共有する」「支援する側とされる側の区別がない」「余白や隙間が大切」「決まり事のないところから何かが生まれる」といった意見は、コーディネーターの活動を考えるうえで、いずれも重要なポイントだと考えられる。

また、文化芸術と地域や市民をつなぐのがコーディネーターの役割だと言われるが、ただつなぐのではなく、その先に何が起るかを見据えること、次の具体的なアクションにつながるようなつなぎ方をすることも、心がけておきたい。

【インタビュー調査の発言から】

☐ コロナから始まったことを共有、協働していくこと

- コロナを機に始まった具体的な取り組みは、自分たちだけが背負うことではないと思う。劇場から始まったことだが、地域で、皆で考えて、共有して、お互いできないところを支え合っていけばもっと社会は生きやすくなる。（荒井）

☐ 支援する側とされる側の区別がない

- 生きにくさを抱えた人たちは支援の対象と言われるかもしれないが、支援する側とされる側という境目はない気がする。のきしたのメンバーも皆が皆悩んでいて、何をするのが一番いいのだろうと一緒に考えた時に、劇場だから今までの制度では表現できなかったことができたという面がある。（直井）
- 支援する側、される側という関係性をどう壊すかが僕らのテーマ。街でホームレスとして出会うその人と、ここで一緒にご飯を食べて出会うその人では別人である。それを「出会い直し」と呼んでいる。福祉の窓口では出会い直しが難しいが、犀の角には出会い直しの機会がたくさんある感じがする。（元島）
- 荒井さんは障がいのある人をあまり障がいのある人として見ていない。福祉施設をやっていると、支援する、されるという「支援」が前提となり関係ができてしまうが、（福祉施設職員は）それを越えていこう、変えていこうとする人は少ない。（武捨）

☐ 余白や隙間、決まり事がないところから生まれるもの

- 双方向というか、何か余白があって、そこに皆で一緒に描いていく、一緒につくり上げていく、一緒に立ち上げていくという空気がすごくあって、何か広がっていきそうだという感じはある。（清水）
- 犀の角は、家がない人たちや街でうろうろしている少し障がいがある人など、いろいろな人が自然と集まる場所でもあって、それはやはり隙間があるからだと思う。（元島）
- 犀の角は決まり事がなく、オープンマイクで誰かが歌い出したり、トークイベントで何が話されるか、しゃべ

上田街中演劇祭 2020
山田せつ子
『そして なるほど ここにいる』
撮影：安徳希仁



る人もよく分かっていないこともあるが、そこで生まれるものをすごく大事にしている。（元島）

□ 人をつなげることで物事が具体的に動いていく

- のきしたで、誰かが何かをやってみたいと言うと、「では、あの人がいい」と皆が知り合いをどんどん連れてきて、具体的に物事が進んでいく。いろいろな角度で人と人をつなげてパイプになってくれる存在が「のきした」には無数にいる。（伊藤）
- 自分がつながたいからつなげようと思っているわけではなく、思い付いてパッと動いているという感じ。皆コーディネーターという意識はなく、それぞれのことをリスペクトしているので、こういった謎の共同体ができている感じがする。（伊藤）
- つなぐためにつなげているわけではなく、必要なことがあってこうなったらいいのではというアクションに向けてつなげている。コーディネーターには、創造性などがなくと有機的につながっていかないのではないかな。ただくっつけているわけではなく、そこに先があるからくっつけられる。（荒井）

(3) 地域社会が支える共有地としての民間劇場

荒井さんは、1対多ではなく地域の一人ひとりとつながることの重要性、集まって表現できる劇場のような場所の必要性を指摘する。そのうえで、犀の角のような民間の劇場を、現在の経済システムの中で個人の力で支えるのではなく、神社のように地域社会全体で支える共有地のような形で運営できるようにしていきたいと抱負を述べている。

近年の文化政策や文化行政において、文化芸術や劇場やホールなどの文化施設は、公共財産として国や地方公共団体の公的資金によって支えられるべきだと考えられてきた。そのために文化芸術や文化施設は、なぜ地域に必要か、そのことでどんな成果や効果が生まれるか、といったことが政策評価や事業評価として厳しく問われるようになっていく。

それに対し、犀の角やのきしたの活動は、民間の立場から、問題意識を持った市民一人ひとりの知恵や取り組みをとおして、文化芸術からよりよい地域社会を生み出していこうとするチャレンジであり、これからの文化政策や地域政策にとって大きな示唆を秘めているといえよう。

【インタビュー調査の発言から】

□ 1対多ではなく、地域の一人ひとりとつながること

- 街の中で、地域の一人ひとりとつながっていくことが、大きかった。1対多ではなく、1対1で関係性をつくって初めて劇場に来てくれる感覚があった。それは今やっていることでも変わらない。（荒井）

□ 集まる場、表現する場の必要性

- 今のコロナ禍で、街で生きる人にとっては、集まって話すことも必要。その意味で具体的に人が集まって、かつ、表現することができる劇場のような場所が必要だということを、痛感している。（荒井）

□ 民間劇場を共有地として支える仕組み

- 民間主導の方が街との信頼関係・関係性を蓄積しやすい。民間と協働していくことで民間に経験もノウハウも残っていくと役所的にはプラスになる。（清水）
- もっと違う場の在り方があるのではないかと考えている。誰か一人が負担して犀の角のような場所を維持するのではなく、皆の共有地的な発想で、皆で守っていく場所にしていくべきではないか。（荒井）

-
- ただ、そういう場所の必要性は誰かが言語にして実践で示さないと理解されない。この5年間でそれがある程度示せたと思う。それをいかに共有して、個人の負担ではなく、社会全体に広げて、多くの人と共有していけるかが課題だ。（荒井）
 - 数年先には、神社のように地域の人が必要なものだと思って皆で掃除したり、管理したり、お金を出し合って直したりするという感覚で劇場を地域社会が支えていく仕組みに変えていきたい。資本主義の経済のサイクルだけではないところで、劇場なり、場所というものが回るトライをしたい。（荒井）
 - 神社にある歌舞伎舞台や神楽殿は元々が皆の共有財産で、皆が大切にしているが、管理している人は高齢化している。そこを僕らのような人間やもっと若い人たちが維持する代わりに、現代劇やダンスなどの公演を行うのはどうかと考えている。（荒井）

事例 5

支援と提案で文化政策を転換し、地域の未来へ投資する

調査対象

【コーディネーター】

野村政之（長野県県民文化部文化政策課 文化振興コーディネーター）

【関係者】

池上安雄（長野県県民文化部文化政策課 課長）、白澤千恵子（一般財団法人長野県文化振興事業団事務局 次長）、根岸寛（長野県県民文化部文化政策課芸術文化係 係長）、藤澤智徳（一般財団法人長野県文化振興事業団芸術文化推進室 主事）

事例調査から見てきたポイント

◎ 支援から提案につなげる立ち位置とコミュニケーションの促進

- 周りの人たちを支援するだけでなく、将来の姿を思い描き提案する。そのために、協働・連携のきっかけとなるコミュニケーションができる立ち位置を見つけ、そこに自分を置く。
- 課題は、アーティスト側にも行政側にもある。コーディネーターはそこに気づき、互いの言語に翻訳して間を取り持っていく。

◎ 「つくる」という文化芸術のコアを大事にした市民とつくり手の双方へ寄り添う支援

- 芸術やクリエイションという中核を大事にしたうえで、中をつなぎ外に発信する。創作活動と支援活動の両方の現場に携わり、バランスを取りながら全体を進める。
- 芸術そのものの力を養う場がなければ、横につなぐ力を発揮することはできない。まず、芸術自体への支援、投資を整えることがコーディネーター活動を推進する前提となる。

◎ 人口減少社会へのまなざしを持ち、小さな文化的コモンズが多数できることを意図する

- 人口減少社会において、コミュニティの協働は欠かせない。その際、人のやる気をどのように喚起していくかがカギとなる。文化政策はその協働を試みるシミュレーションの場である。
- 市民に寄り添い、つくり手と市民が交流し、共に成長するような支援のあり方を考えるべき。その際、地域に小さな単位で文化的コモンズが形成されていくことをイメージすることが肝要である。

◎ コーディネーターの立ち位置の確保、職能の一般化と人材育成、働き方は今後の課題

- コーディネーターには、むしろ組織と離れた立ち位置も確保することで、多様な主体に働きかけていくという機能が求められる。
- そのためには、アーツカウンシルなど所属する組織の外での活動が担保できるような自由度のある雇用形態を考えておくことも必要。

◎ 地域のクオリティ・オブ・ライフ向上に寄与する文化政策への転換

- 文化政策には、従来の経済システムとは別の角度から、地域を暮らしたくなる日常のある場所へと変えて



ザワメキアート 2021 入口

*1：演劇、音楽、プロデュース、美術の4分野の第一人者4名を長野県芸術監督として招聘。専門家としての目利きによる「地域の宝の掘り起こし、磨き上げ、発信・ブランド化」に取り組むとともに、先駆的で波及効果のある文化プログラムの企画・運営を県民や地域との協働により実施。(2016～2021年度事業)

いく可能性がある。

- 結果が出やすい事業への「消費的」な予算配分から、全体を俯瞰した上で新たな文化政策への予算編成の転換が、地域の未来への投資につながる。

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

野村さんは、長野県庁で文化振興コーディネーター（県民文化部文化政策課）として働いている。会計年度任用職員で、月14日勤務である。担当業務は事務分担表では以下の2点だが、本人に整理してもらった実際の内容は仕事リストのとおりである。(2021年10月調査時)。

特徴的なのは、野村さん自身の判断で必要と思われることは関係者と協議し、「仕事」と捉えて積極的に取り組んでいくことだ。担当業務表は仕事の枠組みではなく、野村さんが仕事を通じて実現したいことへの足がかりとして捉えていることが特筆すべき点だろう。

□ 野村さんの担当業務（県文化政策課芸術文化系の事務分担表）

- アーツカウンシルの構築（総括）に関すること
- 芸術監督団に関すること

□ 野村さんの仕事リスト

- 長野県芸術監督団事業(*1)の支援とコーディネート：特に、NAGANO ORGANIC AIR、トランクシアタープロジェクトの企画調整
- 「演劇による学び」推進事業。実施内容の企画コーディネートを全般的に対応。
- 長野県文化芸術情報発信サイト「CULTURE.NAGANO」の立ち上げ(2019)、以来、全般的な運営方針、特集記事の編成などについて担当職員の相談に応える。
- ザワメキアート展実施、長野県障害者芸術文化センター設置に向けた担当職員（障がい者支援課）の相談に応える。
- 北アルプス国際芸術祭、連絡係程度。（大町市役所担当にとっての県担当者以外の話し相手）
- （一財）長野県文化振興事業団芸術文化推進室、事務局の相談相手（随時）
- 2021年度の長野県立美術館開館に係るイベント関連の企画（霧の彫刻×田中泯、いいだ人形劇センター『人魚姫』、風テラス LIVE 佐藤健作和太鼓）
- 2021年度長野県文化芸術活動推進支援事業（助成事業）。相談対応、採択事業者への伴走支援。
- 2020年度「頑張るアーティスト応援事業」。ニーズ調査、相談対応、制度運営に関する担当職員の支援。
- その他、アーツカウンシル実現のためのさまざまな調整

【インタビュー調査の発言から】

- 芸術監督団事業のコーディネートというサポートをして、上手に着地させて、アーツカウンシルにつなげるというのが県の考え。（野村）
- 着任直後は、監督団事業を担当する文化振興事業団（以下、事業団）の芸術文化推進室の体制が必ずしも十分ではなかったもので、どうすれば芸術監督団事業を安定的にやれるのか、事業団の中で芸術監督団事業やほかの

*2：劇作家・演出家・青年団主宰。芸術文化観光専門職大学学長。江原河畔劇場 芸術総監督。こまばアゴラ劇場芸術総監督。豊岡演劇祭フェスティバル・ディレクター。

*3：この段落の固有名詞はいずれも、劇作家・演出家等で括弧内は主宰する劇団の名称（当時）

長野県立美術館
中谷芙二子《霧の彫刻》+田中泯「場踊り」
写真：平林岳志



ソフト事業も含めてどうすればもう少しきちん運営できるだろうかと考えた。誰も楽しそうにやっていないし、この仕事から何かが生み出されると感じられる場面が少なかった。マネジメント部門をやる人がほとんどおらず、そういう観点を持った人が財団の中には少なかった。（野村）

- 財団が運営する3館の職員にヒアリングさせてもらい、自分なりに事業団の改善にコミットしていこうという振る舞いはしてきたし、そのことで僕を知ってもらえるようになったという面もあると思う。（野村）
- 事業団に提案をしたら、組織内に事業団をよくしていこうというグループができた。計画だっけではないがそういうことが起きてはいて、今後役に立ってくるかもしれない。だから、業務分担の2行（アーツカウンシルの立ち上げに関することと、芸術監督団事業に関すること）は足がかりだと考えている。（野村）
- 野村さんには芸術監督団事業（県から事業団への負担金で実施）へアドバイスをもらっている。内部ではイノベーションが起きにくいので、外からの刺激として貴重。施設の現場を回ってくださり、意見を言ってもらったこともあり、参考としている。（白澤）
- 互いがウィンウィンになれるようなプロジェクトづくりが勉強になる。（藤澤）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

(1) リサーチ視点で働く～公立文化施設、青年団時代

野村さんは大学時代、演劇サークルに所属し、役者やスタッフなど演劇にまつわるさまざまな経験を積んだ。その頃から、年上に自分が良いと思う創り手が多かったので、自らそこに名を連ねることよりも、その人たちをサポートして何者かにしていきたいという気持ちが芽生える。

大学のサークルから発展した劇団で活動するが、うまくいかなくなり、長野県内の文化ホールを指定管理者として運営する民間企業に就職する。その頃、長野県内では芸術監督やプロデューサーを擁する専門劇場としてまつもと市民芸術館が建設された。一方、野村さんは20世紀後半にできた公共ホールは、多目的ホールと言われても、魅力的な空間もあり、いろいろな人に間口が開けていることに可能性を感じていたという。そして、地域の文化拠点としては、創造する現場があることが大事なのではないかと感じ、今一度創作の現場に携わろうと考え、平田オリザ（*2）さんが主宰するこまばアゴラ劇場・青年団の制作部に入る。

青年団に入った理由は、助成金等を活用して、創り手側からはお金を取らないような劇場運営をしていたことや、平田さんの著書を読み、その考え方や方法論から学ぼうと考えたこと、また劇場の運営とクリエイションの両方に携わりたかったということなどである。

青年団では、柴幸男（ままごと）（*3）さんや、岩井秀人（ハイバイ）さん、松井周（サンプル）さん、多田淳之介（東京デスロック）さんなどと共に活動したが、その時も、この人たちをサポートしていきたいというモチベーションがあった。また、2009年には柴さん、篠田千明（快快）さん、中屋敷法仁（柿喰う客）さんらと連続上演を企画し統括プロデューサーを務めた。その時にも彼女彼らの活動をサポートする関係性がしっくりきたという。

必ずしも活動のすべてが報酬のある仕事ではなかったが、無報酬の部分も自分のための活動として重視し、組織で報酬を得て働くことと両輪で仕事を進めていく構造をつくった。これは、野村さんが現在も心がけている働き方のスタンスだ。自分のための活動では、自身の関心を優先するが、それをどのように組織での仕事に応用するかも考える。また、現場の金銭面での厳しい感覚も把握し、それを組織と共有していくこともあるというが、それは演劇を中心とした現場感覚に根ざした野村さんならではのコーディネーターの成果に結びつい

*4：舞台芸術制作の現場で、戯曲に関するリサーチなどに基
づき、演出家やディレクターを補佐する役職。

ていると考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

□ 公立文化施設時代

- 自分としては、公共ホールは建ててしまったのだから、きちんと上手に使おうという感じだ。（野村）
- 20世紀後半の市民文化会館としての公共ホールは、多目的と言われても、魅力的な空間はあるし、使い方で何とかなるといった。何よりいいと思ったのは、公共ホールはいろいろな人が来るし、いろいろな人に間口を開けている。芸術専門のところにはない、誰が来てもいいという空気があって、それはそれでいいと思った。（野村）
- 当時僕は20代後半だったが、公共ホールの現場には40代半ばぐらいの上司がいて、会社が指定管理の企画書に書いてしまったことをどう実現するかということにあくせくしていた。その方は元の職場が商業劇場の演劇部で、そのときのネットワークを使って何とか事業を回していたので、困ったときに頼める関係性がないと、公共ホールのプロデューサーにはなれないと思った。（野村）

□ 青年団時代

- もう一回勉強し直し、自分が公共ホールのプログラムを組めるような人間関係を作ろうということで、青年団に入ることにした。劇場の運営と平田オリザさんの作品の制作のほかに、僕が青年団に入った当時は、例えば柴幸男（ままごと）さん、岩井秀人（ハイバイ）さん、松井周（サンプル）さん、多田淳之介（東京デスロック）さんという4人の同世代の演出家もいて、彼らをサポートして成果を出してもらいたいと思った。その人たちと一緒にやるという形で、オリザさんにしつらえられた仕事以外のことをもう片足でやっていた。これも結構大事なことだったと思う。（野村）
- こまばアゴラ劇場のときも、青年団から給料をもらうものは「お仕事」と言っていて、残りが自分のためのトライというか、自分のための仕事みたいな感じで、今までその二つの構造で来ている。片足で自分のための実験をやりながら、もう片足で給料をもらうお仕事をやっているというか。（野村）

(2) ドラマトゥルク（*4）として

野村さんは、当初ドラマトゥルクがどんな仕事なのかよくわからなかったという。わからないなりに仕事を設計していきながら、分業化した現場できちんとした議論がなされ、それぞれの力を結集できるよう、中をつなぎ外に発信しつつコアの所（芸術やクリエイション）を大事にするという型を見つける。それがコーディネーターの仕事の中身とも通じるというのが野村さんの実感である。

【インタビュー調査の発言から】

- ドラマトゥルクについては、サポートする相手がだんだん広がってきて、ドラマトゥルクも仕事になってしまったとよく言っている。座組の中でつなぎ役になったり、提案したり、ちょっと足りないところで実際に動いたりすることを、クレジットがなくてもドラマトゥルクの立場としてやってきた。（野村）
- 最初にドラマトゥルクとして表記された公演のとき、創作に関係ない人間はけいこ場にすぐ居づらいし、いるのはあまりよくないと思っていたから、とにかく全員にインタビューして、ブログに上げるというのを自分の企画、役割としてひねり出した。（野村）
- あの人は広報か何かで、インタビューをしている人だということを座組の人には印象づけた。それを手がかりに個人とかかわっていきながら、作品はどういうものか、どうお客さんに見せていけばいいのかと、ブログ制

*5：「創造型劇場の芸術監督・プロデューサーのための基礎講座」2010年度。この講座が元になって ON-PAM（舞台芸術制作者オープンネットワーク）が立ち上がった。

協働で開催した。テーマは「未来」「市民」「地域」。全国のアートプロジェクトがネットワークを育みながら、ジャンルを超えた多彩な企画を実施。2002～2016年。

*6：アサヒビール株式会社のメセナ活動の拠点となっていたアートスペース。運営はさまざまなジャンルの専門家によって構成される、アサヒ・アートスクエア運営委員会が担った。2016年閉館。

*8：アーツカウンシル東京が、芸術文化活動の調査を通して芸術文化活動の振興や支援のあり方について見識を持った人材を育成することを目的に若手人材を中心に委嘱したもので、アーツカウンシル東京の助成対象事業等を調査研究し、レポートを作成・提出した。

*7：全国の市民グループやアート NPO、アサヒビールなどが

作を通して考えて、演出家にはそういう中で僕が考えたことを提案した。これが一番ミニマムな形だが、そうやって自分の仕事をつくっていった。（野村）

- ドラマトゥルクといっても文芸的なことはそれほどやらない。スタッフや役者がそれぞれの立場で物を考えていて、議論で話が通じ合わないときなどに、通じ合うためにポイントになるキーワードを考えて出してあげれば、議論が成立することがわかった。その能力、経験を生かして、演出家がやりたいことをきちんと実現するために人々の力を結集する。これを変換していったら、全部コーディネーター的な仕事の中身になっていくと思う。中をつないで、外に発信して、一番のコアのところを大事にするという、人間関係の網の中で何を引っ張るかという役割だ。（野村）

(3) 市民主導のアートプロジェクト、沖縄アーツカウンシルでの伴走型支援、つくることの重要性

青年団に在籍して演劇作品の制作やドラマトゥルクとして活動する傍ら、セゾン文化財団と共催した講座（*5）や、世田谷パブリックシアターの依頼で、公立文化施設のコミュニティ・プログラムを研究する講座を企画し、そうした経験がコーディネーターとして活動する素地となっていた。2011年にはアサヒ・アートスクエア（*6）の運営委員を務め、演劇以外の多様なジャンルの専門家と一つの空間の運営についての意見交換を経験したことや、当時アサヒビールが行っていたアサヒ・アート・フェスティバル（*7）で対話的でフラットな議論の場、ネットワーク型のカルチャーを経験したことが、大きな糧になったという。

その後2012年に設立されたアーツカウンシル東京においては、アーツアカデミー調査員（*8）としてリサーチに携わった。これらの経験を経て、いずれプロデューサーとして働きたいと考えている公共ホールだけでは、自分が実現したい文化と社会の関わりはできないのではないかと考えるようになった。

その後プログラムオフィサーを務めた沖縄アーツカウンシルでは、これまで培ってきたドラマトゥルクとしての経験や市民主導のアートプロジェクトの知見を踏まえ、支援先とのコミュニケーションを重視し、相談に乗りながら相手の視点にたって支援策をコーディネートした。今、アーツカウンシルと言えば「伴走型支援」という言葉がセットで言われるようになったが、これは沖縄アーツカウンシルの功績だといえる。また、沖縄アーツカウンシルでは、それまで自発的に行っていたリサーチなどの活動で得たスキルや経験が、報酬を得て行う仕事の基盤となっていた。

一方で、文化芸術基本法の改正以来、さまざまな領域をつないでいくという文化芸術の役割の方が注目されがちだが、そもそもの芸術の力を養う場がなければ、横につながり力も発揮しようがない。つまり芸術自体への支援が先になれば、アーツカウンシルもコーディネーターの考え方も土台から崩れてしまうという趣旨の発言もあった。

【インタビュー調査の発言から】

□ 市民主導アートプロジェクトへの視座

- 水戸芸術館の「カフェ・イン・水戸（*9：次ページ記載）」などのことを世田谷パブリックシアターの講座でしゃべってもらったときに、アウトリーチとは別に、地域の人が主体になるというやり方のプロジェクトもあることを知った。市民が担い手になって優れたクオリティの文化芸術活動をどう実現し、継続していくかということに着目していた。（野村）
- アサヒ・アート・フェスティバルなど市民が主体となる文化芸術活動という営みがあって、そこでフラットに対話、議論して、ネットワーク型で取り組んでいくあり方を知ったのは大きかった。（野村）



新野の盆踊を教わる
NAGANO ORGANIC AIR

*9：水戸芸術館を中心とした回遊性創出を目的に、中心市街地のさまざまな場所への作品設置や、市民参加型プロジェクトを実施。カフェ=C・A・F・Eは、「すべての人にコミュニケーション可能な行動」という意味の“Communicable Action for Everybody”の頭文字をつなげたもの。

- 自分がマネジメントというかプロデューサー的な企画制作の人間だからかもしれないが、サポートするのが若手アーティストでも市民でも同じだと感じた。（野村）

□ 沖縄アーツカウンシルでの伴走型支援

- 文化団体側が自立して自分たちで回していけるように支援したというのは、沖縄アーツカウンシルのコンセプトが文化の産業化なので、支援先が法人化して収支を取れるようにしていき、自走化してもらうというストーリーだった。ただ、僕も、その後入ってきた樋口貞幸さん（プログラムオフィサー、元・アートNPO リンク事務局長）もそうは思っていない。自走化という言葉はぎりぎり受け入れるけれども、自走にもいろいろな形があるという感じ。ただマネジメントは大事だからそこはサポートしていかなければいけない。（野村）
- 事業者目線のパートナーシップで伴走していくというやり方を一番明確にしたのは樋口さんだし、僕は樋口さんが入ってくるちょっと前からそういう感じでサポートし始めていた。当初の沖縄アーツカウンシルは、支援先に発破をかけて努力を促す感じだったが、それを続けていたら多分よそよそしい組織になったと思う。（野村）

□ クリエーションの支援に対する視座

- クリエーションの実績をつくって、それを将来的にアーツカウンシルに統合していきたい気持ちはある。長野県のアーツカウンシルでも、どのような作品であろうと作品のクリエイションを中心に置くこと、そういうものは何らかの形でやらなければいけないというか、それが芸術の力のコア。（野村）

3. 野村さんのコーディネートスタイルと成果

◎ 公金を適切に、有効に、相応しい結果を残すように使うことを意識

野村さんの仕事に通底する考え方は、次の2つに集約される。(1) 税金をいかに適切かつ有効に文化芸術へ分配し、ふさわしい結果を残せるか、(2) サポート役として、頼まれなくても周りに居る人たちの将来の姿を思い描き、提案してみる、というものだ。そのコツは、協働・連携のきっかけとなるようなコミュニケーションができそうな立ち位置を見つけ、そこに自分を置くということだという。

【インタビュー調査の発言から】

- どうすれば税金を文化芸術に適切に、有効に、ふさわしい結果を残すように使えるのかということは、単純にアーティストだけの問題ではなく、役所の仕組みの問題でもある。（野村）
- 本人が思っているかどうかは関係なく、その人がこうなったほうがいいのではないかとことを提案してみ、本人がやると言ったら一緒に前に進む。（野村）
- いろいろな役割や考え方があるから、それがうまく協働、連携できるように働きかけ、コミュニケーションをするために、自分も決まり切った役割だけを担うのではなくて、ここに隙間があると思ったらそれを埋めて、埋めてくれたらみんなが助かる、あるいは何かがちょっと前に進む部分を見せて、仲間に入れてもらって、ギブ・アンド・テークが何となく成立していく。（野村）

◎ 成果

コロナ禍において、野村さんは県内のアーティストと連絡を取り、市町村をくまなく訪ね現場の声に耳を傾けた。その取り組みで集めた現場の声を行政へ届けたことは、県によるアーティスト支援につながった。また、積極的に市民にコミットしていくことで、県内で自らアートプロジェクトを進めるような担い手が明確になっ

たという。

また、行政職員からは、例えば議員から「なぜあそびに税金を使うのか」というような質問が出て、文化政策がもたらす成果や効果について言語化できているため、大きな方向性について話すことができるようになったという発言もあった。これは、行政職員がコーディネーターとのコミュニケーションを繰り返して獲得したことである。また、コーディネーターの働き方自体が、文化芸術が社会に果たす役割を体現しているという発言もあった。さらに、そのフットワークの軽さから、行政の他部署からの相談にも乗るようになってきたという。

一方、事業団の現場においても大きな視点に立った取り組みが見られるようになり、未来への希望を感じるようになったという。事業評価についても入場者数など単純な判断基準ではなく、将来を見据えた考え方ができるようになったという発言もあり、コーディネーターの存在による好影響が広がっていることが感じられた。

【インタビュー調査の発言から】

□ 文化政策の認識を更新

- コロナ対策補正予算としてアーティスト支援を行った。（野村さん経由の）現場の声が行政に届き、始まった事業である。（根岸）
- 自分たちが背負ってアートプロジェクトを進めてくれるような担い手が県内で明確になってきた。その理由の一つに、僕が公私にわたって長野県内のやる気のある人たちにコミットしてきたことがあるはずで、それがなかったら、その人たちが県の事業を担ってくれることは多分なかったと思う。（野村）
- （アーツカウンシルにおける）支援の方向性を寄り添い型にすることについては定まってきている。それを起点に、農業や観光、移住、障がい者などの分野につながっていく可能性が開けている。そういう大きい方向性を語れる。それが行政側の人間としても腑に落ちる。（池上）
- 文化政策は、県が今やらないといけないいろいろな課題にコミットしてくるだろうと、具体的に話している。（文化政策は）実学で命にかかわっているし、形而上の美を言っているのではないのだということを、県議会も含めて理解してもらえるように取り組んでいかないといけないと思っている。（野村）
- 野村さんの庁内での動きを見るだけでも、文化芸術の社会におけるハブ的役割が理解できる。（根岸）
- 別の課の職員のサポートまでやっている。事業者を支援するだけでなく、県の職員もサポートしているという感覚。（野村）

□ 事業団への好影響

- 野村さんには、芸術監督団事業（県から事業団への負担金で実施）へアドバイスをもらっている。内部ではイノベーションが起きにくいので、外からの刺激として貴重。施設の現場を回ってくださり、意見を言ってもらったこともあり、参考としている。（白澤）（再掲）
- 文化芸術を担うのは、自分たち館の人間だけでなく、外の人とつながっていくことが大事だと認識している。（白澤）
- 事業団の「芸術文化推進室」はアーツカウンシルへの発展を見込んで作られた。（池上）
- 野村さんが入ったことによって、未来への種（可能性）を広げるようなことが起こったと感じる。（事業団でアーツカウンシル事業を担う予定の）推進室に異動して働きたいと思うプロパー職員が出てきたことは収穫。（白澤）

-
- 互いがウィンウィンになれるようなプロジェクトづくりが勉強になる。（藤澤）（再掲）
 - これまでは入場者数など、目に見える指標で判断された。今後、消費型の活動から投資型の事業になる可能性がある。（白澤）

4. 問題点・課題

(1) コーディネーターをどの組織に置くか

長野県では、新たに設置するアーツカウンシルについて、財団の一部署とすることを検討している。その場合、これまで野村さんが県庁の専門職として、いわば外部から財団へアドバイスしてきたことで功を奏してきたことが、立場が内部化することによって難しくなるのではないかと、また、その職能をどう一般化できるのかという懸念も指摘された。

【インタビュー調査の発言から】

- アーツカウンシルが事業団の意思決定プロセスに組み込まれてしまうと、自由な発想などが手続きに囚われて阻害されないかという不安を持っている。どのように自由度を担保するか。（白澤）
- アーツカウンシルは民間の軽やかな活動を下支えする存在として大切。一方で、野村さんが事業団へ入ることによって、これまで、「外の人からの意見」ということで通っていた部分ができなくなることが懸念。（藤澤）
- 野村さんのような方がいると現場サイドはやりやすいが、職能を一般化できるのだろうか考える。（藤澤）

(2) 人口減少社会（＝税収減の未来）とどう向き合うか

野村さんは、さらに喫緊の課題として、今後の人口減少に伴い税収が減り、今後十分な施策が打てなくなることであると指摘する。そのためには、お金の使い方をよく考え、地域の人たちに対して、やる気をどのように喚起していくかがカギである。その際コミュニティの構成員がどのように協働していくのかという視点が重要であり、文化政策はその協働を試みるシミュレーションともなりうる。

【インタビュー調査の発言から】

- 一番の課題は今後税収が増えていかないという見通しとどう向き合っていくかだと思っている。（野村）
- 人が動きたくなくなる、やる気が出るように課題を設定していくことをよく考えないといけない。お金で全部解決できないので、何を捨てて何を取るか、あるいは何をやったらどういう効果が上がるのかということまで考える。（野村）
- 誰にどういうことを頼むか、誰とチームを組んで、何を目指していくのかというセッティングがすごく重要になるし、そのときに、人が力を発揮するかどうかという見極め力はとても重要。（野村）
- 行政はコーディネーター、あるいは行政職員をどう生かして働けるようにするかということを考えていかないと、コミュニティ全体が死んでしまう。文化政策（あるいは、まちづくり、地域づくり）はそのシミュレーションだと僕は思っている。僕は全部演劇だと思っていて、演劇はすべてシミュレーションなので、人がやりたいと思って動いてくれるかどうかというのも演劇だ。いいふうにセリフを言ってくれるかどうかは、そこに演出家が導けるかどうかだと思う。（野村）
- コミュニティでも何でもいいが、共同作業で実現されるべきもののシミュレーションを文化政策で試みることで、僕はそれを演劇だと思っている。舞台の上で行われることだけが演劇だとは、最初から思っていない。（野村）

*10: 地域創造による調査研究報告書で提案された言葉。地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みを意味する。
「災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究—文化的コモンズの形成に向けて—」、2012-13 年度

*12: 国内外から演劇やダンス、映像などさまざまなジャンルで活躍するアーティストやカンパニーを招聘し、長野県内の公立文化施設や民間レジデンス施設、空き家や貸別荘等を用いて滞在制作を行うアーティスト・イン・レジデンス事業。

*11: クオリティ・オブ・ライフ (Quality of Life) の略語。一般的に「生活の質」と訳されるが、自己実現や生きがいなどを含めた満足感や幸福感をとらえる概念。

5. コーディネーター推進の方向性

今後、長野県においてアーツカウンシルが設置され、コーディネーター的な活動が推進される予定である。この事例調査から、その際に重視すべきことは、(1) 寄り添い型支援、(2) 小さな文化的コモンズ (*10) の形成、(3) アーツカウンシルへのコーディネーター職の配置、の3点だと考えられる。これらの観点を総合すると、アーツカウンシルの目標として市民の QOL (*11) 向上を明確に打ち出すことが地域の価値向上に寄与するポイントとして浮かび上がってくる。

(1) 寄り添い型の支援

アートと市民をつなぐという場合、市民側を受け手とする構造になりがちだが、地域や市民側からつくり手（アート側）へと渡されることにも意識を置き、双方が交流や協働により成長することを企図する必要があるだろう。

そうした視点に立つと、コーディネーターは市民とつくり手の双方に寄り添い、両者の関係性を紡いでいく役割を担うことが求められる。野村さんはその関係性を、支援先組織の会議に呼ばれるようなものだと喩える。支援先の組織から、何かを隠されるような関係性では支援が成立しているとは言えない。

また、アーティスト支援（コロナ対策補正）の公募を通して見えてきた地域のクリエイターもいた。支援先を公募することは、コーディネーターにとっても新たなつながりを見いだす糸口になる。単なる審査、採択、助成金の交付という関係ではなく、公募はコミュニケーションの始まるきっかけとして捉えることも、寄り添い型支援の手法と言えよう。

【インタビュー調査の発言から】

- 県内の支援の対象が見えてきている。その人たちにきちんとしたリソースを提供して、後押ししてあげれば、地域が変わってくるはず。そういう思いでやっている人たちの勇気づけることは既にできていると思っている。（野村）
- アウトリーチとは別に、地域の人々が主体になるというやり方のプロジェクトもある（野村）
- 現場の生の感覚がわかる方が、行政に入ってもらうことは大きい。（池上）
- （支援先の）組織自体の総会に呼ばれて出席するぐらいのことだって出てくるし、隠れて開催されて知らされない、呼ばれないみたいな関係性だと、支援が成立していないとも言えるのではないかという仮説を持っている。（野村）
- 長野県内に住んで、外で稼いでいる文化・アートの関係者が結構いる。実は、そういう人たちも含めて県が支援すると言ったら支援を求めてきたこともあって、コロナが起因してそれが見えてきたということもある。（野村）

(2) 小さな文化的コモンズの形成

野村さんは、「NAGANO ORGANIC AIR（長野有機栽培アーティスト・イン・レジデンス）」(*12) 事業で県内を回る中で、具体的に文化的コモンズが形成されていくとよいと思えるエリアがイメージできたという。

文化的コモンズが形成する地域のつながりは、地域に何か危機が起きたときに力を発揮することもある。この文化的コモンズは小さく組織されていくイメージで、長野県内に10～20個あるといいのではないかと、というのが野村さんの考えである。文化でつながっていく文化的コモンズは、旧来の地域コミュニティには属し



トビチ美術館（辰野町）
令和 3 年度長野県文化芸術活動
推進支援事業

づらいと考えられているような人たちをも包摂していける可能性がある。このコモンズを通じて地域の絆がしなやかに強くなることを目指すのもコーディネーター推進の目標とするところだろう。

【インタビュー調査の発言から】

- 県内に10個から20個ぐらいの文化的コモンズが形成されるというイメージでコーディネートができていくといいと思っている。文化的コモンズ同士は学び合うが、それぞれが一緒になる必要はなく、県内にいろいろな文化的コモンズという生態系ができるといい。（野村）
- そこに必要な栄養を提供するのが僕の役割で、活動するのは地域にいる人たちだ。（野村）
- 植物園や畑みたいなものだと思っていて、例えば畑で考えたら、畑の中で病気がはやることもある。そうしたときに、その地域では今までどういうことが行われてきたのか、どういう土の状態なのかサポートする側として認識していること。例えば、山の噴火が起きてコミュニティがめちゃくちゃになってしまったときに、どこから再生していこうかという糸口を考える参考になると思う。シンクタンクではないが、そういうことを把握して、政策的に継続していく存在としてアーツカウンシルなり県があるべきではないか。（野村）
- （アーツカウンシルが設立されることで）これからようやく地域をそういった目線で把握し、変えていくことができる。それが5年、10年してようやく一周すると、それぞれの地域でそれまでの取り組みが生かされてきたという蓄積があって、そこから先というかその過程でかもしれないが、地域に何か危機が訪れたときに、力を発揮できるような県の文化政策であってほしいと思っている。（野村）

(3) アーツカウンシルへのコーディネーター職の配置

最近になって、各地の地方公共団体で文化行政を担う新たな専門機関としてアーツカウンシルが設置されている。この事例調査では、アーツカウンシルという組織でこそコーディネーター的な働き方が仕事として成立する可能性が高いことが明らかになった。

コーディネーターの心構えとして野村さんが強調したのは、自分に与えられた仕事をより良い形で実現するために必要なことは「自分で考える」ということである。それを支援先に「提案する」ことにより変化を促していくことが、コーディネーターなど繋ぎ役に求められる姿勢だといえる。

また、調査研究的な活動がコーディネーターの仕事にとって極めて重要だということも、この事例調査で明確になった。野村さんは、そうした活動に無報酬でも取り組んできたが、地域や創り手へのリサーチは地方公共団体の文化行政を推進するうえで不可欠のことと捉えるべきであろう。民間企業が R&D（研究開発）に投資するのと同様、調査研究的な活動にはアーツカウンシルが予算を手当てし、コーディネーターに報酬を支払うべき仕事である。この点も、今後のコーディネーターの業務を推進していくうえで、重要な要件だと考えられる。

ただし、コーディネーターを組織に 100%所属するスタッフとすべきかどうかについては、慎重な判断が求められる。野村さんの場合は、月 14 日勤務の会計年度職員という雇用形態で、県職員を離れた立場で柔軟に動けることがコーディネーターの成果に結びついている側面がある。コーディネーターには、むしろ組織と離れた立ち位置も確保することで、多様な主体に働きかけていくという機能が求められる。そのためには、組織の外での活動が担保できるような自由度のある雇用形態を考えておくことも必要である。いわゆる副業が可能で、かつその土地での活動に支障のない報酬が得られるような職種としてコーディネーターの待遇を考えていくことも留意すべきである。

またコロナ禍で、県内に在住するクリエイターたちは大都市の仕事で生計を立てており、県内にはその力に見合う場がないということが可視化されたという指摘もあった。これは、大都市圏以外の地域に共通の課題かもしれないが、そういう人材と地域の仕事をマッチングしていく、あるいは、地域にクリエイティブな仕事をつくっていくこともアーツカウンシルやコーディネーター役割だと考えられる。そうした取り組みが、ひいては地域の職業を多様にし、地域の持続可能性に寄与していくという視点を持ちたい。

【インタビュー調査の発言から】

□ コーディネーターの心構えと働き方

- 与えられた枠組みではなくて、自分が任された仕事をより良い形で実現するために何が必要なのかを自分で考えて、そのことにある程度の根拠を見いだせれば、独自の判断で提案してもいいと思う。そこから先はその役割を任された担当が進めるかどうか判断することだし、担当がやるべきだと思うかどうかは自分のコミュニケーションの仕方次第だ。（野村）
- 組織の運営次第で、広報の人でも制作の人でも管理の人でも誰でもハブになれると思っている。そういう意味で、組織マネジメントにおいて自分が管理する人材をコーディネーター的な自由度や発想力を持った人として扱っていききたい。（野村）
- アーツカウンシルができることで、文化コーディネーターの重要性が世間的にもっと認識されるように変わるとよい。（根岸）
- コーディネーターを目指す方は、専門性に埋もれずにいろいろな状況と合わせて考えられるようになってほしい。（白澤）
- 100%雇用では自分が持っている企画力、創造性みたいなものを実現する余地を奪われる場面があると考えている。組織が内側の論理でその人を縛ろうとするのであれば、どうしても難しくなってしまう。（野村）

□ クリエイティブな仕事ができる地域の土壌づくり

- 地方への移住を増やしたいのであれば、例えばアーティストと農業は親和性があると思う。ただ、今の時代にどうやってその二つを接続したらうまくアーティストも呼び込めて、休耕地も生かされるのかというようなことは、研究してみないと分からない。そうした試みをやってみるということを後押しするアーツカウンシルであったほうがいいと思うし、そういうネタ（可能性）を考えることもアーツカウンシルの仕事だ。（野村）
- 長野県には外で稼げるだけの仕事力を持ったクリエイターがいるが、長野県で活動しようと思っていない、あるいは県内にその人たちに見合う活動の場がない。そういう人たちが埋もれてしまっているのだから、その人たちが参加したい、加わりたい、力を発揮したいと思う県に変えていくことが必要だ。（野村）

◎ アーツカウンシルの先へ—QOL 向上のための文化政策

文化行政において、アートで地域を活性化するという考え方が定着してきた。しかし、「地域の活性化」がどのような状態を指すのかは必ずしも明確ではない。文化イベントで集客を図り地域経済を潤す、ということではなく、各地の実践例を見ると、ある人がその町に住むということを決断して、そこで何かをやろうという気にさせることが、アートならではの地域の活性化につながるというケースが増えている。野村さんからは、コロナ禍の今こそ、何のために文化芸術と地域や市民を結びつけるのか、それが地域にとってどういう意味があるのかということを今一度問い直す必要があるという指摘があった。

コーディネーターを起点に地域社会の未来を見据えると、文化政策全体の在り方や文化行政の再設計が求め

*13: 肉体的な面だけではなく、精神的、社会的にも満たされた状態にあること

られていることが浮かび上がってくる。目先の結果が出やすい文化事業への「消費的」な予算配分から、もっと上流の仕組を整える新たな文化政策への転換が、地域の未来への投資につながると考えられる。

また、文化政策の目標が住民の QOL 向上だとすると、特に地方都市においては、金銭を介さずにウェルビーイング(*13)や QOL を向上させようという取り組みが全国に広がりつつあることも視野に入れるべきだと考えられる。野村さんの発言からは、将来、文化政策の手段や成果が、富の再配分という従来の経済システムが果たしてきた役割を一部補完する可能性があるということが読み取れる。そのためには文化政策を、経済活動とは別の切り口から地域の日常生活を充実させる手段として考え直していく、といった視点も必要となってくるだろう。

【インタビュー調査の発言から】

□ 文化政策による QOL 向上

- 地域において、人がやる気を持てることを仕事にして食べていけるという環境をつくるためには、長野県の場合は、栽培みたいな考え方がとてもキーになると僕は思っている。野菜だって、育たない環境では育たない。(野村)
- 温泉や木の実、キノコ、自分の庭で作った野菜はお金を経由せずにわれわれが味わえる、わざわざ経済活動に乗せる必要がない価値だ。そういうものがあるということを自分の頭の中に置きつつ、それと人間との関係、文化と人間との関係を考えたい。(野村)
- お金を介さなくても実現されるウェルビーイングというか、クオリティ・オブ・ライフがあると思っていて、そこをきちんと実現して、その試みを形にして、だから文化にお金を使わないとだめだというロジックにもう一回差し戻したい。(野村)

□ 活性化から日常化へ、文化政策の更新を

- これまでの文化政策は、アーティストが美術館や劇場の中でやることだけのためにお金を費やしている側面があったと思う。(野村)
- 2000年代の文化行政というか、国の文化政策は結果的にうまくいかなかった。巻き直さなければいけない。アーツカウンシルなりを通して、地域と文化芸術のかかわりの中で新しい価値が生まれてくるという実例をまず形としてつくって、そのコアにあるのはアートだということを見せないと、あるべき論を言っているだけではだめだと思う。(野村)

事例 6

公民館を市民自治のプラットフォームとして捉え直す

調査対象

【コーディネーター】

宮城潤（那覇市若狭公民館 館長／NPO 法人地域サポートわかさ 理事）

【関係者】

麻生佐矢香（沖縄県文化振興会／沖縄アーツカウンシル プログラムオフィサー）、上原正弘・上原玲子（琉球フィルハーモニック）、オジャ ラックスマン（沖縄ネパール友好協会）、大仲るみ子（多文化ネットワーク fu ふ！沖縄）、久手堅美咲姫（地球ハートクラブ、アートな部活動参加者）、平良亜弥（アーティスト、アートな部活動ポストポスト部顧問・パーラー公民館スタッフ）、玉寄文代（子ども食堂ほのぼのカフェ・曙小学校区まちづくり協議会）、渡嘉敷洋美（那覇市まちづくり協働推進課）、野原巴（那覇市文化協会）、藤井光（映像作家・アーティスト）、宮平貴子（こども国際映画祭 in 沖縄）、屋宜貢（大名児童館）

事例調査から見てきたポイント

◎ 「そもそも」を問い直す必要性

- 公立文化施設にはハードと有給のスタッフがいて社会的信用があるというそもそもの利点を地域や住民のために活かしきっているかと問い直す必要がある。
- これまでの事業を漫然と行うのではなく、既存のやり方に一度疑問符を投げかけてみることで、市民の声を聴き、必要とされることを見極めることが求められている。

◎ 「ゆるい」マネジメントが、さまざまな「かかわりしろ」を生む

- まず市民の声に耳を傾けることで、話を聞いてもらえる相手として認識されることが重要である。
- そのためには、コーディネーター側にも「ゆるさ」が必要で、地域と共に悩み、足りない部分は助け合うという姿勢で臨むことが、地域や住民の「かかわりしろ」を生み、文化芸術とのつながりに結びついている。

◎ 市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していく姿勢

- 地域や市民と文化芸術をつなぐために、コーディネーターが市民に提案していくのではなく、市民の聞き役を務めながら、市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していくのが、コーディネーターの基本的な姿勢である。
- そのためには、文化施設を事業やイベント中心の運営とせず、平時の情報提供や相談業務などへとゆるやかに広げ、そこにコーディネーターを配置することが肝要である。

◎ プロセスを共有できるアーティストと協働することで市民自治力を向上させる

- 文化芸術が地域や市民にもたらす力を理解した上で、アーティストには芸術的な成果を求めるのではなく、市民協働のプロセスに関与してもらうことが重要である。



若狭公民館の外観

- そのことで、コーディネーターの可能性が広がり、市民自身が自ら地域の課題と向き合う市民自治の力が地域にもたらされる。

◎ 「あの人だからできる」 属人性を受け入れる

- コーディネーターに求められる職能は人に蓄積する。コーディネーションを進める際には、画一的な対応を前提としたこれまでの役所的な仕組みではなく、「あの人だからできる」という属人的な能力を活かしていくべきである。
- そのためには、個人の能力と努力を尊重し、力を発揮しやすい環境づくりと人材育成が肝要である。

◎ 行政の下請けではなく政策のパートナーとしての制度設計が必要

- コーディネーターに限らず、現場を担う人材は下請けではなく政策のパートナーであり、行政側は職能や効果を十分に理解した上で、専門性に見合う条件でコーディネーターを配置する必要がある。
- 行政側にコーディネーター人材を置くことで、現場に即した制度設計を行うことも視野に入りたい。

◎ 多領域のコーディネーターをさらにコーディネートする

- 文化芸術の持つ力を、教育や福祉、まちづくりなど多様な領域につないでいくためには、一人のコーディネーターの取り組みだけでは限界がある。
- 他分野のコーディネーターともつながり、そのネットワークを介して多様な地域課題に向き合うことで地域におけるコーディネーターの役割や成果はより広がりを持ったものになっていく。

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

宮城さんは、現在、若狭公民館の館長として活動している。若狭公民館は1992年に開館、1階は図書館、2、3階が公民館で地域住民の学習の場として誕生した。宮城さんの所属するNPO 法人地域サポートわかさは、地域のネットワーク組織（任意団体）を母体として設立され、2010年に若狭公民館事業の一部を業務委託として請け、2015年に指定管理者となった。

2007年に市民の要望により館長（非常勤）となり3年間の任期後、一部業務委託時代（2010-2014年、館長は市職員、館長業務以外をNPOに委託、宮城さんは業務受託団体の事業責任者として勤務）を経て、2015年度より現在の形で館長職に就いている。若狭公民館では、アーティストを顧問として起用する「アートな部活動」などをコーディネートするほか、沖縄アーツカウンシルの助成で実施した「パーラー公民館」や防災をテーマにしたキャンプの実施など、フットワーク軽く事業を展開している。また、市民からの信望も厚く、さまざまな相談にも応じている。

これまでの活動で培ったノウハウは沖縄のみならず、全国の講習会などで還元するほか、市の職員研修も行っており、今では、「若狭公民館的」な価値観が地域や行政にも広がりつつある。

◎ 公民館の機能は、つどう・まなぶ・むすぶ

公民館は、戦後に民主主義を国民に浸透させる機関として全国各地に設立されたが、高度成長期を境に趣味

*1：藤井光：1976 年東京都生まれ。芸術は社会と歴史と密接に関わりを持って生成されていることに基づき、既存の制度や枠組みに対する問いを実証的に検証する作品を制作している。パリ第 8 大学美学・芸術第三期博士課程 DEA 卒業。日産アートアワード 2017 グランプリ、Tokyo Contemporary Art Award 2020-2022 受賞。



ユーチューブの様子
若狭公民館、2021 年

や余暇を過ごす場へと変化した。宮城さんは、公民館をその設立の理念に立ち返り市民自治という視点から捉え直す。それは、多様な課題が散在する地域社会で、市民に向き合う、あるいは寄り添う機関として公民館をアップデートしていくという取り組みである。公民館の機能は「つどう・まなぶ・むすぶ」と整理したうえで、NPO としての機動性も活かしたユニークな数々の取り組みを行う。本調査では、(1)アートな部活動～ユーチューブ部と、(2) パーラー公民館の 2 事例を紹介する。

【インタビュー調査の発言から】

- 公民館はもともと戦後に生まれたもので、地域の住民が、お互いの持っている知識や技術を持ち寄りながら学び合い、地域課題や生活課題に取り組んでいく拠点として設置されていった。（宮城）
- 公民館にとって”自治”はすごく重要なキーワードで、自分たちで地域を治めていくこと、自分たちで地域や社会にかかわりながらできることを動かしていくことが重要な場だと思っている。（宮城）
- 1967年に全国公民館連合会が「公民館のあるべき姿と今日的指標」を示している。そこで公民館の理念として「人間尊重の精神」「生涯教育の態勢の確立」「住民の自治能力の向上」を掲げている。そのための役割として、「集会と活用」「学習と創造」「総合と調整」が示されている。それを分かりやすく、「つどう」「まなぶ」「むすぶ」と言い換えて、社会教育の場ではその3つのキーワードが公民館の役割として広まっている。（宮城）

(1) アートな部活動～ユーチューブ部 市民自治のための道具としての映像講座

「アートな部活動」は、若狭公民館が新しいコミュニティづくりを目指す「アーティストと開発する社会教育プログラム」として、「ダンボール部」「ポストポスト部」「ユーチューブ部」「アート同好会」の 4 講座を主催している。アーティストや研究者を顧問に置くが、顧問は自分の表現活動として関わるのではなく、市民が自らの表現活動を広げたり深めたりすることを後押しする立場である。それが公民館の重要な理念である市民の自治につながるという。その意味を部活動の一つ「ユーチューブ部」を例に見ていきたい。

「ユーチューブ部」は、地域在住外国人の生活目線でまちを紹介し、YouTube で発信しようという取り組みである。受講生は、映像に興味のある方から在住外国人と交流したい方まで広く募集した。顧問は、藤井光(*1)さんが務めるが、藤井さんはその場では自身のアーティストとしての思想や美学を共有しようとはせず、世界共通で普遍的な撮影技術を参加者と共有することに重きを置く。専門性の高い技術や道具としてではなく、誰にでも手に取れる文房具のような存在として映像の扱い方を伝えることは、社会での立場が弱い外国人たちにとって、例えば非常時に外部に訴えかける手段（市民の武器としての表現）を手に入れることにもつながるといえる。公民館自体を市民自治のための装置と考えれば、この「ユーチューブ部」という取り組みは、趣味としての映像講座を越えた射程をも見据えている。

【インタビュー調査の発言から】

- 文化交流することで、互いを知り合える。沖縄在住のネパール人の生活に不安感があるが、コロナ禍でもどんな活動をしたらいいのか、外国人はどんなことに困っているのかなどを話した。（オジャ）
- 藤井光さんをお願いした理由は、これまで労働者など社会的に弱い立場に置かれている人々へまなざしを向けながら、そういう人たちと一緒にその状況を明らかにしていくような作品をつくってきているから。（宮城）
- 作ること自体は楽しんでやってください、としているが、どこかのタイミングで、もし何かあって社会に向かって「助けて」と言わなければならなくなったときに、映像を作ることが生存のための文房具的な道具になる。



パーラー公民館
あけぼの公園、2017 年

*2：小山田徹 1961 年鹿児島県生まれ。京都市立芸術大学日本画科、同大学院美術研究科修了。84 年、在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。並行して 90 年からさまざまな共有空間の開発を始め、コミュニティセンター「アーツスケープ」「ウィークエンドカフェ」などの企画をおこなうほか、コミュニティカフェである「Bazaar Cafe」の立ち上げに参加。

(藤井)

- 当初 YouTube に興味はなかったが、説明会で藤井さんが「YouTube は楽しいだけでなく未来を作るんだ」という話を聞いて、それに興味を持った。また、一緒に参加したベトナム人の友人との関係性を紡ぐのに役に立った。(大仲)

(2) パーラー公民館～地域の人交流し、お互いを再発見してゆく装置

沖縄で「パーラー」は、気軽に立ち寄れる路上の簡易店舗を指す。「パーラー公民館」は、公園の一角に天板が黒板になったテーブルにパラソルを差して、まわりに椅子を置いただけの「青空公民館」である。パーラー公民館誕生の経緯から、その後の活動の広がりまでを俯瞰することで、機能として捉え直した公民館やコーディネーターの役割が浮き彫りになる。

若狭公民館が担当するエリアのうち、館からもっとも遠く、徒歩で 1 時間ほどかかる曙地区の住民から、自分たちの地域にも公民館がほしいという要望が寄せられた。宮城さんは、ハードとしての公民館を整備するのは難しいが、機能としての公民館を地域に届けることはできると考え、戦後の青空公民館を参照しつつ、市民自治の装置として機動性のある公民館を考えた。アイデアを形に落とし込むためのパートナーに選ばれたのはアーティストの小山田徹(*2) さんだ。小山田さんは、地域をリサーチし、コミュニティの中心にある公園を設置場所として選び、手軽に使えて愛着のわく装置として前述の黒板テーブルとパラソルを提案した。

パーラー公民館は、2017 年～2019 年の 3 年間、沖縄アーツカウンシルの支援を得て実施された。初年度は 8 月から 12 月に週 2 回開館し、イベントやワークショップを月に 1 回、2018、19 年度は月 3 回の開館、イベント・ワークショップは月 1 回のペースで開催した。2 年目の 2018 年には、曙地区で活動する団体や個人が、手作りの ZINE (小冊子) を作成し、それを ZINE KIOSK という移動型の棚に展示して曙公園以外の場所へも出かけていく「おでかけパーラー公民館」という取り組みに広げた。これにより、それまで互いに知り合うことのなかった地域団体(まちづくり協議会や福祉団体、就労支援団体など)の間に連携が生まれた。

「つどう・まなぶ・むすぶ」という公民館の機能をコンパクトに実現させる場として宮城さんが意識したのは、オープンで入りやすく抜けやすい場作りとアーティストが介在することによって生まれる変化だという。スタッフは何もせず、地域の方々の話を聞くことを心がける。一方、月に 1 度のアート・ワークショップが「何もしない」日常との間に生む時間のコントラストを大事にした。

文化施設というと、何かする場所で、何もしない時間は冷たく居づらい空気が流れがちだが、なにもない時間こそを大事にするという視点は、コーディネーター業務を考える上で大きなヒントになる。

沖縄アーツカウンシルの支援が終了した後、地域側からパーラー公民館を継続したいという声上がり、2020 年以降はまちづくり協議会が運営を引き継ぎ、コロナ禍で状況は変化するものの月に 1 回のペースで活動を続けることになった。

【インタビュー調査の発言から】

- 戦後は、看板だけ掲げて外で寄り集まって活動した青空公民館というものもあったらしい。そこから着想を得て、施設を造ることはできないが、公民館的な機能が発揮できる場を作ることではないかと思って、パーラー公民館が生まれた。(宮城)
- つどう、まなぶ、むすぶという役割、機能を発揮することができれば公民館と言えるだろうという仮説を立て、それによって住民の自治能力を向上させることができれば、それこそ公民館の目指していた姿になる。(宮城)

*3：現代美術館ではなく、博物館との複合施設、沖縄県立博物館・美術館（おきみゅー）として 2007 年にオープン。

全国アート NPO フォーラム in 沖縄チラシ
アート NPO リンク、2008 年



- 曙地区の人たちは自分たちの地域は何もないと言っていたが、パーラー公民館を始めたら、いろいろなところでいろいろなことをしているのに、それぞれがつながっていないことが分かってきた。（宮城）
- テーブルが黒板になっていて、黒板にパラソルが刺さって開いている状況を見たときに、これはすごく絵になっていいというのが第一印象。公園の中で、緑のテーブルと白いパラソルが幾つか並んで、このバランスがすごくよかった。それで、パーラー公民館の印象がぐんと上がって、パーラー公民館とはこういうことだというのがみんなに伝わった。（玉寄）
- これまでお互い話すことがなかったのに、パーラー公民館では世代を超えて集まって話すことができる。大人の話が子どもが聞ける。子どもの話を大人が聞ける。子どもたちにそういう状況をもっと見せて発言させていきたい。（玉寄）
- パーラー公民館にせよアートな部活動にせよ、若狭モデルがなるべく他の地域にも広がって欲しいと思う。（麻生）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

(1) コーディネーターとしての素地が作られた前島アートセンターでの活動

宮城さんのコーディネーター的な活動を理解するためには、前島アートセンターでの実践や試行錯誤（2001～2011 年）を理解しておく必要がある。前島アートセンターが立地していた那覇市前島地区は、暴力団抗争をきっかけに市民が寄りつかなくなり寂れていた。当時、沖縄県は県立現代美術館の開設を準備しており、学芸員たちがプレオープンの意図も含めて企画していた展覧会に合わせて、ビルオーナーたちがビルや周辺を活用した展覧会を企画した。そこに学芸員も協力したが、イベント自体は企画者たちで資金調達した手作りのものだった。イベントには 40 人ほど関わったが、宮城さんは作家としてこの企画に参加した。当時、学芸員はいるものの、予算上の問題から県立現代美術館の構想（*3）がストップしており、県内のアートシーン自体が低迷しているような雰囲気があった。そこで、前島にアートセンターを作ろうという動きが盛り上がり、宮城さんは、半ば巻き込まれるように代表となり、その後法人化された。

前島アートセンター自体は、企業協賛や公的助成なども獲得し、意欲的に事業を続けていくが、人件費に充てられる助成金はほぼなく、宮城さん自身は美術の非常勤講師などの収入で生活をしのいでいた。

2007 年にビルが閉鎖することになり拠点を失うが、活動はまちなかへ広がっていたこともあり、しばらくは場を持たない状態が続いた。活動のきっかけであった県立の美術館が博物館と一体化して開館することになり、そのオープンのタイミングに合わせて市内の栄町市場で、数日間のイベントを行った。その場所をそのまま活用し、アートスペースとして運営を続けた。2008 年にはこのスペースを起点に栄町市場全体を活用し、全国アート NPO フォーラムも実施している。

このような活動を通じて、前島アートセンターの名は全国区となり、さまざまな NPO やアーティストたちにも知られるようになった。

【インタビュー調査の発言から】

- 前島3丁目という町が暴力団抗争の影響で寂れていったという背景と、県立美術館の構想が止まっている中でアートシーンをどうにか刺激したいという沖縄のアートシーンの背景の両方が合わさって、そこにかかわっている人たちが出会うことによって生まれたのが前島アートセンターだった。（宮城）

- 当時は、専従の職員もいない状態で、助成金はほとんどが人件費には充てられないので事業費だけという感じだった。（宮城）
- いろいろなことを手探りで、矢継ぎ早にやっていた。その情報をそれぞれの興味関心で受け取っているのも、前島アートセンターの見え方は人によって全然違う。だからこそいろいろな人がかかわる「のりしろ」みたいなものができて、みんながいろいろなことを勝手にやり始めるみたいな場だった。（宮城）

（2）若狭公民館の館長に

経済的に苦しみつつも、前島アートセンターでの事業を進めていた頃、2006年に宮城さんは当時の若狭公民館長に会い、非常勤職員として公民館の仕事を始めるようになった。指定管理者制度の導入が検討され始めた時期で、若狭公民館は2004年から民間公募の館長を据えていた。その非常勤館長が3年の任期を終えるときに地域住民の中で後任をどうするかという議論が起こり、その中から宮城さんを館長にしようという署名運動が始まった。1年間の勤務で人となりを知られていたことに加え、前島アートセンターでの活動がよくメディアに取り上げられていたこともそうした動きを後押しした。

その結果、宮城さんは2007年4月からは館長（非常勤）として仕事をするようになる。その後2010年に体制が変わり、市から館長が派遣され館長以外の業務をNPO（地域サポートわかさ：宮城さんを館長に推した市民ネットワーク組織が法人化）が受託し、宮城さんはNPOの事業責任者という立場に変わる。5年後の2015年度からは、NPO法人地域サポートわかさが指定管理者となり、宮城さんは再び館長となった。

◎ 当たり前を問い直し、市民の声に耳を傾けることから始める

宮城さんは、前館長が残した市民の期待感を受け継ぎつつ、それ故のやりづらさも抱えながら独自の事業展開を模索した。「100人でだるまさんがころんだ」という事業を通じて、若い世代の関心事や公民館のイメージをヒアリングすることから始め、地域で活動を起こしたいという人たちとつながっていく。既存のやり方に一度疑問符を投げかけて、場や組織の可能性を捉え直していくことが、宮城さんの仕事に通底する考え方である。

また宮城さんは、当初公民館の仕事に就いたときに「有給スタッフがいて、それなりの設備があり、社会的にも信用される」と感じたと言っている。既存の文化施設や仕組が必ずしも十分に活かし切れていない現状を考えると、文化施設で働くすべての管理者やスタッフが真摯に向き合うべき言葉であろう。

【インタビュー調査の発言から】

- 公民館には、施設があって、それなりに設備も整っている。NPOで事業をやる際、助成金を貰っても人件費には使えなかった。それに比べて、公民館には有給の職員がいるし、社会的に信用もされているし、すごい資源だと思った。しかし、あまり生かされていないというか、趣味、レクリエーション的な活動ばかりでもったいないと感じた。前島アートセンターでは、母親が夜も働いている母子家庭の子どもが500円のホットサンドを注文して、遅くまでそこにずっといることもあったし、昼間から酔払った人やギャラリーの外でずっと寝ている人がいるというのが日常だったが、公民館にいとそういう人たちにはほぼ出会わない。（宮城）
- 青年対象の事業予算が付いてやることになったが、そもそも必要があるのかという問いかけから見直した。若い人が来ないから来るようにしようというのは公民館の事情で、本人たちのニーズ・課題とは関係ない。彼らのニーズ、課題意識とマッチしないのであれば、公民館で事業をやる必要はなく、彼らが必要とすることと、その提供者をつなげればいい。（宮城）

3. 宮城さんのコーディネート業務の特性と成果

(1) 市民の「かわりしろ」を生む「ゆるい」マネジメント

コーディネーターとしての宮城さんの仕事をシンプルに表現するならば、「ゆるい」という一言に集約できるだろう。そのゆるさは、アートや社会教育、あるいは福祉やまちづくりの間にある境目をあいまいにしていき、さまざまな人が関わりやすい「のりしろ」のような部分をつくっていく。それは、地域からの声に対して否定せず、自分ではわからないこと、できないことは人を頼り、人から相談を受けたら、答えが見つからなくとも共に悩むというスタイルに現れている。かといって仕事のすべてがゆるいわけではなく、そのゆるさがとても戦略的に機能する側面もある。

インターフェースはゆるいけれど、事業の先に見据えていることや、成果を出すまでのプロセスが入念に考えられているのは、アートな部活動でもパーラー公民館でも共通している。このような宮城さんのゆるさのコーディネートは、若狭公民館での実践にとどまらず、市内外のさまざまな組織、団体にも伝播している。

【インタビュー調査の発言から】

- 困ったことがあっても断らずに、一緒に「どうしたらいいかなあ」と悩んでくれる。関係性をすぐに切らないこと。窓口になる人として、引っ張っていくというよりは、共に悩む。それが人を引き寄せるのかもしれない。（平良）
- 話し方が穏やかなのと、絶対に怒った顔をしない。いつもにこにこしていて、目がゆるんでいる。そこからして近づきやすい。本当に誰もが近づいていって、何か話したいという雰囲気がある。（玉寄）
- 最初に否定しない。そこが行政運営の公民館との違い。（上原正弘）
- ノーを言わず、すべてを受け入れて、冷静に人と人をつなげていく。困りごとの相談時のゆるさと解決を考えるとときの適確さが素晴らしい。（宮平）
- 子ども国際映画祭（KIFFO）も「ゆるく」をテーマにしているが、それは若狭公民館の姿勢の影響を受けている。「ゆるく、楽しく、KIFFO する」。KIFFO るとは、忌憚なく意見を言い合うという意味。（宮平）
- 例えば、ポストポスト部の活動は「若狭公民館のポストに投函された手紙のお返事を書く」がメインだが、それ以外にも世間話をしたりゲームをしたりとのんびりしている。そのゆるさが参加者の安心感や心を開ききっかけになっている。（麻生）
- 若狭公民館は単なる社会教育施設の枠を飛び出ていると感じていて、そういうことを「なは一と」（那覇市に新設された公立文化施設）にも活かしていけないかと思う。アート系の人たちの思考回路は普通と違って、そういうことをまちづくりにも活かしていきたい。（野原）
- 若狭公民館は地域にアートのコミュニティをつくっている、地域で人を育てていると思う。ここにくると、何かつながれるチャンスがある。外国人留学生に沖縄の踊りを伝えたくて、公民館で活動している団体に声をかけてできるようになった。（大仲）
- ネパール留学生の存在が地域で可視化されることにもつながったと思う。（オジャ）
- 若狭公民館と大名児童館と一緒にやっている事業としては「政治って何だろう」とか、「朝食会」を若狭公民館とオンライン中継して行ったりもしている。「この平和な時間ってなんですか？」と子どもたちが喜んでいいる。（屋宜）

*4：ソーシャルワークなどにおける自己覚知（self-awareness）とは、援助者が自分自身について客観的に理解することで、クライアントを理解し信頼関係を構築しようするとき、自己の価値観や感情などに左右されないようにしようという考え方。

*5：ブリコラージュは、計画的に準備して行うことは対照的な考え方で、その場で手に入るありあわせの材料を寄せ集め、試行錯誤しながら、新しいものを作る手続きことである。

(2) コーディネーターの自己覚知（*4）

「自己覚知」は、ソーシャルワーカーをはじめとする対人援助職に必要と言われる概念である。教育の分野では、主に新任教師が自らに足りないところも含めて生徒と共有し、共に育とうとするような態度を指す場合もある。宮城さんや関係者のインタビューでは「ゆるい」という単語が頻繁に登場するが、これは「自己覚知」ができていない状態で、特に地域との協働により共に育っていくことを意図するコーディネーターにとって大切な態度だと考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- （前島アートセンター時代は）戦略的にやったのではなく、いろいろなことができない人が代表だったのがよかったと後付けで気づいた。僕も頑張ってきたとできるようになりたいと思ったことがあるが、その必要はないと開き直すことにした。（宮城）
- コンセプトや目標が明確で、一直線に進んでいるのであれば、関心のある人がどんどんかかわって、推進力も生まれるかもしれないが、僕は曖昧だった分、いろいろな人がいろいろな可能性を感じて、その可能性に対してかかわってきた。（宮城）
- きちんとやろうと思ってもできないので、基本的にきちんとすることはあきらめている。（宮城）
- できるできないをはっきり言わない。成果をすぐに求めないタイプ。それがいいのかもしれない。ゆるく人の話を聞く。「こういうアイデアもあるんじゃない？」というスタンス。また、行政とも喧嘩をしない、長期視点では、それが良いのでは。魅力は頼りなさを自分で表現しているところ。だから、周りが勝手に動いてくれる、「僕は何もしていない」というスタンスを保っているのはすごいと思う。（屋宜）

(4) プロセスを重視するアーティストとの関係性

クリエイティブな部分を担うアーティストにはアウトプットではなくプロセスに関わってもらおうというのも、宮城さんのコーディネートの特徴である。公民館の目的が芸術の成果を発表・鑑賞することではないということもあるが、市民と協働して思考を重ね、手法を考案しながらモノやコトをつくるアーティストも多い。市民や地域の課題の根が深く、影響が多様に表れるような場合、既存の支援スキームだけでは取りこぼしてしまう部分があるため、このようなアーティストたちの問題意識や手法について広く学び、感性や表現の部分で地域に向き合うのも、コーディネーターの大切な役割だろう。

【インタビュー調査の発言から】

- アーティストが市民の創造力を刺激していくことや、イメージしたことを具現化する力にはすごいものがある。（宮城）
- アーティストがどのような問題意識で、何をしているか知らないとお願ひできない。（宮城）
- 基本的に小山田さんはブリコラージュ（*5）というありものを組み合わせて新しい価値を作るという考え方でやっている。（宮城）
- 三脚やカメラの使い方は普遍的な言語で、コミュニケーションが起きやすい。これが、美学や思想の話になると、互いの違いが壁になりなかなかコミュニケーションにつながらない。（藤井）
- 企画が固まってから、相談して、形をつくってもらうのであれば、それはデザイナーや技術者の仕事で、アーティストのいいところを制限してしまう。この辺も僕自身がふわわとしているのがいいのかもしれない。何となくもやもやとやりたいことはあるが、どうしていいかわからないという段階で、相談に乗ってもらって、そ

こからいろいろなアイデアが出てくる。（宮城）

- 例えば、「ユーチュー部」という名前もゆるい。多分東京だと、藤井光さんを招いてユーチュー部というタイトルのワークショップはしないと思う。（宮城）
- こちらとしては、公民館で外国人向けの取り組みをユニークな切り口でやることが重要で、地域に根差した施設だからこそ、外国人向けの取り組みをすることそのものに意義があると思う。そこで、楽しく映像を作ることや、できた作品を通してお互いのことを知り、理解することが必要だと思った。（宮城）

(5) 地域のコーディネーターとして多様なつながりの結節点となる

宮城さんは、「地域」と言うとき、地域団体やグループなど、それぞれがイメージする地域の人がいるが、つい忘れがちな人もいます。コロナ禍のような事態においても、地域活動は既存の組織前提で進んでいくが、組織に属していない地域住民が多層で多様にいることも自覚しておく必要がある」として、コーディネーターは、「支援の網の目をすり抜けてしまいがちな人たちやコミュニティともつながりを持ち、横断したり、風穴を開けたりする取り組みが必要だ」と指摘する。

このようなつながりの媒介として、スポーツやレクリエーションまでを含めた広義の文化活動は最適だと考えられる。行政施策の福祉や教育、観光、産業振興などはそれを必要とする人や団体を対象としているが、広義の文化活動は生涯にわたり誰もがアクセスできるからである。さらに、文化活動をイベント中心にとらえるのではなく、市民の話し相手として、日常的な付き合いができる関係性を築いていくこと、あるいは多様なつながりの結節点となることが、さまざまな「市民自治」「市民協働」の苗床につながっていく。コーディネーターはそのような仕事を担う職として認識する必要があることを、宮城さんの仕事や成果は示している。

【インタビュー調査の発言から】

- 社会教育法での公民館の位置づけを見ても、地域がフィールドで、活動を行う拠点として公民館がある。（宮城）
- 文化芸術だけではなくて、いろいろな要素が地域社会の中にはあり、それが切り分けられない。（宮城）
- 公民館の中で活動していると、文化芸術に限らないほうがいろいろ見えてくる。実はすごく多様につながっていることが見えるし、その広がりの中で活動していると、文化芸術の力、アートの力をすごく感じるができる。（宮城）
- 沖縄に住む外国人にとって若狭公民館のようなところはない。沖縄ネパール友好協会の名前も知られるようになった。（オジャ）

4. 問題点・課題

今後、コーディネーターの仕事を推進するうえでの問題点や課題として、宮城さんからは「あの人だからできる」という属人性を避けようとする姿勢は、結果的にマイナスに働き、社会との乖離を生むという指摘があった。また、インタビュー調査の中で、コーディネーターの所属する組織が指定管理者として行政の下請的になってしまうという問題点も指摘された。

(1) 「あの人だからできる」属人性を受け入れる

行政組織は、担当者が替わっても同じ対応で同じ成果を残せる仕組みづくりを優先する。しかし宮城さんは、

働き過ぎは論外にしても、そうした姿勢は担当者のやる気を失わせ、結果的に活動やサービスの質を低く抑えることにつながる、と指摘する。それよりも、やる気のある個人を後押しし、その個性を少しでも一般化できるように学び合うことの方が重要だというのが宮城さんの考え方である。窓口対応ですらまったく同じということはないことを考えると、個人の特性を前提としながら、人を育てることのほうが重要だという指摘も、コーディネーター活動を推進するうえで大切なポイントであろう。

【インタビュー調査の発言から】

□ 「あの人だからできる」 属人性を受け入れること

- 幾らみんな同じように対応できるように徹底しているつもりでも、実際に行政の窓口に行く人によって言うことは違うし、対応が変わるのをわれわれはさんざん経験している。人の特性によってでこぼこが出ることを前提としながら、人を育てることのほうが重要ではないか。（宮城）
- 行政職員のマインドが、人によって対応が変わってはいけないということを前提にしている。そうすると、ものすごく低いところにそろえて、頑張らないようにさせてしまうみたいな文化がある。（宮城）
- 人によるというのは、大抵悪い意味、弊害があるという意味で使われるが、人によるからこそ人を大事にするという方向に向かえばいいと思う。（宮城）
- 「あの人だからできる」という属人性を否定するのではなく、人によるものだという前提で仕組みをつくるほうが、次のもっとおもしろいステップに行けるような気がする。（宮城）
- 人によってそれぞれ特性があるし、いいところは人によって違うので、いいところに合わせてやっていけばいい。もし、その人が抜けて同じことはできなくなったとしても、一度つくったものがあれば、それを見ながら半分ぐらいはできたりする。でも、今は、その人じゃないとできないということを無くそうとして、10あるうちの1ぐらいのところまでみんな抑えようとしていると思う。一度つくってしまったら、同じレベルのことはできなくてもそれに近づけようとするはずなので、その辺の理解や雰囲気が欲しいと思う。（宮城）

□ 属人性を嫌う文化が社会との乖離を生む

- 社会はこんなに大きく変化しているが、行政機関はなるべく個人の能力に依存するがんばりを抑えようとするから、社会との乖離が出てきて、追いつけない状態になっている。（宮城）

(2) 下請的な指定管理者からの脱却

宮城さんは指定管理者の立場で若狭公民館の館長を務めている。指定管理者は行政組織が設定した条件のなかで業務を行うため、下請的になってしまうケースが少なくない。行政が求める以上の成果を残して、指定管理料を交渉するという宮城さんの姿勢は、コーディネーターの働く環境を改善し、結果的に地域や市民に対するサービスの質的向上につながるという点で、学ぶべきことが少なくない。

- 指定管理者としては、普段から行政と丁寧な付き合いをしつつ、仕様書（業務の基準）以上のことも行っている。そういう実績を踏まえて、指定管理者に応募する際は、適正な価格（想定額以上）で見積を出し、交渉していく。（宮城）
- 行政のシステムの中では、指定管理者は下請けとならざるを得ないポジションとなってしまうことに不満がある。宮城さんの立ち位置は、行政的には課長的なポジションだと思う。まちづくり協働推進課ができてずいぶん話しやすくなったが、市政にちゃんと宮城さんのようなポジションを設けたほうがいいと感じる。そうすると、市民がもっとやりやすく、もっと活性化するかと思う。（屋宣）

- 宮城さんは行政へ厳しく意見してくれることもある。那覇市がコーディネーター養成を目的とした「なは市民協働大学院」を企画したとき、宮城さんは運営委員長（アドバイザー）を務め、わずか全8回のプログラムではコーディネーターはつくれない、と指摘してくれた。我々は、安直だったとプログラムを作り直し、コーディネーター的視点を学ぶきっかけづくり的な講座に切り変えた。（渡嘉敷）
- 若狭公民館の名前を出すと市役所などで信用されるという面もある。（屋宜）
- 宮城さんには那覇市協働によるまちづくり推進審議会にも委員として参加いただいている。また、那覇市の新任主査研修（毎年70名程度対象）も、協働やまちづくりをテーマに宮城さんに講師をお願いしている。（渡嘉敷）

5. コーディネーター推進の方向性

今後、コーディネーターの活動をより一層推進するためには、(1) 市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していく姿勢、(2) 地域のカウンセラー的に活動すること、(3) 多様な領域のコーディネーターをさらにコーディネートすること、が求められている。

(1) 市民が自らの発案で何かを始めるよう導き出していく姿勢

地域や市民と文化芸術をつなぐために、コーディネーターが市民にこのようなことをやったらいいと提案していくのではなく、参加する人が自らの発案で何かを始めるようにうまく導き出していく、というのが宮城さんのスタンスであった。それは今回の事例調査で取り上げるコーディネーターに共通する姿勢である。そのことで、市民自らが、行動を起こし影響し合う市民自治の地盤を固めることにつながると考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- こちらがつくったサービスを提供するのではなくて、いろいろな人が刺激を受けて、発案したものを必要な人やものをつなげて形にしていくサポートをすることで、そういうことが起こりやすい環境をつくっていく。（宮城）
- パーラー公民館では、「何もしない」ことをスタッフにリクエストしているが、それは、先にこちらがやろうとするのを避けて、地域の人たちから出てくる声を受け止めるためだ。その声を表面的に聞くだけでは何も生まれないが、地域の人何かやろうとして動き始めるのを後押しする。そこで失敗や経験をする中で気づき、学んできたことはしっかり腑に落ちると思うし、次に繋がっていく。（宮城）
- 3年間で、最初はわれわれがやっているものに参加するという感じから徐々に一緒にやるようになっていき、最終年度は、スタッフの行けない日が多くなったのを逆手にとって、一人は若狭公民館から、もう一人は地域の人からというシフトを組んでもらった。引き継ぎ後は完全に曙の地域の人たちが運営するようになった。今は月1回の開催になっているが、逆にいろいろなものが集中して、盛り上がり方が半端ではない。成果はこちらの想像以上。地域が主体となって、僕らは遊びに行く感じだ。（宮城）

(2) 地域のカウンセラー的に活動する

宮城さんとアーティストとの関係を見ると、地域や市民と文化芸術をつなぐコーディネートにおいては、アートやアーティストと地域や市民をフラットに捉えることが大事なことがわかる。アートを高いところにおき、アートのために地域や市民を使うことがないように気をつける必要がある。求められるのは、アートと地域と行政それぞれに対して翻訳者として振る舞えること、そして、アートやアーティストの力をうまく活用して、

*6:『人とつながり、まちを元気にする』コミュニティナースは、職業や資格ではなく実践のあり方であり、「コミュニティナースング」という看護の実践からヒントを得たコンセプト。地域の人の暮らしの身近な存在として『毎日の嬉しいや楽しい』と一緒に作り、『心と身体の健康と安心』を実現する。その人ならではの専門性を活かしながら、地域の人や異なる専門性を持った人とともに中長期的視点で自由で多様なケアを実践する。出典：Community Nurse Company 株式会社ウェブサイト

地域や住民の課題にカウンセラー的に向き合っていくことだという意見も聞かれた。

【インタビュー調査の発言から】

- ・地域にカウンセラーがいればいいと思っている。カウンセリングのために、わざわざどこかに行くというのは敷居が高い。また、地域に保健室の先生みたいな人がいたらいい。そういう人がいる場所としての公民館。地域にある相談窓口としての公民館であるといい。（久手堅）
- ・コミュニティナース（*6）という活動が始まっているので、参考になるのではないか。（野原）
- ・創造力が社会をプラスに変えていくことを若狭公民館が実証している。それを受けて、創造的な活動をしている人たちの経験や思考が職につながる仕組みを作れると面白い。那覇市が先立って取り組んでくれたらすばらしいと思う。コーディネーターは、社会をより良く変えていく役割も大いに担っていると思う。（平良）
- ・最前線でコーディネーターをたくさん見てきた。その人次第で、結果が大きく変わってしまうのをよく知っている。このみさん（ユーチュー部の担当者）は、参加者とも水平的な関係が作れる。私はアートを知っているが市民は知らない（上から目線）という人は、アート愛はあるかもしれないが、コーディネーターとしては失格。市民一人一人に対して敬意があって、アートのこともわかっている人。もうひとつは、行政との対話・コーディネーションができる人。行政の人向けに翻訳できる人であることも大事。（藤井）

(3) 多様な領域のコーディネーターをさらにコーディネートする

インタビュー調査では、宮城さんにコーディネーターのコーディネーター、コーディネーターのまとめ役になってほしい、という意見が複数の方から寄せられた。文化芸術の持つ力を、教育や福祉、まちづくりなど多様な領域につないでいくためには、一人のコーディネーターの取り組みだけでは限界がある。文化芸術のコーディネーターが、他分野のコーディネーターたちとつながり、さまざまな領域の結節点となっていくことで、より大きな成果に結びついていく可能性がある。

また、前述のユーチュー部でも宮城さんの部下の担当者がコーディネーターの役割を果たしているように、コーディネーターをさらにコーディネートする構造の中で、互いがコミュニケーションを多く取り、より良い関係で進める必要がある。文化施設が事業やイベント中心の運営とならず、あるときは市民の話し相手となり、あるときはアーティストとの関係性を的確に築けるようにするためにも、コーディネーターが安心して働ける環境を用意することが肝要だろう。

【インタビュー調査の発言から】

- ・那覇市には協働を進めるための市民協働大使がいるが、そういう人たちをコーディネートができる人材が必要。ぜひ文化施設の中でそういったことができる人材を養成できないかと思っている。（野原）
- ・自分の地域の公民館では、地域の人は図書館で本を借りるくらいで、職員の人と交流することはない。個々の活動が、市内の公民館でどうシェアされていくのか。地域に愛着を持つ子どもや市民が増えていくことを願う。（大仲）
- ・宮城さんにはコーディネーターのコーディネーターになってほしい。判断して責任を負う役。コーディネーターが動きやすい環境を作る。（屋宜）
- ・アーティストやコーディネーターが行政のポジションに着くこともあり得る。沖縄にはかつて踊奉行（組踊りの創始者と言われる玉城朝薫など）がいた。中国と薩摩との板挟みのなか、両方をおもてなしする役割。（上原正弘）

- 地域コミュニティに参加しない人も多い。アートの切り口で、新しく人が集まるコミュニティを作れるのではないか。（上原正弘）
- 宮城さんにコーディネーターのまとめ役になってほしいと思う。那覇市でいろいろなものを見ていても、責任を負う人がどこにもいないので、たらい回しになっている。宮城さん自身が、おもしろい文化芸術が街中にあふれるような取り組みを仕掛けるのではなくて、さまざまなコーディネーターが動きやすい環境をつくっていく。（屋宜）

第3部 座談会記録

【出席者】

アサダ ワタル（文化活動家／社会福祉法人愛成会品川地域連携推進室 コミュニティアートディレクター、アーティスト、文筆家）

荒井 洋文（犀の角／一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表理事）

小川 智紀（認定NPO 法人S Tスポット横浜 理事長）

田中 真実（認定NPO 法人S Tスポット横浜 事務局長／横浜市芸術文化教育プラットフォーム 事務局長）

長野 隆人（いわき芸術文化交流館アリオス 支配人）

野村 政之（長野県文化政策課 文化振興コーディネーター）

宮城 潤（那覇市若狭公民館 館長／NPO 法人地域サポートわかさ 理事）

若林 朋子（プロジェクト・コーディネーター／立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科 特任教授）

【進行】

吉本 光宏／森 隆一郎（ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室）

2021 年 11 月 29 日（月）14：00～17：00 地域創造会議室

*1: 地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究「アウトリーチ活動のすすめ」、財団法人地域創造（2001年3月）
芸術普及活動を実施している公共ホール・劇場、美術館に対するアンケート調査、事例調査を実施し、「芸術普及（アウトリーチ）活動はこれからの地域文化施設の鍵をにぎる事業である」ことを提言した。



1. コーディネーターとしての出自と現在の仕事

ー まず、自己紹介も兼ねてこれまでの経歴や現在のお仕事の内容について紹介いただきたい。

【アサダ】 表現の仕事として最初にコーディネーター的な活動を行ったのは、20代の頃にバンドマンとして音楽活動をやっている時だった。大阪で芸術系のNPOに関わる機会を得て、まちづくりや障がい福祉などの他分野と連携をしながら、アートプロジェクトを企画・運営する立場に関わった。その延長線上で、地域の方々やアーティスト、クリエイターをコーディネートして、つないでいくことになった。

今は品川区立障害児者総合支援施設で、主に知的障がいのある成人メンバーと表現のワークショップをしている。そこではダンサー、ものづくりに関わる地元の方、カメラマンなどと連携しながら障がいのある方々の場づくりを含め、文化的なアプローチから支援している。

【荒井】 長野県上田市の海野町商店街で「犀の角」という劇場、ゲストハウス、カフェ、レンタルスペースがある民間の文化施設を運営し、文化事業の企画や、コーディネート的な仕事をしている。

高校・大学時代に京都で演劇と出会い、台本を書いたり、演出したりしていたが、挫折して、いったん就職をして普通の会社勤めをした。やはり演劇の仕事がしたくて、上田市で文化政策を1年間ぐらい手伝った。そのとき地域創造のステージラボ岐阜セッションに参加して公共劇場の存在を知り、その数年後から静岡県舞台芸術センター（SPAC）の制作部で10年ほど仕事をした。

その後、SPAC を辞めて、地元で改めて自分の活動をしたと思って帰ったところで今の建物と出会い、「犀の角」を始めることになった。

【小川】 演劇出身である。今日のテーマに近い意味での出自は、開館直後の世田谷パブリックシアターで電

話番をしていた頃にさかのぼる。平成12年度の地域創造の調査研究『アウトリーチ活動のすすめ』（*1）のための取材を受け、アウトリーチって何だろうと現場でぼんやりしていたのを思い出す。

それから演劇百貨店というNPOを経験し、今はSTスポット横浜で劇場運営のほか、学校教育や障がい福祉とアートの連携、地域文化支援の仕事が続いている。自分のアイデンティティは、非営利のアートNPOだということを意識して仕事をしている。

【田中】 小川と一緒にSTスポット横浜というNPOにいる。私自身はもともと、大学、大学院で地理学やまちづくりを専攻していた。芸術分野は全く分からないまま大学のボランティアで演劇百貨店に関わった後、STスポット横浜で働いている。就職という意識はあまりないまま仕事が続いている感じで、もう13年位になる。

普通の人たちが、地域の中で、もう少し身近に、幸せに生きられる方法は何かないかとずっと気にしながら仕事が続いている。今は主に福祉や教育の分野で企画運営をしていて、芸術家と一緒に福祉施設や学校に出掛けてワークショップを行っている。

【長野】 福島県いわき市のいわき芸術文化交流館アリオスの支配人をしている。東北地方の中では結構大きな規模の芸術文化施設で、オープンして丸14年になろうとしている。オープン1年前の2007年に、広報のスタッフとして入った。その前は大学時代からクラシック音楽の情報誌で、編集、営業、編集記者、雑用など全般をやっていた。

いわきに来てからは、新しい劇場をオープンするために、市民の皆さんに芸術文化をどう伝えていくのか、今までにない価値観をどう知ってもらうかに注力してやってきた。今は支配人だが、雑用みたいなこともやっていて、今朝も、明日の調律師の手配を忘れていたため、自分で電話している。

- ◎ 官が担う領域ではなく、広い意味での市民活動
- ◎ サービスの出し手と受け手という関係ではなく、一緒にできることがある
- ◎ ある課題に対して意識がある人たちとアートで何か一緒にやっていく

【野村】 長野県文化政策課の文化振興コーディネーターと、フリーランスで企画制作やドラマツルクの仕事をしている。大学のときにサークル活動で演劇創作のいろいろな役割を経験し、その後、公共ホール職員として勤めながら「公金を文化芸術の創造に上手につなげるには？」が自分自身のテーマとなった。その後、こまばアゴラ劇場・劇団青年団制作部では、並行してドラマツルクなどの役割で同世代・若手演出家の作品づくりのサポートをした。

自分の活動では、アーティストとの作品づくりを重視しているが、それが段々と、サポートする相手が、演劇から他ジャンルのアーティストや、地域の文化芸術団体などに広がり、現在のコーディネートのような仕事になってきた。その過程で東京や沖縄のアーツカウンシルに関わって、具体的な支援が仕事の一つになり、メインになりつつある。

現在は、長野県の事業の企画とコーディネートを通じて、障がいのある方も含め、県内の文化芸術の担い手の支援をしている。今後、長野県でアーツカウンシルを立ち上げ、主に県内の文化芸術団体のサポートをしていくことになる。

【宮城】 沖縄の若狭公民館の館長として、地域でいろいろなものをつなげるコーディネーターとして活動している。

もともとは沖縄県立芸術大学で彫刻を学び、2001年に那覇市前島という地域を拠点とする「前島アートセンター」というアート NPO の立ち上げに携わった。その地域は1990年頃県内で暴力団抗争が激化した際に高校生が犠牲になった歓楽街で、飲み屋ビルの空きスペースを活用して活動していた。その NPO では完全にボランティアだったので、2006年にアルバイトとして公民館に勤め始めて、翌年に館長になった。アート NPO での活動は10年で終了したが、公民館は16年目でこちらの方が長い。

【若林】 もともとは企業の文化活動あるいは文化支援活動を応援する団体に、90年代の最後から15年ほど勤めていた。経理以外はすべてローテーションで担当し、企業の社会貢献・CSR 担当者や、アート領域の NPO やアーティスト、市民、学生、研究者の方々をつなぎながら芸術文化支援の環境整備をしていた。8年ほど前にその組織を離れ、今はフリーランスで、相談を受け一緒に考えて形にしていける仕事をしている。

2. 社会や地域に対する問題意識——アートを通して何と向き合うか

— アートを通して地域のどのような課題に向き合っているか伺いたい。

【小川】 官の領域とは違う部分、広い意味での市民活動をやっているのだと思う。指定管理者制度下の公共劇場や行政委託のアーツカウンシルの一部には、単純なサービス機能をにう局面が増えた。アート・サービス・オーガニゼーションという言葉が紹介されたころ想定していた「サービス」から変質してきた部分もあるだろう。

サービスの出し手と受け手という関係ではなく、何か一緒にできることがあるのではというのが自分の考え方で、昔で言う市民運動に近い。ただ市民運動といっても、一致団結して権利獲得を目指す強固な運動体

ではなく、そこにある課題に対して意識がある人たちとアートで何か一緒にやっていく方法はないだろうかというものだ。いろいろなジャンルの中に散らばる人々の思いを、アートを通してうまく結び付けたり、集まる場所をつくったり。それを応援する仕方も結構難しく、日々どうするか悩んでいるところだ。

【田中】 私たちは福祉施設の中でも、いわゆる手帳を持たない人たちも関われる「地域活動支援センター」に何うことが多い。障がいがあるかないか曖昧な人たちが集まれる場所に困っているように感じる。でも、そうした人が集まると、意外に面白いことを起こる。どの立場、どの関わり、どのような状況において

- ◎ 自分で決め、自分で学び、自分で考えるようなことを後押しする環境づくり
- ◎ 文化権を守る先頭に立つのは公立文化施設だ
- ◎ 生活の実践としてどのようにアートをやっていくか
- ◎ アートは支援のひとつとしていろいろな個性を尊重できる

田中真実さん
(STスポット横浜)



も、自分で決め、自分で学び、自分で考えることを後押しするような環境づくりをしたいと思っている。

具体的には、手帳を持たない人たちを直接支援するのではなく、地域の事業に対する助成金で、その人たちの周りにいる人たちの環境を整えてつないでいくという形だ。自分たちで考えたり、決めたりできる場所というのは、公民館に近いと思っている。

教育事業で学校へ出掛けると、学校は地域とあまり関わりを持っていなかったり、先生も地域のことを意外に知らなかったりすることを実感する。学校へ行けば地域が分かると思っていたが、実際は違った。例えば「カプカプ」という喫茶店などをしながら、アーティストのワークショップを定期的に行っている横浜の福祉施設がある。徒歩1分のところに小学校があるのだが、「カプカプ」のことを知らず、先生も関わりを持っていない。さまざまな事業を通して、地域の実情が分かると、双方をつないだり、「遊びに行きましょう」と誘い出したりできる。

— 小川さんには、福祉を文化の権利と読み直すことで、見えてくるものがあると伺った。

【小川】 ユネスコや日本の憲法に書かれた文化に関する権利を文化権というなら、まず文化権を守る先頭に立つのは公立文化施設だと思う。教育の現場でも、障がい福祉の現場でも、公立文化施設の想定受益層から漏れている人たちがいっぱいいる。地域の助成金の事務局では、そこを埋める地域文化の担い手を育てることがあるのでやりがいがある。文化権の保障という意味で言えば、行政と同じ縦割りにならないやり方でやっていく必要があって、それが文化による横つなぎだからコーディネーターという言い方になるのだろう。

— アサダさんには表現者として向き合おうとしている社会の課題について伺いたい。

【アサダ】 田中さんと小川さんの話に共感できる所が沢山あった。領域がいろいろ分断されていることは感じるが、都市部から地方へ行くと、どちらかというと

自助共助の中で、教育の中に福祉や文化が入り、地域のつながりづくりがまちづくりにつながることはある。抽象的になるが、「生活の実践として、どうやってアートをやっていくか」をずっと考えているのだろうと、自分の活動を捉え直している。

ただ、その感覚は人によっていろいろだ。無意識にできている人もいれば、そもそも文化権という発想すらない状態で日々を過ごす人、過ごさざるをえない人もいる。アートから何かつながりをつくる以前に、福祉自体がなかなか機能しないことを、都市部の現場でものすごく感じてきた。

例えば障がい福祉では、区立など公立の施設はとても縛りが強い。指定管理者が僕のような立場の人を付け、独自のやり方で地域の人とつながる。写真展、ものづくり、演芸、ダンス、音楽、何でもいい。それらアートの種をまき、施設を利用するメンバーや地域の方々、その家族と徐々に共有されていく。

では、何のためにアートでやってきたのかというと、福祉施設の目指す支援とは異なり、アートは支援の一つとして誰かをいたずらに評価せず、いろいろな個性を尊重できるからだ。そういう視点が持ち込めるところは、何となく共有されてきた。

しかし指定管理者が替わるとそれを引き継いでいくのは難しい。利用者から「今までの支援はとてもいい」という声が上がって、引継ぎ先の法人が引き継ぐと頑張ってくれたとしても、本質的な部分を共有して引き継ぐのは本当に難しい。なぜわざわざアートでやっているのかという、その根っこの部分の理由を体感することが重要だが、「講師を引き継いでください、名刺交換をさせてください」と言われて終わるという事態になっていて、日々悩んでいる。その分断がすごく大きいと感じている。

自分で「謎の世直し」と言いながら、一方で「謎と言わないほうがいい」とも思っている。それは、アートのなことが表面的に面白いと評価されたとして、謎だから面白くてやっているという理解では、教育、まちづ

- ◎ 福祉とアートをコーディネートできれば溶けていく
- ◎ 正解がないこと、相手との向き合い方が個別であることは、アートの性質そのもの
- ◎ 演劇をとおして自分の外側にあるものと出会う
- ◎ 劇場運営で苦心していることと、行き場所をなくしている人たちが抱えている問題は似ている
- ◎ 劇場が劇場以外の何かになれば、それを共有地と呼ぶ



アサダワタルさん
(文化活動家／アーティスト)

くり、福祉の「本質」から遠のいてしまうためだ。本質に触れるからこそアートが導入されるべきで、その辺りのいたちごっこが悩ましく、いつも考えている。

—「福祉とアートをコーディネートできれば溶けていくはず」とおっしゃっていた。

【アサダ】福祉とアートは親和性がすごく高いと思っている。関西、関東とこの10年ぐらい福祉の分野に関わっていく中で、今の品川は初めて福祉の現場にがつり入り込んだ。自分がアーティストとしてワークショップを行うレベルとは違う目線で見えてきた所がある。

そこで感じたのは、ある意味、福祉の世界はノウハウがないということ。福祉の関係者からは「そんなことはない」と言われる可能性もあるが、自分の感覚ではそう見える。特に、障がい福祉はスタッフの経験値次第の部分がある。それは、利用者一人一人の障がいの特性があまりにも違うためだ。よって、障がい者と向き合うときのスタッフ側の佇まいは、福祉大学や専門学校で学んだことより、社会経験や今まで何を考えてきたかに左右される。その自由さは、スキルが構築できていないというより、むしろ可能性だと思う。正解がないこと、相手との向き合い方が個別であることは、アートの性質そのものだと考えられるようになっていった。

つまり、人の命に関わる危険なこと以外は、「これはいい」「これは駄目だ」という価値観に縛られずに、人としてお互いを尊重しながら、支援する側とされる側が関わっていくことが、現場では重要だと分かった時に、それは、アートをやってきた人たちが日常的に体感してきたことと同じだと思った。アートをやってきた人間が、人として福祉の支援に関わっていく際、「そういう経験は何もない」と言いながら、立ち居振る舞いや佇まいが、福祉に向いている人は一定数いる。

—「犀の角」のホームページには「自分の外側にあるものと出会う場所」「変な人でも住みやすい街に」とい

うキーワードが出ている。

【荒井】私が上田の町で劇場をやるときに、何となく感覚として持っていたのは、演劇を好きな人がコミュニティをつくることは割と短時間でできるが、逆に劇場に来る人が限られてしまうということだ。どうすれば劇場の外側にいる人とコミュニケーションを取れるかを考えていたときに、障がい者福祉施設の人や、若者から電話相談を受ける NPO の人と関わるようになった。福祉の人も、相談支援をしている人も、劇場のわれわれも、それぞれ自分たちが生きていくために、仕事としてやらなければいけないルールがある。

そのルールを守ろうとすると自分のやれる範囲では救えない人たちが大勢いる。どうしたらいいかと、「犀の角」に集まってよく話をするようになった。コロナで経済状況がより悪くなって、こぼれ落ちたところを丸ごとカバーしていく取り組みとして、集まったメンバーで「のきした」という市民グループをつくり「おふるまい」という活動を始めた。

先ほどのアサダさんの「福祉とアートが溶けていく」という話がすごく印象に残った。「のきした」の活動で、どこへ行ったらいいか分からない、家でも居場所が無く行き場所がないという子に出会った。学校でも仲間外れにされていて「どうして生きていったらいいか分からない」と言って泣く子の話を聞いていると、自分自身も演劇をつくるときや、企画をするときに、どうしたらいいか分からなくなるので、「ああ、一緒だ」と思った。何かつくるとは、分からないなりに自分の答えを探していくことだと思うが、自分が劇場を運営するために苦心していることと、生活に困った人、行き場所をなくしている人たちが抱えている問題はすごく似ていると感じる。

今、「犀の角」がやっている劇場以外のカフェや「のきした」、DVで苦しむ女性の居場所づくりを行う「やどかりハウス」などは、もともと劇場をつくろうとして始まったことだ。劇場として始めたことが劇場以外の何かになっていて、それをある種の共有地と呼ぶな

- ◎ 市民が「あれをしてくれ、これをしてくれ」という相談事を持ち込むことで、機能が拡張している
- ◎ 相談事の背景には、課題意識や、何とかしたいという思いがあるので、なるべく応えていく
- ◎ 地域の課題は、その地域の何とかしたいと思っている人が決めて対処すること

長野隆人さん
(いわきアリオス)



らば、もともとそういったところにアートが生まれてきたのだろうという思いがある。

—長野さんからは、来る者は拒まず受け入れると聞いた。

【長野】アリオスは4つの劇場とリハーサル室を持つ、舞台芸術の施設だ。ほかに市内全域を回る「おでかけアリオス」というアウトリーチが活動の軸になっている。アリオスの設置目的には当然、地域への貢献、街のにぎわいの醸成などがある。市民の中にはアリオスには来る人拒まずのイメージがあって、個人、組織といろいろだが「アリオスでこれをやってよ」という話がよく来る。それが当館が地域で生かされている要素というか、市民とのコミュニケーションを円滑にする要素になっている。震災の後、あそび工房という子ども向けのイベントが始まった。月1で市民のボランティアが、自分で使える工作や、読み聞かせのプログラムなどを持ち込んでくる。地元のカーオーディオメーカーを退職したおじさんたちが、おもちゃを修理しに来る。毎月、自由に集まってくれて、子どもたちが降って湧いたように遊びにやって来て、僕も一緒に遊んでいる。

託児のためのキッズルームという部屋が、今はコロナでおもちゃを撤去して開店休業状態だが、市内の子育て支援のNPO団体などが、「そんな状況だったら私たちに使わせてください」と週に何日かその部屋を借りて、プログラムを実施してくれている。コロナ疲れで家の中に引きこもっているお母さんが、その団体に誘われて出てきて、悩み事を話したり、他の市民と話すことで、何か癒やされて「また来ようね」と帰っていく。アート、アートした施設ではないが、その周辺でさまざまな活動が行われている。

ほかにも、アリオスでないと勉強できないという高校生などが沢山いる。ここで勉強するのはやめてくださいと言うのではなく、朝8時半から夜9時までなら大丈夫と、温かいまなざしで見守っている。

これは一例でしかないが、市民の皆さんが「あれをしてくれ、これをしてくれ」という相談事を持ち込む

ことで、少しずつ機能が拡張しているところもあるので、「文化施設は芸術文化の殿堂である」という自己定義を取らないようにしている。相談事の背景には、それぞれ持ち寄る人自身の課題意識や、何とかしたいという思いがあるので、そこになるべく応えていくことが私たちの姿勢。マーケティンググループ、広報グループとして市民の皆さんと関わりを続けて14年経つが、劇場側から「こういうふうにアプローチします」というのは逆のベクトルで、日常付き合いの延長線上で今日に至っている。

—野村さんからは、県内各地のあの人を後押しするといろいろなことが起こりそうだと伺った。

【野村】長野さんが「アイデアを持ってきてくれる人の、何とかしたいという思いに応える」と話していたが、まさにそのとおりで、僕としては、アーツカウンシルを通して、民間、地域、公共ホールなど地域の担い手をサポートするイメージで活動しているつもりだ。地域の課題は、その地域の何とかしたいと思っている人が決めて対処することで、私は話し相手になって応援することだと思う。だから、こちらでテーマを決めるというよりは、その人たちが持っているものがテーマになると思う。

そういう人たちの活動の中に、他の地域でも使えるアイデアや、活動の糸口になるものがあるので、それを、別の地域に紹介したりして、繋いでいく。

ただ、地域で実践する人たちが意識していない可能性や課題が、話をしているうちに見えてくることもある。そういう場合は、「そう考えているのであれば、こうしたらいいいのでは」と提案している。その提案もひとつではなく、たくさんする。その中から採用されることもあれば、触発されて実践する人自身が思い付いたやり口で前に進んでいくこともある。結果的に、相手が思い付かなかったことを気付かせる役割を担っているのかもしれない。

—宮城さんも、ネパール人コミュニティなど、いろい

- ◎ 自治能力とは、住民が消費者にならない力
- ◎ 社会教育とアートは親和性が高い
- ◎ 違和を感じる力、この人はどうしていたのかと気に掛ける力
- ◎ 課題を探して解決せねばと考えるのは「課題解決の呪縛」
- ◎ こうだったらいいなを考えて創っていく

るな地域の課題と向き合っている。

【宮城】 今までの皆さんの話には共感しかない。

全国公民館連合会が1967年に出した『公民館のあるべき姿と今日的指標』では、公民館の究極の狙いは住民の自治能力の向上にある、としている。自治能力とは、住民が消費者にならない力だ。つまり、サービスを提供する・受けるという関係ではなく、自分たちが主体となって地域をつくっていく。公民館は民主主義の訓練場として立ち上げられた経緯がある。自分たちで地域を治めていくということだが、地域の暮らしには生活とさまざまなことが密接に絡み合っている。例えば教育、福祉、まちづくりなどだ。いろいろな分野に分かれて対応しているのは、それぞれの課題に特化した専門性が必要だからだが、その反面、そもそも自分たちの生活から切り離すこともできない。

公民館は社会教育機関だが、社会教育とは特定の専門性を発揮するというよりも、もっと根底にある基盤をつくっていくことだと思って公民館活動をしている。先ほどアサダさんの話では、アートと福祉は親和性があるとのことだったが、私は、社会教育とアートは親和性が高いと感じている。お互いを認め合ったり、許容して受け入れて、クリエイティビティを持ってつくり上げていくことがすごく近いと感じる。

沖縄は貧困率が非常に高い。若狭公民館の周辺は子どもの貧困状況でも厳しい環境にある。外国人留学生とひとり親世帯が多くて、ある学校ではひとり親世帯

が6割に達している。その当事者や支援者とつながって一緒に地域の課題に向き合うようにしている。何かを仕掛けるというよりも、まず気付くかどうかが問題で、公的機関や施設は、違和を感じる力、人それぞれの状況を気に掛ける力を持つ必要がある。本来なら当たり前前に気付くはずだが、見ないようにする力が発達しているのだろうか、気付かない人も多い。アーティストやアート系の人たちはそういうものにとっても敏感だ。敏感だから生きづらさを感じている人も多いし、生きづらさ、生きにくさを抱えている人に寄り添う力も強いのだと思う。私はもともとアート NPO で活動した関係もあって、周りにそういうセンスを持った人がたくさんいるので、そういった人たちと協働して取り組んでいる。

地域の中で対応しなければならない出来事に向き合うとき、必ずしもアートである必要はなくて、その時々でいろいろな人や機関、状況をつなぎ合わせて活動している。アーティストの関わりが有効だと思うときは関わってもらうが、アートプロジェクトとして取り組むこともあれば、そうでないときもある。アーティストやアート系の人たちが関与するときも、その関わり方や、アートという言葉の出具合にすごくグラデーションがある。アートが見えないところで関わっている場合もあれば、アートプロジェクトになる場合もある。コーディネートと呼べるのかどうか分からないが、そういう付き合い方をしている。

3. なぜアート、文化芸術なのか

【若林】 社会や地域に対する問題意識、つまりアートを通して社会や地域の何と向き合うかについては、私は長野さんと野村さんと同じで、アイデアを持って相談にくる人、何とかしたいと訴える人たちのテーマに向き合うタイプ。

この議論で想定されているのは、アートを通じて「アート以外の」何と向き合っているかという話だと思うが、私の場合そういう境界はあまりない。アートの中

で向き合っていることもある。例えば、メインストリームではないほうと向き合っていたいとか、効率、効率と言われると、そうではないほうを見たいと思うなど。課題を探して何でも解決しなければと考えるしてしまうことを、私は課題解決の呪縛と呼んでいる。課題を解決するから価値があるのではなく、こうだったらいいなを考えて創っていくことにも価値がある。世の中は何かと社会課題解決型思考だが、そうでないほ

- ◎ アーティストのクリエイティビティに刺激された人たちが、「私たちはこういうことがしたい」と言い始める
- ◎ 「スタッフは何もしない」がコンセプト
- ◎ アーティストは状況を面白く転換する発想力がある。具現化する力も強い
- ◎ 皆がいろいろなことができるという気持ちになってくる
- ◎ アートこそ目の前の日常の生活体験の仕方から変えられる

宮城潤さん
(若狭公民館)



うにも向き合いたいといつも思っている。そういう思考を育ててくれたのがアート。

【田中】 宮城さんがアートを関わらせたほうが良いと判断した理由を聞いてみたい。

【宮城】 私はもともと学生のときに美術を学んで、アート NPO で10年活動したので、何かやりたいことが出てきたときに、「こういう人に協力してもらえたら面白いかもしれない」「こういう状況に対して、このようなことをできる人がほしい」と相談するのもアート関係者が多かったりする。だから、たまたまアートなのかもしれない。アートではなくてもいろいろなことが起きるかもしれないが、アートに関わった象徴的な事例に「パーラー公民館」がある。

報告書でも紹介されているが、若狭公民館から歩いて1時間以上もかかる離れた地区の住人から、自分のまちにも公民館が欲しいという要望が寄せられ、公園にパラソル、黒板テーブルを置いて公民館と言い張る活動を行っているのが「パーラー公民館」だ。

そのアイデアをうまく形にできる人がいないか考え、小山田徹さんをお願いした。彼はアートワークとして共有空間や対話を生み出す仕掛けをつくっているので、公民館としてありたい姿と、小山田さんが今まで蓄積した知見がうまくマッチして、面白いことがいろいろ起きた。当初は沖縄アーツカウンシルの補助金で展開していたが、今は地域の人たちが引き継ぎ、完全に住民主体で運営している。

アーティストが関わったため、ビジュアルはすごくキャッチーだし、アーティストやアート NPO が開発したワークショップは、強烈なインプットがある。アーティストのクリエイティビティに刺激された人たちが、「私たちはこういうことがしたい」と言い始める。一方で、通常は何もしない場を大事にしている、うちのスタッフはただ話を聞く。「スタッフは何もしない」をコンセプトとして徹底していた。アリオスと一緒に。何もしないと、人々から「こんなことをしたい」「あんなことをしたい」とやりたいことがいろいろ出てくる

ので、それを後押しする。場を少し整えるだけで動いていく。

課題解決とは別に、アーティストは状況を面白く転換する発想力がある。具現化する力も強い。そういう現場に立ち会っていると、それぞれが自身でもいろいろなことができるという気持ちになってくる。そういう出会いが生まれている。私たちは基本的に何もしない。「うんうん」と聞いているだけだ。

私はもやもやしたまま話をするので、アーティストとしては受け取りづらいかもしれないが、その方が力を発揮してもらえるのかもしれない。行政系の文化機関が自分たちのイメージでストーリーをつくって、それを実践する技術者としてアーティストにお願いすることが結構ある。アーティストはリクエストに応えるかもしれないが、持っている力を十分に発揮しきれていないと思う。どこかで見たワークショップと同じようにやってほしいとリクエストするよりも、こういう課題があって、この状況をどうにかしたいというところから話し合っていくと、こちらが想定していたものとは違うものが生まれたりする。でもその方がアーティストの創造力が発揮されて面白いことが起こる。私は具体的なイメージをあまり持たず、もやもやしたまま相談することが多いが、そこからアーティストがよいものを生み出してくれるので、その力を実感する。

もちろん、もやもやを形にしてくれそうなアーティストに声を掛けるには、こちらにも経験がないとできない。

【アサダ】 宮城さんと全く同じ意見だ。確かに、なぜアートなのかという部分を難しく思う方も結構多いかもしれない。

でもアートこそ、目の前にある日常の生活の体験の仕方から変えることができる。同じような日常を過ごしていても、それを感性寄りの美的な体験として、あえて言葉にすれば、再構築できる。そこに参加して、一度体験してしまうと元に戻れなくなるというか、「見て良かったね」で終わるより、自分も何かアクションを

- ◎ 自分も何かアクションを起こそうという気持ちにつながる
- ◎ アートだ、表現だというと、いろんな人を遠ざけてしまう
- ◎ アートだからできると感じながら、あえてそのことを語らない
- ◎ 生涯学習は自分の価値観を更新して、新しい自分と出会う作業
- ◎ アートと触れ合うことで、自分自身の価値観が揺さぶられて更新され、課題に気付いて主体的に取り組み始める

起こそうという気持ちにつながることが大事なのだろうと思う。

アートやアートプロジェクトという言葉をあえて使わないほうが、普段しないような考え方でもののやり方を作れる。アートという言葉を使うとき、多かれ少なかれアートというものに対する先入観が生じて、そこに引っ張られてしまう。アートにもこういうものがあると伝えるのは、それはそれで重要な役割だと思うが、日常生活や目の前の身近なことを捉え直し、そこから新しい人生観・社会観を生み出すことに目的があるなら、かえって、アートで、という言葉が邪魔になるときは結構ある。

それを自分自身が意識的に体験したのが、10年ほど前に大阪で、「住み開き」というコンセプトで家を開くムーブメントを立ち上げた時だった。自分の近いネットワークがアート関係だったから、主な参加者がアート関係で、家で上映会をするなど、いろいろな形で家を開く表現をした。

それ以降、福祉の領域から自宅を使って場所づくりをすとか、まちづくりの一環としての空き家対策や、若者のシェアハウス活動など、当初は想定していなかったアプローチで自宅を再解釈することになり、ジャンルを超えてリンクするときに、最終的にアートプロジェクトという言葉を外した。

自分の中のソウルとしてはアートだ、表現だという感覚はある。先ほど若林さんが課題解決について話していたが、家を開くことは、実はまちづくりという目的や課題解決以前に、自分の中の表現的な営みでありソウルなのだが、それを言ってしまうと、結果的にいろいろな人たちを遠ざけてしまう。福祉やまちづくりをはじめ、いろいろな分野の人たちがせっかく寄ってきてくれたのだから、みんなで「住み開き」という言葉を共有して、もっと世の中と遊べるはずだと思ったときに、アートという言葉を外すことによって、いろいろな領域にアートを埋め込んでいこうと考えた。アートだからこそのことを感じながら、あえてそのこ

とを表面的には語らずして、今までにないような新しいコミュニケーションプラットフォームをつくっていくことが大事になることも往々にしてあると思った。

—事例調査でも、アートの役割は課題解決ではなく、体質改善や漢方薬だという話が出ていたが、行政の方はアートで課題が解決すると考えたい。

【宮城】先ほど話をしたとおり社会教育施設である公民館は生涯学習の場でもある。一般的に生涯学習とは、社会状況やライフステージに対応するために必要なことを学ぶ、自分が豊かになるために学ぶ、そういうイメージだろうと思う。しかし、もう少し深読みすると、自分の価値観を更新して、新しい自分と出会う作業ではないだろうか。そこが、アートとの親和性が高いと思うところだ。これまでの日常が違ったふうに見えて、元に戻れなくなるという話があったが、自分自身の価値観が揺さぶられて更新されていくことは、アートと触れ合うことによって生まれるとことがよくある。

要するに、地域社会で顕在化している課題をアートが解決する、ということではないが、一人ひとりが更新されていくことで課題に気付けるようになって、自主的に取り組みを始め、その結果として課題にアプローチすることはあり得ると思う。目の前にある課題にお手上げだとか、蓋をしてしまわないで、一人ひとりが自分自身を更新して、新しい発想を持つことにつながっていくので、そういう経験をみんながたくさん積んでいくと、新しいアイデアが生まれるし、そこから課題解決につながる取り組みも生まれるのではないかなと思っている。

【小川】地域創造は文化的コモンズという概念を提唱していて、アメーバのような図解も示している。自分は、その議論に何か足りないような気がしてずっと考えてきたが、結局、「何を」対象にしているのかよく分からない。

コモンズとは共有財だから、それが何かを示す必要があるが、その「何を」については「文化的な営み」と

- ◎ コーディネーターは活動の中に価値を見いだして、それを活動に活かす人
- ◎ アートは何か課題を解決するための手段ではない
- ◎ 福祉的なサービスと、劇場で行われている表現活動を一緒の場所でやることで勝手に反応が始まる



荒井洋文さん
(犀の角)

書かれていてアートとはされていない。文化的な営みとはどういうことなのか。これがアートだと言って指はさせないが、何となく文化的な営みがこの辺りにあるよね、という日常の中で、「ここだぞ」と指をさすような価値を見つける係がコーディネーターの仕事かもしれない。

芸術的な考え方に基づいて価値を見いだすことはあ

ると思うが、活動の中に価値を見つけ出し、それをまた活動に活かすのがコーディネーターの一つの形ではないかと思う。こういう人たちが世の中にいたのか、面白い、この人たちと今度はこれができるかもしれないという、やりっぱなしで終わらずに発展させる回路がずっと続くと、だんだん時間が経つにつれて文化になるのではないか。

4. 演劇の力、劇場の力

— 荒井さんは演劇というものに価値を置いて活動していच्छやる。

【荒井】「犀の角」で起きていることや、「のきした」の取り組みから感じることに、今の話を聞いて感じることは、アートは何か課題を解決するための手段ではないということだ。表現された何かを後から見た時に「そうか、これが生まれたのは、こういうことが社会の課題だったからだ」と見えてくる。

「犀の角」も、後から考えて気付くことが割と多い。例えば、劇場をブラックボックスにせず、ガラス窓を付けて商店街に開き、地域の人が劇場の中を見えるようにした。これも、演劇のシーンが閉じていく傾向にあることを課題と感じていて、演劇が地域と溶けるようにしたいという思いから、結果的に窓をつけたので、順番としては逆なのかもしれない。

— やどかりハウスに居場所探しに来た女性が、別役実さんの言葉に共鳴したという話を伺った。

【荒井】 やどかりハウスは、女性が家や職場から離れて、少し休むようなサービスを提供している。その女性たちから、うちで行われたイベント、座談会、演劇の言葉を聞いて、心が動いたという感想を時々もらうことがある。それは、いわゆる福祉のシェルターでは多分起こらないことだし、福祉的なサービスと、劇場で行われている表現活動を一緒の場所でやることで勝手に反応が始まるということかと思う。これとこれは混ぜたら危険ではないか、大丈夫だろうかと思うものも

割と無理やり混ぜている。

— ST スポットという小劇場は、多くの優れたアーティストを輩出している創造の拠点である。

【田中】 地下1階の50人ぐらいでいっぱいになってしまような小さな劇場で、37年活動が続けている。劇場のアーティストと、地域の中で活動するアーティストの性質は、違うところも、同じところもある。自分の表現をただただ突き詰めていくことももちろん必要だが、一方で、誰かと関わること、目の前の人とできることを大事にしている人もいる。劇場の中で活動する全員が全員、外へ出られるとうことはなし、逆に、地域で活動する全員が全員、劇場で何かできるわけでもない、と最初は思っていたが、最近は両方の活動を行うアーティストも多い。

ここ数年、西井夕紀子さんというモモンガ・コンプレックス等に楽曲を提供している作曲家と障がい者施設へ出向く機会があった。劇場で活動するアーティストが地域の現場でも活動している例だ。今年の9月ごろに劇場のオープンデーという形で創作の場を設けた。そのときは精神障がいの当事者バンドと一緒に共演して、ただただ創作の時間をつくった。少しずつ往還できているのが面白い。劇場だからできることがあるし、外に出て、いろいろな人との関係の中でできることもあると思っている。

一番は、目の前の人をきちんとリスペクトして、何ができるか考えるということ。先ほど、もやもやを共

- ◎ 選択肢をどれだけ見せられるか。それが施設の可動域を広げる
- ◎ 施設側からの取り組みを続けるだけでなく、地域からの提案や誘いに応えることが結局地域にとって一番いい
- ◎ 今までと違う付加価値を付けることで、触媒効果がもたらされる
- ◎ 能動的な関わり方を設計するのがコーディネーターの役割
- ◎ 継続していくことで地域の基礎体温が上がる

有してくれる人の話があったが、この人が障がい者だけではなく、この人と何をしたら楽しいかを考えられる人であれば、地域で一緒に活動できていると思う。

— 長野さんは、劇場で芸術を扱うことと、地域と芸術をつなぐ仕事の関係をどう考えているか。

【長野】世の中の9割以上的人是は劇場のことを有名なアーティストやタレントのお笑いライブなどを見に行く場所だと思っているが、こういうこともできる、こういうことも可能だという選択肢を、どれだけ見せられるかが重要だと思っている。それが施設の可動域を広げることになる。

いわき市の面積は東京23区の2倍、1,230平方キロメートルあるが、その中に劇場は1つしかない。劇場から60キロ、70キロ離れた所に住む市民もいる。そういう人たちに「ここへ来てくれれば何かする」と言うだけでは、絶対に会えない。広報紙がそういう方達へのアプローチの役割を果たしていた時期もあったし、開館前から「おでかけアリオス」も続けている。そういった施設側からの取り組みを続けるのもいいが、地域からの提案や誘いに、「はいはい、分かりました。それを見ましょう」と応えることが、結局は地域にとって一番いいことかもしれない。先ほどの来る者拒まずという話だ。

いわきには駅前のLATOVと、小名浜のイオンと、その中間地点とに3つのショッピングセンターがある。

今まで競合関係にあったが、コロナで一緒に客を増やさないと思えなくなると考えを改めた。そこで3つが連携した取り組みにアリオスも参加するように依頼が来た。具体的には、高校生のフラダンスのイベントをやりたいので、その招聘、コーディネートと現場対応をしてほしいというものだった。フラダンスは商業施設の人たちが考えたアイデアで、勧進元は商工会議所だった。アリオスがフラダンスで人を呼べる施設だと認識しているのであれば、それはそれとしてやらせてもらおうというということになって、人がいっぱい来た。経済的な効果があったかどうかは別にして、そこに来た人たちが喜んでくれて、商業者さんから「アリオスはこういうこともやってくれる」とアリオスを見る目が変わり、各所から「アリオスは相変わらず敷居が高いですね、こういうところにもっと出てきて、やってくれないと困りますよ。ところで、次は何をしてくれますかね？」という本音が出てきた。

それで「今まで14年間、威張っていて申し訳ございません」と「おでかけアリオス」を持っていくことで、商工会議所やショッピングセンター、ひいては地元の皆さんが喜んでくれるのであればいい。

いわき市内の湯本温泉の老舗旅館に、忍者修行のワークショップを持っていったり、弦楽四重奏団の公開リハーサルを持っていったりもした。それぞれの土地でアリオスがやろうとしていることは、今までと違う付加価値を少しでも付けることで、触媒効果がもたらされること。

5. 市民のポテンシャルを引き出して、結果につなげる

【長野】こういう要素が町に加わっていくと、今までとは違う地域の魅力が見えて、町の人たちも何かできることがあると分かってくれる。すると、町の人たちは「次に何をしてくれるのか」とお客さんの立場になるが、そのときに「お客さんではなくもっと主体的に関わってみませんか」と引っ張り出す必要がある。そういう能動的な関わり方を設計するのがコーディネーターとしての役割だ。同時にこちらが楽しめた

いからということでもある。楽しめて人々に能動的に関わってもらい、地域から地域への貢献を引き出そうとしている。

先ほど、「漢方」という話があったが、アリオスの活動は、地域課題に対しての対症療法や特効薬のように人口が急増したり、商業施設の売り上げが何%も上がったりはしないが、継続していくことによって確実に地域の基礎体温が上がる。こういったイベントがある

- ◎ 人が持っているポテンシャルを引き出し、結果につなげる
- ◎ 人が内に持つ対処し得る力に向けて仕事をする
- ◎ 行政自体が納得するには、アートに対する先入観を更新しなければならぬ
- ◎ アートは別の思考方法を提示したり、価値観を言葉や形にして見せることが上手
- ◎ アートに身を置くコーディネーターは価値を見つけるのが上手

から、みんなで準備しよう。来る人に喜んでもらうために、これをやろう、あれをやろうというものを少しずつ引き出せるものとして、芸術、アートの営みを持っていくことの意味が、私の関わる「いわき」という地域にはあると思う。

— 野村さんは演劇でドラマツルクの仕事をしているが。

【野村】ここまでの話でアートか、アートではないか、あるいはアートの内か外かという話が出ているが、振り返ると、自分自身は、人が持っているポテンシャルを引き出し、結果につなげることをしてきたと思う。それは相手がアーティストであっても同じだったし、今、関わっている文化芸術団体や地域であっても同じだ。自分が何かをするのではなく、相手が何をする、そして、相手が続けていける、相手が納得できる、そういう選択肢を提案できるかどうかが、自分が果たさなければならない役割だと思っている。このことにアートの内と外はない。アートにおいて考えること、それが導きになる感覚は自分の中にあるが、アートというもので区切りたいというよりは、携わっている人が内に持つ対処し得る力に向けて仕事をしたいと思っている。

もう一つ、アートが持たれている先入観に対して逆張りするという話が出たが、「別の仕方では説明することを、どれだけ忠実に、有効にできるか」だと思っている。これは私が今、役所の中で働いていることに関係するかもしれない。役所の職員も私の支援の対象で、例えば財政から何か言われたときに、担当職員が納得して、自分の言葉で「こうだ」と押していける考え方を提供する必要がある。表面的な言い方、お題目を教えるだけでは、結局、部署を越えた伝言ゲームの中で骨抜きになっていってしまう。あるいは、どこまで飛距離のあるフレーズを自分が生み出せるか、仕事の中でいつも考えている。

支援の主体である行政自体が納得できるには、アートが持たれている先入観を更新しなければならないと思う。アート関係者も巻き込んで、先入観を更新して、

納得できる選択肢を示したいと思っている。

【若林】すごく共感する。野村さんは「先入観を更新する」という言葉で語ってくれたが、「別の思考方法の提示」ということに尽きる。

結局、コーディネーターも、アート自体も、すべて地続きのところにいる。今日は福祉、今日は公演、今日は地域と明確に分かれているのではなく、地続きの中で動いているのだと思う。

最初にアサダさんが言ったように、福祉とアートには親和性の高い領域がある。いわき市では「igoku(いごく)」というユニークな地域包括ケアを推進していて、生と死がテーマの祭典「いごくフェス」にはアリオスも関わっている。地域包括ケア推進課の老いや死を考える取り組みと上手に結び付いて、高齢者福祉の領域と地続きになっている。若狭公民館では防災とアートが地続きに結び付いている。親和性のある領域を否定しないで、そこに価値を見つけると小川さんが話していたが、アートに身を置くコーディネーターはそういう価値を見つけるのが上手なのだろう。外から見ると、別の領域へ出掛けていって結び付いて、何か課題を解決しているように見えるかもしれないが、荒井さんも言うように、実際は地続きの活動だから、ご当地人たちは結果的にそうなったと思っているのだろう。コーディネーターなのだと意識せず、日々の仕事の延長線上でやっていることも多いのではないかと感じた。

アートは別の思考方法を提示したり、価値観を言葉や形にして見せたりすることが上手。結局、野村さんが言うように、人と向き合って、その人がこうしたい、こうだったらいいと望むところへ向かう作業をサポートしているということなのかなと思う。

【アサダ】若林さんが話していた「このようなやり方もあるよ」と提示することは重要だと思う。ただ、別の答え方、別のやり方があるときに、世の中では課題解決が根っこの部分に既にインプットされていて、物事を考える上でそのことに無意識に引っ張られてしまう。例えば、まちづくりという領域で、こういうやり方で



若林朋子さん
(プロジェクト・コーディネーター)

- ◎ 根っこの部分の課題解決に無意識に引っ張られてしまう
- ◎ アートは課題解決の前の部分の話をしている。課題解決と位相が1つ違う
- ◎ 新しい自分に出会ってもらって、価値設定を変える
- ◎ 課題解決と価値創造は裏表。両方から説明すれば、アートの価値が広がって見える

コミュニティに関われば、課題解決するけれど、実はアートや表現を通じて「こういうやり方もある」と提示すると、その二つは、まずもって並ばない。なぜな

ら、アートは課題解決の前の部分の話をしているからという気がしている。

6. 課題解決と価値創造

【アサダ】このやり方に対してオルタナティブなやり方があるという言い方だけだと、課題解決の延長線上に別の方法論があるという誤解は解けないままのような気がする。ただ、その誤解がある状態の方がこの2つの比較が一般的には分かりやすいと思う。

しかし、本当はそこを伝えたいのではなくて、そもそも、課題解決から物事を捉える見方そのものと、違うやり方があるということで、そのことは課題解決と同列に並ぶのではなく、位相が1つ違う段階のことだよ、と言おうと思ったとき、途端に言語化しにくくなって、分かる人しか思考が通じなくなる。そのことにずっと悩んでいる。

【野村】今の話は多分、アサダさんの仕事が課題解決の世界にどっぷり漬かっているからだと私からは見える。その時々で、もやもやしているものを課題化しなければならなし、解決すべき課題だと思い込んでいることを課題ではないと再設定することも必要。それがコーディネーターの定義しづらさとも関係していると思う。投げられてきた球に別のキャッチの仕方があるという感じだろうか。

僕は文化事業をやる人たちから相談を受けると、必ず課題の設定をするように言う。自分が解決したい課題で構わない。誰かの課題でなくてもいい。作業仮説として課題を設定することで、僕との間では、何を中心にしてどこへ向かいたいのか、というストーリーと一緒に考えることができる。課題を解決しなければならぬかどうかも含めて考える。

一方で、相手が「こういう課題解決を」と、どこかで聞いたような案を持ってきた場合は、むしろ、課題が出てくる元はこういうことだから、だとすれば「こういうやり方も、こういうやり方も、こういうやり方も

ありますよ」と言って混乱させて自分で考えてもらうこともある。この両方の戦法があって、そのことを通して新しい自分に出会ってもらおうというか、価値設定を変えると言えればいいか。

【アサダ】マインドセットをいったん混乱させるということか。

【野村】マインドセットから変えていかなければならない。そのときは自分で考えてもらう必要があるし、自分が見ている景色の中で、できることを積み上げていってもらう。そうでなければ継続しない。その辺りに私としては自分の役割を見ている。

【若林】私は課題解決と価値創造は表裏一体だと思っている。一見、課題解決型でも何らか新たな価値を生み出していたり、逆に価値創造型が誰かにとっての課題解決につながっていたり。両面を見ることができると思う。

課題解決と価値創造を「ばきっ」と分けようとする、アートの説明なんて本当に難しくなってしまう。両方から説明すれば、アートの特徴や価値がぐっと広がって見えるだろう。「アートが別の領域と接続すると、何かが解決されますよ」と無理に訴えなくていい。「裏返せば価値創造／課題解決でもあるんですね」と言えるようになればいい。

【野村】付け加えると、最近は課題と一緒に、行政の人也好んで使う「アウトカム」という言葉がある。私は地域の人や小さな文化芸術団体を相手にしていると、「課題解決」と同じで、「アウトカム」と言った途端に自分と切り離されたことと捉えられるので、「どうなったらいいと思うか」と緩い形で聞くことにしている。欲しいのは、その人が取り組んだ先に、ある種、現在と

- ◎ 欲しいのは、その人が取り組んだ先に、ある種、現在とは違う何かが実現された絵
- ◎ 一番大事なのはインカム。活動の広がりの中から次のインカムをつくる初期設定に注力する
- ◎ コーディネーションのキーワードは「編集」
- ◎ インカムという見方で地域資源を見る



小川智紀さん
(S T スポット横浜)

は違う何かが実現された絵だ。

【小川】 インプットがあって、アウトプットがあり、その先にアウトカム、あるいはインパクトがある、というのは、だいぶ流通してきた考え方だと思う。実は、そのロジックモデルには含まれていないが、一番大事なのはインカムだと思う。

私は活動にいろいろ広がりが出てきたとき、その中から次のインカムをつくる可能性に目を向けている。たとえば、精神障がい者の活動の中に、性暴力サバイバーの取組みと共通する世界が見出せたりする。多くの人が見向きもせず、関係者も特段意識を向けない瞬間に対して「これは面白いよ」と見だし、次の展開を始めるところに意義がある。その先は成り行きで、プログラムに関してはなるようにしかならない。それで何かが出てきて、どんな効果があったかに興味のある人は多いが、むしろ僕は「あの人をアーティストに仕立ててプロジェクトを回したら、絶対に面白くなる」という、その初期設定の部分に注力している。だから、「評価はどうなった、数字はどうなった」などと言われても、仕事だからやるけれど、そこに第一の関心はない。

むしろ、始まりのお金以外のところで、「地域資源を活用した何々事業」と言った場合、地域資源とは具体的に何なのか、「その辺りをぶらぶらしている、あの引きこもりのお兄さんに詩をつくってもらってみたいじゃない？」という、頭の部分の議論がもっと豊かにならないと駄目だと思うし、役所にもそこを分かってほしい。インカムはお金のことだと思っている人がいるかもしれないが、僕らはお金以外の価値をつくっているというか、見だしてきて、「お金以外の資源はこれですよ」というのを事業の中から引っ張り上げていくことが、仕事だと思っている。

【野村】 「インカム」は素晴らしい視点。感動した。最初に田中さんが言っていたように、隣に「カブカブ」があるのに、そのリソースに地域の目は向いていないということを、スタートするときに押さえられるかど

うかが、その後の継続性に関係してくる。

【アサダ】 小川さんの言うインカムというのは、地域の中にこんな人がいて、あんな人がいて、あんな怪しい場所もあるということだと思う。田中さんのお話の「カブカブ」と小学校は、コーディネーションによって価値が生まれるのだと思うが、そのコーディネーションで何をやっているかのキーワードは「編集」だと思う。編集の中の一作業というか、新しい価値をつくるために価値を編み直していくことだなと考えたとき、インカムという見方で地域資源を見ることがすごくしっくりきた。

【若林】 コーディネーターの立ち位置や仕事をロジックモデル的に考えれば、例えば野村さんが誰かに相談を受けたとして、野村さんがいろいろな世界から持ってきて相談者に提供する資源がインカム。それを元に相談者が自らの資源をインプットして、何かを自分のところで生み出したものがアウトプット。そのアウトプットをより広い範囲、社会につなげて広がっていくのがアウトカム。例えば、宮城さんがアート×防災を公民館の領域に広げていったことがアウトカム。アウトカム、インカム部分の循環をつなぐのがコーディネーターのかなと、今の話を聞いていて思った。

【荒井】 先ほども言ったように、課題や悩みがあって何かが始まるというより、実感としてあるのは、できてしまう、生まれてしまうものが、どういうものになって、その結果、価値が生まれてくるというような、後から何かが分かることの方が多い。

だから、こういったものをつくりたい、こういう人でやったら面白そうだと考えても、結果を書けないからすごく難しい。でも、そういうものが生まれることをお手伝いしている、一緒にやっているという感覚はある。抽象的になるが、この間も「のきした」の人たちと話をしていた時に、今ここで話している場、人と人の間にある場が何かになっていく、という話になった。

自分でよく使う表現で言えば、コップから溢れてく

- ◎ 溢れてくるものをどう受け止めて、どうつなげるか
- ◎ 「個人の自治」まで考えて文化をやっていく
- ◎ 別の力が蓄電される場。緩さや余白があって名付けようがない場、アートのものを軸にした拠点
- ◎ 公民館を無目的でいられる場に変えたい
- ◎ あることを目的に行くと、それ以上のことが生まれにくい
- ◎ 市民をサービスの消費者にさせない

るものを受け止めて、受け止めたものが表現になって、それを歴史的文脈や合理性と合わせたときに、表現、文化、芸術という言われ方をするのもかもしれない。人それぞれに溢れてくるものはいっぱいあるので、溢れてくるものをどう受け止めて、どうつなげるか。それを同じお皿に入れたり、合わせたりしていることをやっているのかなという感覚がある。

【野村】 先ほど宮城さんは、自分のもやもやをアーティストが形に変えてくれると話したが、そういう「逆コーディネート」とでも呼ぶべき姿勢が荒井さんと共通すると思う。荒井さんがもやもやしているから、周りが「こういうのはどう？ こういうのはどう？」と言ってくる。場を持つ人がそういうあり方をするので、提案する側は投げやすくなると思う。何かして喜んでもらいたいし、実際に喜んでくれるという、合気道のような逆方向のコーディネートのあり方というものもあるのかなと思った。

— 以前、荒井さんは「犀の角」をみんなが勝手に使い始めたと話していた。

【野村】 そうなっていると思う。

【荒井】 むしろ最近では、「荒井さん、そうじゃない。こう使うんだ」という感じになっている。

【野村】 なぜアートなのか、で思い出したことがある。「のきした」に関わっている上田映劇の直井恵さんがやっている「うえだ子どもシネマクラブ」でのエピソードだ。学校のソーシャルワーカーが家の玄関まで行っても、部屋の中にいる子どもに会えなかったが、その子が自分で「うえだ子どもシネマクラブ」に行くと決めて、映画館のロビーでソーシャルワーカーと初めて対面するということが起きている。ここに文化芸術の持つ、受ける強みがある。本人がそうすると決めて、自分の力で成し遂げる。

「個人の自治」まで考えて文化をやっていく。長野県は「学びと自治」をテーマにしている、着任するときに、私もそう考えたのを思い出した。

【アサダ】 今の「個人の自治」は、母親やソーシャルワーカーが普段担っている社会的な役割を、逆に引剥がさないとできない。引剥がして余白が生まれるところ、生まれやすいところが、「犀の角」や宮城さんの公民館だと思う。自分が担っている社会的な役割を語らなくても、ある程度は済むような場所で、そこそ別の力が蓄電される場になり得るように感じる。最初に宮城さんが言っていた「緩さ」とか、ルーズであって、余白があって、名付けようがないような場、アートのものを軸にした拠点というのは、恐らくそういう力を内包している。

【小川】 パーラー公民館の発想はすごいですよね。楽しいし、面白いし、しょうもないし、くだらないし、でも、やはり魅了されますよね。

【宮城】 公民館は目的を持った人が集まる場になっていて、実はそこを変えたいと思っている。無目的でいられる場、そこにそのままいてもいい場が本来あるべきだと思う。そこで、たまたま出会った人や出来事から、何かしたいという気持ちが生まれて初めてことが起こる。あることを目的に行くと、それ以上のことが生まれにくい。

先ほど話に出た余白のある場をつくるため、市民をサービスの消費者にさせない公民館にしたい。そう思っているけど、つい学びの場や機会を一生懸命に提供してしまう。そうではない場をつくるチャレンジをしたいという思いが、ふつふつと湧き続けている。

「パーラー公民館」の実践は、公民館のない地域の人から、公民館が欲しいと言われたときにチャンスだと思った。公民館に求められる「つどう・まなぶ・むすぶ」役割、機能さえ持てば、建物がなくても公民館と言って、そこで地域とつながったり、自主的にアイデアを出したりして、活動するきっかけをつくっていく。

自分たち自身のチャレンジとして、公民館のあり方への問題提起と、地域コミュニティのありよう、いずれにもアプローチしたいという思いがあった。そこにはアーティストに非常に重要な役割があったし、もや

- ◎ アートの内と外に関係なく、ここで起きている出来事の評価があり、信頼関係がある
- ◎ 幸福追求権としてのアートと生存権のためのアート
- ◎ 震災復興の時には幸福追求権と生存権の境目がなくなる
- ◎ 市民の人たちが助力してくれる動き

もやに対しても形をつくってくれた。小山田さんだけでなく、いろいろなオープンソースをもっているアート NPO のワークショップの手法を借りて展開もした。

【若林】 宮城さんの取り組みは公民館の世界では大変な注目をされていて、公民館の OS を新しく更新したのではないかと驚くぐらいだ。

【宮城】 アートの内と外という話があった。私たちの生活と地続きの中で、「これがアートだから」「アートとはこんなものだ」という先入観があることよりも、ここで起こっている出来事や、わくわくしている人たちの様子、町が動いている様子を実感してもらうことがとても大事だ。地域の人たちは、パーラー公民館がなくなったら困ると、今は自分たちで動き始めている。那覇市の行政も、若狭公民館の取り組みを非常に高く評価してくれている。文科省や公民館業界でも評価されるようになると、事実として良いことをしているな、という雰囲気が出てくるんですね。私は外で話をするとき、もともとはアート NPO にいたことを必ず言う。そうすると、何となく「アートってすごい」という目で見られたりする。

アートの内と外に関係なく、ここで起きている出来事の評価があり、信頼関係がある。私は行政職員それぞれに対して、できる限りのことは協力するように心がけている。コーディネーターはそういう関係性や信頼関係をつくることが大事で、それが評価ともつながっていると思う。実現させるためには、どういう振る舞いをするかは結構重要になる。

【小川】 最初に僕は文化権の話をしたが、今の文化は文科省、文化庁の社会教育部門から育ってきたものが主流で、幸福追求権としてのアートだと思っている。しかし、時々、生存権の領分に触れることもあり、アートや表現の場がないと死んでしまう人がある。表現を抑制されると自分が自分でなくなるのだ。生存権のためにアートをやっていると言うのは面はゆいが、僕ら

は確実にそういう人たちと出会っているので絶対に撤退できない。どうしても、ここをやらなければならなくて、それを伝えるのはすごく難しい。

アリオスの震災復興の本を読んで、震災のときは幸福追求権と生存権の境目がぐちゃぐちゃになっていると感じた。施設として生存権の部分、今を生きていくための部分と、いろいろなところへ出掛けていくおでかけアリオスで「楽しいよね」と思わせる部分を持っていて、この両輪がフルセットでアリオスに備わっているということですよ。

【長野】 それほどの施設ではないですよ（笑）。自分たちが課題解決して差し上げようというようなことは、おこがましくて言えないという所はある。むしろ、お役にたてることがあれば、求められればいくらかでもやらせてもらいますし、それで市民の方が楽になるのであればと思います。

僕は公を背負っているし、行政の末端として、市民に対してレベルの高いものを提示する責任がありますが、質のあり方に関しても結構突っ込みが入り、たかかれたりする場合も多い。建物は立派だが欠点や課題もいっぱいある中で、市民の人たちが「ここは私が手を貸そう」「それはあなたの考え過ぎだ」と助力してくれる動きが最近は出てきている。

現在、アリオスコミュニティという市民主導の取り組みをやっているが、市民の皆さんから、「アリオスのここがもったいないくない？」「こういうこともできるのでは？」という声を掛けられる場面が増えてきた。

オープンして15年で、予算もスペックも恵まれた状態から、持続可能な施設運営をあと45年位は続けなければならないときに、施設や運営に課題があることによって、市民の皆さんが手を差し伸べてくれたり、一緒にやって行こうと言ってくれる環境はすごくありがたい。誰かの課題を解決して差しあげられるかもしれないが、一方で、自分たちの課題を埋めてくれる存在がある。互いの弱みを共有しつつ、持ちつ持たれつの関係性を大事にできるといいと思っている。

- ◎ 施設に課題があって生まれる市民との持ちつ持たれつの関係性
- ◎ 優れたコーディネーターはメディア
- ◎ 周りから見て自然で、必然に思える水路付け
- ◎ 雑談がコミュニティの日常を複層的に支え合う
- ◎ なにげない雑談が場を動かしていくエンジンにもなるし、実は支援にもつながっている
- ◎ 「相談してもいいよ」と旗を掲げることは大事

7. 雑談・相談から始まること

— 余白や決めないことという言葉が出ている。事例調査で、複数の方々から雑談の重要性や、相談に乗ってあげるという感覚が大切だと伺った。

【小川】 雑談や相談など流れていってしまうものに対して、自分がコーディネーターとして真正面から向き合う主体だと思ったことはない。格好良く言えば自身はメディアだと思っていて、優れたコーディネーターはみんなメディアに見える。例えば若林さんは、若林さんが何かやっているふうには見えない。若林さんが何かをつうと右から左へと動かす。そう言うに変だが、中間支援の仕事をした場合、相談のふりをして雑談しながら、いろいろたまっているものをどうにか順番に流していくことは、すごく重要だと思う。

つまり、中間支援は問屋で、問屋に注文や在庫が積み上がれば止まってしまうから、次から次へと流していく。コーディネーターは無色透明のように見えるが、そこでは確かな水路づけをしていく。それが周りから見て自然で、必然に思える水路付けが必要だ。問題を解きほぐすために雑談、相談から入るのはよくあるパターンだと思う。

【アサダ】 東京都のTURNという企画で、7月ごろから世田谷にある精神障がいの方の就労や居場所となっているハーモニーという施設に僕自身はアーティストとして月に何回か通っている。みんなで写真や音楽のスライドショーのような映像の作品をつくるのだが、たまたま昨日がその発表会だった。今までハーモニーの現場は、普段だったら、20名ぐらいのメンバーが2フロアに分かれて、各自いろいろな所で、何をするでもなく座ったり、コーヒーを飲んだり、誰かとしゃべったりするが、それがコロナ禍で一変した。

本来は、朝10時から夕方4時までいて、ご飯も一緒に食べたりするところだが、人がかぶらないようにするために、3人まで1時間半ごとに交代して、みんな帰っていく。一部はオンラインで、「元気？」と生存確認の

ようなやりとりをした。

コロナ前は、こちらはこちらで、あちらはあちらでという具合にいろいろな所でしゃべっていた。スタッフとメンバーのやりとりだけでなく、メンバー同士のやりとりなど、もろもろを含めた雑談がコミュニティの日常を複層的に支え合っていた。そういう場の在り方が少しずつ変わってきている。

取りあえず、今はコロナの状況がやや落ち着いてきて、あちらでもしゃべって、こちらでもしゃべってというのは久しぶりに見る光景だと誰もが話していた。目的を持った部屋分けはできても、自動的に誰かと誰かがしゃべっているところへ、誰かが近づいて、またしゃべる。気が付いたら誰かがトイレに行っている。そういうことが場を動かしていくエンジンにもなるし、実は支援にもつながっているのだろうとまさに話していた。そういう部分が、先ほどの余白や、無目的なところから何か生まれるコミュニケーションに、本当につながりがあるのだと思う。

【宮城】 「相談してもいいよ」と旗を掲げるようなことは大事だと思っている。例えば沖縄は離婚率が全国で一番高く、夜の街にも母子世帯が多い。参加者が集まりにくいのが原因なのか、公的機関でも母子世帯を対象にした講座はあまりやっていないようだ。しかし、そういう講座を公民館でやると、シングルマザーに目を向けている人がいる、目を向けている施設があると分かる。在住外国人に向けた取り組みを一緒にやることで、当事者はもちろん、関わる人たちもあそこへ相談に行けると分かるし、支援側もここに来ればいい。そういう活動を始めると、いろいろな人が情報や、やりたいことを持ってくる。相談に来てもらわないと雑談はできない。相談というか、まず来てもらう。あるいは出掛けていって話を聞くのも大事だと思っている。

私が前島アートセンターで活動をしていたときは、行政や企業からの資金援助は全くなく、手持ちで運営

- ◎ 地域の中に居場所がなさそうな人たちの居場所
- ◎ 来てもらうために、入りやすく、抜けやすくすること
- ◎ いろいろな人が入りやすい仕掛け、しつらえ
- ◎ 突き詰めずにほどほどにすることで話が始まる
- ◎ 場づくり自体をアートと捉えて焦点を当て、初期設定に力を注ぐ
- ◎ 場とは受け入れもするし、出て行くもするという双方向的なもの
- ◎ コンプライアンスが目的化され、聞く姿勢が弱くなっている

していたため、超貧乏だった。そこに夜になると家に誰もいなくて、居場所がないような小学生が小銭を持ってホットサンドを食べに来たり、昼間から酔っぱらったおじさんが入ってくることは日常茶飯事で、地域の中に居場所がなさそうな人たちの居場所になっていた。何となく入って来られる、そういう緩さがあった。困ることも多かったが、そういう場は大事だと思っていた。

公共施設ではそういった人たちをあまり見ない。時間も経済的にもゆとりのある人が、趣味の活動をするために出入りしているように感じて、公がやるべきことは何なのかという「もやもや」から、誰をターゲットに税金を使うのか、憤りのようなものがあった。公民館はもっと、施設の外にも目を向けて、従来の活動よ

りも拡張した取り組みもできることを発信したい。公民館そのもののあり方を問い直すこともモチベーションになっている。発信することで、同じ問題意識を持っている人が顕在化され、そのテーマに関心のある人たちが来やすくなる。こちら旗を立ててみたものの、実際はよくわかっていないということがある。でも多様な人が来るようになり、そこで対話しているうちに状況が変わってきて、次の展開に発展することも多い。

場を持つときにはどういう場を設定するのかということ、来てもらうために、入りやすく、抜けやすくすることを意識している。相談や雑談から何かが生まれるためには、そういう環境をつくることがとても重要だと思っている。

8. 場づくり、しかけづくり

【荒井】今の宮城さんの話に私も共感するところがある。僕自身は相談を受けることはあまりしないが、「犀の角」を場として、いろいろな人が入りやすい仕掛け、しつらえをするように努めている。劇場と言っているが、法律的には飲食店の形態としてやっているし、劇場はゲストハウスのロビーでもあり、カフェでもあり、やどかりハウスでもあり、同じ場所にいろいろな機能があることで、同時にいろいろな人がその場にいるという状況になる。僕がそのようにコーディネートしているというよりも、勝手に人が結び付くことが起きているなと思う。最初はゲストハウスと劇場を一緒にすることで、地域の人とアーティストやゲストハウスのお客さんとが出会えるといいなと思っていたが、コロナによって旅行者が少なくなって、地域の人と、地域の中で増えてきた困窮者が勝手に結び付き始めている。

長野の上田の方言で、「ほどほどにしておきなさい」という意味の「なから」と、「中途半端なやつだ」という意味の「ちゅうっくらい」がある。「犀の角」は劇場としても中途半端で、カフェとしても中途半端だ。一応コーヒーは出せるが、難しいカクテルを注文されると、お客さんに教えてもらうこともある。お互い突き

詰せずに「ちゅうっくらい」「なから」にしておけば、話が始まるという、うちの場合はそういう雰囲気になっているかもしれない。

【小川】アサダさんが10年位前に言っていた、場づくり自体をアートと捉えないとダメだということを、考えながら活動してきた。要は場づくりに焦点を当てるということ。それが課題解決につながるか、価値創出につながるかはさて置いて、初期設定に力を注ぐ。「住み開き」も同じだ。「住み開き」をして何になるのか。それぞれが考えればいいこと。そういう焦点の当て方はやはり正しかったと僕は思う。そういう視点でコーディネーターはみんな動いていけばいい。

【野村】今までの話は全くそのとおりで、場とは何かという時に、一方的ではない関係で、受け入れもするし、出ていきもするという双方向的なもの。能動、受動、どちらもあるし、中動態があるとしたら、そういう状態もあると思う。

そうした時、今、公共ホールや行政で起きていることは、コンプライアンスの目的化だ。本当は目的を実現するためのコンプライアンスであるべきなのに、コンプライアンスが目的になって、それを実現しようと



野村政之さん
(長野県文化振興課)

- ◎ 公共ホールは自らの課題を市民に知ってもらって、市民に協力してもらおう
- ◎ 芸術文化、アートはコミュニケーションを構築する場になり得る
- ◎ 人口減、税収減にどう対峙するか、思想が必要だ
- ◎ 雑談なり広聴という観点から、深く聞くこと
- ◎ 一人ひとりのポテンシャルを引き出すコーディネーター

している。行政から外注や委託、指定管理に出してい
たら、お金をを出している側の意見が強くなり過ぎてし
まって、その結果、先ほどの話で言えば広報に対して
広聴があるべきなのに、聞く姿勢がすごく弱くなって
いる。役所側から見ると、聞いてしまったら答える必
要が生じるが、答えるリソースがないと自覚している
ため、聞けなくなってしまっている。これが今、本当に
世の中の問題だと思う。

今、形式的にコンプライアンスを示すための仕事が
あまりにも増えすぎて、役所や公立機関の人たちも、
どうすればいいのかと思っているだろう。そういう状
況を緩和するためにも、先ほど長野さんが言ったよう
に、公共ホールは課題だらけの部分で何かの方法で市
民に知ってもらって、自分たちの共有財産だ、という
ことでもって市民に協力してもらおうという振る舞い方
をすべき局面に入っている。にも関わらず、行政の中
では、いまだに行政改革という形で自分たちの持つ力
を振るって予算を切っていくことに、達成感を持って
いる気がする。

指定管理者と役所の間にコミュニケーション不足が
ある。市民に助けてもらえる可能性があるのに、指定
管理者は全部を役所との間で解決しようとする癖があ
る。逆に役所は、あそこがダメだ、ここがダメだと、一
方的に役所の基準で切ってしまう。昔はそれでもよか
ったかもしれないが、それは、ある種の社会の「成長」
をイメージできたからではないか。人口減、税収減に文
化政策・行政全体がどう対峙するか、思想が必要だ。

今は課題解決が課題になっていて、課題解決がすべ
てになってしまうと、それこそどういう目的で、どう
いう役割の人が、どういうパフォーマンスをするのか
に皆が囲い込まれて、雑談もできなくなる。どうとい

うこともない意見をどちらも言い合う状態を雑談だと
すれば、そういう状態がどうやって行政と公的機関、
公的機関と市民の間に作れるのかを本気で考えないと
いけないし、一応そういう仕組みにはなっているはず
なのだから、そこを認識してやれないのかと真剣に考
えたいと思っている。

【長野】 「行政」対「公立文化施設」対「市民」とい
う構図がまだあって、行政がパブリックコメントを取
っても、それを生かすつもりはないという姿勢が見え
れば、市民は不信感を持ってしまう。雑談なり広聴と
いう観点からすれば、何にしても深く聴くことだと思
う。生かせない意見ばかりではないはずだ。こちらと
しては、こういう生かし方も、ああいう生かし方もあ
ると提案しているのだから、それを軌道に乗せるなり、
事業化するなり、選択肢の見せ方があるのに、杓子定
規な対応になっていることが、いろいろな所で軋轢を
生み出している。結局、行政が共創するつもりはある
のかどうかという問題だ。

ただ行政に対する批判を続けて敵対関係に陥るの
ではなく、譲れる場所があるかもしれない、ここは一緒
にやれるかもしれない、知恵を出せるかもしれない、
というコミュニケーションを構築する場に、芸術文化、
アートがなり得る。そこから未来を切り開く一つ手掛
かりが出てくるのではないかと思う。

【野村】 それがまさに文化的コモンズのビジョンなの
ですよね。行政、公的機関に役割を持たせ過ぎてもバ
ランスが悪い訳で。その辺りの仕切りが立ち過ぎてい
るところに、コーディネーターは何かコモンズとし
ての場をつくっていかうとしている。仕切りは小さな
ものから大きなものまである。

9. コーディネーターが大切にしたいこと

【宮城】 考え方を転換する必要がある。先ほど野村さ
んが言っていたように、一人ひとりのポテンシャルを
引き出すことがコーディネーターの重要な役割や資質

かもしれない。アサダさんも福祉の分野で、ノウハウ
が蓄積されていないと話していたが、実際に一人ひと
りの経験値によっていると思う。コーディネートの仕
方もそれぞれの状況によって変わり、マッチする人、

- ◎ 人によらず、同じようにできることを基準にすると、低いところに合わせなければならない
- ◎ 凸凹がある前提でどのような仕組みを作れるかを考える
- ◎ コーディネーターの存在が大事だという共通認識。考え方のシフトチェンジが起きる場づくり
- ◎ クレーマー化する消費者目線ではなく、自分の地域がどうやったら面白くなるかという市民自治を涵養する態度

マッチしない人がいる。それをみんな一様にするのは無理だと思うし、そうしようとしてもやはり限界があると思う。

これまで公共機関や、公共施設は、人によらず、同じようにできることを基準に考えていたと思うが、そうすると、低いところに合わせなければならない。この人はできて、この人はできないことを、凸凹がないようにならしていく。でも、凸凹がある前提でどのような仕組みを作れるかを考えることにシフトしないといけない状況に来ていると思う。どこの公共施設でもみんな一律のサービスを受け、どの職員が対応しても同じようにできる、そういうことを目指し過ぎている気がする。人によって異なることを前提とした仕組みづくり、それをみんなで考えていくことが今後は求められると思う。

コーディネーターの資質については、得意、不得意を前提に、みんなでフォローできる体制ができれば、コーディネーターのタイプも広がりが見られる。そういう仕組みをつくるにはどうすればいいか、考え方をシフトすることを前提に、コーディネーターについても、文化施設の在り方についても、考えていけるといえると思う。

【若林】コーディネーターはそれぞれでいいというのはその通りだと思う。コーディネーターに必要な共通の専門性と理想像だとかいうものはない。何かその人の得意な分野があれば良くて、それを専門性と呼ぶなら専門性なのだろうが、いろいろなタイプのコーディネーターがいることこそ良い。

コーディネーターの件で、唯一共通してほしいのが、コーディネーターという存在は結構大事なのだという共通認識が生まれることだ。皆さんの話を聞いていて、1カ月やそこらでコーディネーターになれるような感じでもないのに、もし公立文化施設の内部にコーディネーターを置くのであれば、一定の期間は腰を据えてコーディネーターとして活躍できるような体制を公立文化施設業界でつくっていいと思う。

そのことで、考え方のシフトチェンジが起きる場をつくっていける感じがした。

【アサダ】1周回って、小川さんが冒頭にした市民運動の話につながったという気がする。先ほど長野さんが言ったように、行政があって、公立文化施設があって、市民があって、その間にコーディネーターのいる構図があるとなると、市民はクレーマー、悪い言い方をすると意識高い系のクレーマーになりがちだ。しかし、緩やかな市民運動的な感じで、こういうのはどうかと行政に相談することによって、そもそも市民側の態度が全然違う状態になる。クレーマー化するの、要は行政サービスを消費者目線で捉えているからで、税金を払っているのにあれをしてくれなかった、これをしてくれなかったと。そういう態度のみで来られると、行政もたまったものではないし、不満を全部受け止めるのは無理だと思う。

そこでコーディネーターができる役割というのは、消費者目線の市民に対し、宮城さんの言う自治を涵養する態度で臨むことだ。自分の地域がどうやったら面白くなるか。そういう発想に立つ側になって、初めて行政や公立文化施設の担当者と話し合える。その涵養のメディア（触媒）にコーディネーターはなり得る。そう思ったときに、コーディネーターの性質、人としての振る舞いは両義性を帯びていて、「なりすまし」のレベルがポイントになってくる。ある時は行政に対しては市民からの要望を届け、説得しないといけない。市民に対しては消費者目線のクレーマーにならないように、ちゃんと自治の観点からやっていこうと話す。そう言っている真ん中にいるコーディネーターはある意味スパイ的な存在だ。

行政に丸め込まれて、市民を消費者目線のクレーマーにしないことが目的化すると、それは権力側が市民を抑えることになるので、そこは強く自覚して、市民の自治に根差したコーディネーションをしていて、行政の担当者にも分かりやすい言葉で翻訳していく、「なりすまし能力」が要ると思う。



- ◎ 市民の自治に根差したコーディネーションをして、行政にも分かりやすい言葉で翻訳していく
- ◎ 行政の人にも自治の意識を持つ

【野村】 もう一つ言うと、行政の人にも自治の意識を持てほしいということだと思う。今は行政の人が大企業の社員になってしまっている。そこは行政の人たちに対しても頑張ってもらいたいところだ。

一皆さんの話を聞いて、コーディネーターは脱成長のリーダーのような存在になれるといいと思った。右肩上がりの社会で、成長、成長でずっと来ていて、一流の劇場のレベルを上げることもいいが、地域創造はこれといった特徴もない文化施設をサポートするプランを立てて、コーディネーターを置いてもらう。すると、誰も期待していなかった施設が意外と使える、いけるということになるかもしれない。そういうところをやっていただきたい、と思いました。

今日はコーディネーターについて、本質的な話を伺うことができた。長時間ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

以 上

地域と文化芸術をつなげるコーディネーター
インタビューによる事例調査
報告書

変化する地域と越境する文化の役割

調査・発行	一般財団法人地域創造 〒107-0052 東京都港区赤坂2-9-11 オリックス赤坂2丁目ビル9F tel. 03-5573-4093 fax. 03-5573-4060
調査受託	株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-7 tel. 03-3512-1799 fax. 03-5211-1084
発行日	令和4年3月
	© 一般財団法人地域創造

